
新レーゲスタ創世譚 第二章 『聖獣狩り』

樗 みのり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新レーゲスタ創世譚

第一章　『聖獣狩り』

【Zコード】

Z9935G

【作者名】

樽 みのり

【あらすじ】

オーレンでの事件の後、カラはラスターと共に、闇森の主を追い求める旅を続けるが、行方は杳としてつかめなかつた。旅の途中、カラはラスターの古くからの友人と出会い、『家族』として迎えられる。しかし、ラスターの片腕である、聖獣ガーランが狩られるという事件が起き、カラは思わぬ事態に巻き込まれてゆく。第一章『ふたつの宝』から続く第一章です。一話一話が結構長いので、読むには少々時間がかかると思われます。

序

序

我ら命の源の
エランの話をしてあげよう

陽と月を創りし

始まりの神ナーシルの曾孫
気高き陽の男神ソルギムと
麗しき月の女神ユルソルの御子

第一はシーラ

第一はルーア

第三はユーラ

第四はリーア

最後はソーン

白銀と黄金の光を纏い
火水風地の兄弟であり
神であり人である

陽であり月であり
光であり影であり
男であり女である

いざれでもあり
いざれでもない

その白き手は
あらゆるものとし

その赤き滴は
あらゆるものとし

その碧の風は
あらゆる命を芽吹かせた

火水風地の兄弟と
灰色の虚しき岩島を
豊かな大地にし終えると
御子は優れて賢き獣らを
始まりのものとし創られた

シーラは有翼獣グリフィスを
ルーアは炎鳥サランシードを
ユーラは天馬ヘクトールを
リーアは氷狼ウールスを
ソーンは飛竜ドラゴンを

これら五族の獣らは
御子の眼となり耳となり
大陸各地に駆け行きては
見聞いたしを奏上し
御子の世創りの輔けをした

御子は獣の伝えを基となし

新しき地に欠けたるを
その御業をもちて生み出され
『名』と祝福とを餞に
陽光の下へと送られた

一人のエランは
十の新しき命を創り
十の新しき命は
百の新しき命をなし

いつしか大地は
輝く命で満たされた

御子は命の源泉なり
御子は命の道標なり
御子は命の守護なり

『エラン神を讃える詩より』

『創世記』によれば、原初の地であるティルナから、五人の御子が大陸の各地に別れ暮らされるようになつたきっかけは、ティルながら旅立つた人間達を、新しき地においても護り導くためであつた。

のち、それら五地方にエラン御業を讃え、始祖の神として祀る大神殿が建設された。

原初の地 古王国・聖都ティルナには、レーゲスタ大陸最初の神殿である《ティルナ大神殿》（精靈王殿）が築かれた。

精靈王殿 は、五人の御子の長であり、人間から《精靈王》と別格視されている、第一のエラン・シーラが祀られ、また、ティルナの國土そのものが、 原初の地 として、多くの人々から神聖不可侵の地と看做されており、他の四都市とは明らかに異なる存在意義を有していた。

東方東都キソス（後に遷都され、現在のルーシャンが東都とされたが、神殿はキソスに残された）には、第三のエラン・ユーラを祀る《キトナ大神殿》が築かれ、商業の都として大いに栄えた。

西方西都エル・トラントには、第五のソーンを祀る《エル・トラント聖王大神殿》が築かれ、美と学問の都として、未だに他の追随を許さなかった。

南方南都アル・ハラスには、第一のルーアを祀る《青樹白大神殿》が置かれ、大らかで暖かな風土の援けもあり、縁あふれる花の都として、人々に地上の楽園と謳われた。

北方北都シスには、第四のリーアを祀る《シス・イリア大神殿》が築かれ、極寒の厳しい大地に、それでも力強く生きる人々の生命が、しなやかで纖細な手仕事に映し出され、手工芸の都として、数え切れぬ芸術を世に送り出した。

これら大神殿の所在する五大都市は、 央都^{おうと} と呼ばれ、各地方要の都市として各地を統括しており、安定した平和の世を迎えてからも、その役割は変わらず、それ故に発展を続けた。 その勢いは、今なお衰えることはなく、巨大な財と権力が、央都の輝きに吸い寄せられるように夜虫の如く集っている。

大神殿は、かつては人間と共に暮らした、命の親であり、人間の兄弟である エラン を、身近で、且つそれなりの威厳を、誰にでも分かり易く、目に見える形で現わすために作られた建造物であった。

大神殿の長である、大神官をはじめ、下々の神官に至るまで、エランを（神）と、心から崇めつゝも、エランを唯一の神と定め敬うべきだと、他の神や精霊を信じる人々に強いることは、決してしなかつた。

あくまでも、レーゲスター（創世の神）として、生命の護り神として、心の拠り所となる、象徴的存在として、その存在を示し続けた。大神殿のその大らかともいえる姿勢は、土着の神や精霊を信仰する人々の心にも次第に届き、エランを信仰するしないに関わらず、多くの人々は、エランへ一定の敬意を示すようになつっていた。

そして

人間の生活の場が広がるに従い、これらの五都市以外の小都市や国、町や村にも、小規模ながらも神殿や教会が建てられ、いつしか、エランの姿を拝めぬ地は、大陸のどのような辺境に於いても、なくなつていた。

だがいつしか、これら新しき神殿に集う、一部の、より熱心な人間達は、エランの教えを、何よりも貴い教え、（正神聖教^{シン・エルナイ}）と尊称し、それまでの穏やかなエランへの信仰とは異なる、強硬な信仰心を育てていった。

彼等は、大神殿に自分達の存在を認めるよう求めたが、彼等のあまりに一途で頑なな信仰は、ティルナをはじめとする、何れの大神殿にも受け入れられず、彼等は独自の教義と活動を以つて、新しきエランへの信仰 の裾野を広めていった。

正神聖教 のような、新しき信仰の出現に限らず、時代の流れが移ろう中で、人間達の思想もまた変化をし、自由で柔軟な考えを持つ人々が増えていった。

思想の自由は、人間の生活の更なる発展を促した。 都市はいや増しに栄え、更なる繁栄を求める人々は、誰もがこれらの都市を目指し、日夜を惜しんで働いた。

大都市の安定した経済は、人口の増加に繋がり、都市が膨らみすぎた人口を抱えきれなくなつた時、都市から弾き出された人間達は、新たなる地を、求めることを余儀なくされた

彼等は、木々が枝葉を伸ばすが如く、人跡未踏の地に、新たな村や町を次々と開拓し、神の庇護には頼らず、新たな生活を始めた。これらの小さな村々は、更なる歳月と共に逞しく成長し、現在では、大都市と称されるまでに至つたものもある。

中でも特筆すべきは、五都市に次ぐ”第六の都”と称され、その価値を、古き央都の者

達にも認めさせるに至つた、大陸中央、砂漠地帯に誕生した、中央沙都ウルストであろう。

ウルストは、ひとつ所に留まることを好まず、また、エランの庇護を求めるない人間達が、寄り集い生まれた、”旅人”の国である。エランの力を恃まず、自らの力で育つた都市であるがゆえに、エランを神として崇めることはしなかつた。 ゆえに、五都市に次ぐ都市と認められてからもなお、沙都ウルストに、大神殿 は建設されはしなかつた。

新しき思想の出現、新しき都市国家の勃興は、エランを中心としていた旧き人間の世界に、新たな紛争の種を蒼き、争いが繰り返される中で、多くの人命が、都市国家が、生まれ消えていった。

大陸中の人間が、限りなく同様の平和を望むに至るまで、争いは

消えることなく続いた。

そして

そのような時代の流れの片隅で、その地は生まれていた。人間の暮らす地に添うように、緩やかに、だが、着実に成長をしていた。明確に、何時の時代から存在したのか、公には分からないとされていた。

だが、人間の生活の地が、乾季の飛び火の如き勢いで大陸各地に広がるに併せ、その黒き闇を抱く地は、大陸のそこかしこに生まれていったのだと、知る者はいつた。

それはある地方では、人間の暮らす村郊外にある山であり、またある地方では、戦で人影絶えた死都市であり、また、ある地方では、陽光の射さぬ陰鬱とした、黒い巨大な森であった。

これら闇を抱く地には、決まって古の精霊や妖、魔物といった、人間と棲む世界を異とする存在が集い、往々にして、人間が忌避する地とされていた。

このような地には決まって、主と呼ばれる存在についての伝え語りがあった。

それらは全て、同一の存在を示す言葉だとも、また、全く別個の存在なのだと云われているが、結論は出てはいない。

その正体は、それぞれの伝えにより、魑魅魍魎の類であつたり、死者の靈であつたり、魔物の王であつたりと様々であつたが、何れの場合も、それは、炎の如く赤い、闇に輝く眼を持ち、怖ろしき魔

力と、賢者に劣らぬ深き智慧を備えていると云われている。

これらの存在は、精靈王殿 の与えた呼称により《ウルド》
無明 と呼ばれ、地方により 陰鬼眼 、死都の冥王 、ま
たは、闇森の主 等の呼称で知られ、戦に等しい怖れと、憎しみ
の対象となっていた。

*

時は無心に流れ行く

時の流れに乗るもの
身は流れに老い衰え
心は流れに揺られ移ろう

時はひたすら流れ行く
如何なるものにも隔てなく
等しく流れ 流れ行く

草木に

鳥獸に

人間に

そして等しく

神にまた

序（後書き）

次回、第一章
1・地下

に続きます。

朝告げ鳥の澄んだ声が、白々とした明けの空にひとつふたつと聞こえ始める。

一日のうちで最も神聖な光と、冷たく清んだ空気が大地を覆う時間。いま少しそれば、その日最初の風が、天と地の間を静かに渡り始め、瞼の重い地上の者達の目を覚ましていく。

しかし、そこに光は届かず、風は吹かなかつた。

地下深くにあるその空間に窓はなく、外界とつながるただひとつ
の入り口には、一重の黒い鉄扉があつた。

かつて、この地下空間の存在目的は、背信者の収監 つまりは牢獄であつた。

神の教えが人々の生活の最上位にあつた時代、神の教えに背く行いをした者に、その罪を償う為の労働を行わせた、更生の場であつたとされている。神を信じない不敬の輩を改心させるため、陽光の射さぬ地下で拷問紛いの苦行を課し、それでも尚改心せぬ者には、苦しみを伴う死を与えていたなどと、様々な噂が囁かれていたが、現実の使われ方など当時の市井の人々にとつては、世間話のネタになつたとして、大した感心ごとではなかつた。

そして現在。

神の教えなどに頼らず生きる人々の多くなつた時代、これら地下に置かれた過去の遺物を記憶に留める人々は、数少なかつた。

間隔を置いて配されている、燈芯草の焰が揺らめく分厚い岩壁の表面は、じつじつとして、無骨で造りの荒い印象を与えたが、その積み重ねられた岩と岩の隙間は、薄いナイフの刃一枚も突立てることが出来ぬほど、巧みで頑強な造りだった。

外ではブナの葉が黄色く色付き、からりとした好天が続いていたが、この岩壁の内側は、いつでも陰鬱でじつとりとしていた。

逃げ道のない地下の空気は、ほとんど流動することなく、何かを抱え込んでいるかのようにずしりと重く、淀んでいる。

ツンと目鼻を突く、酸味の強い刺激臭が、そこには常にあった。四本の歩廊に挟まれた三列の分厚い岩壁には、岩を穿つように造られた大小数十の牢が連なつていて。

それら牢内の住人が排泄した糞尿が、岩牢の内と漏れ出でた歩廊の溝で腐敗し、地下空間の衛生をより劣悪なものとしていた。

牢の内からは、幾種類もの鳥獣の唸りが、傷つけられた樹皮から滲み出す樹液のように、絶えず漏れ聞こえている。

岩牢は闇の先へ先へと、途切れることなく連なつていた。

だが、延々と続くかに思えた岩牢は突如途切れ、四本の歩廊はひとつに交わり、更に数十歩進んだ先に、巨大なドーム状の天井を持つ異空間が現れる。

中央には、白大理石に赤・青・緑の玉や金箔で装飾された長方形の壇が設けられ、四方の壁と床は磨き上げられた黒輝石で造られており、水鏡のように、その場に在るもの姿を映し続いている。

壇上の四隅には、燭台に挿された蠟燭の焰の灯りが、煌々と堂内を照らしている。

にもかかわらず、そこは岩牢以上に陰鬱で、腐水に満たされた泥湖に沈められたかのように、胸の悪くなるような、息苦しげ凍えた空間だった。

この地下に集う者達は、その場を 祭壇 と呼び、様々な儀式を行っていた。

先刻、行われ始めた儀式で用いられている、献上の香 沈麝薰香の濃厚な甘い香りが、祭壇の間から岩牢の歩廊を通り抜け、遙か離れた詰部屋にまで漂つてきていた。

外界に一番近い詰部屋は、二重の鉄扉から十数段の階段を下りた踊り場の、直ぐ向かいにあった。

常に一・三人、雇われの牢番が交代で、岩牢の住人達が万が一にも逃げ出さぬよう見張っているのだが、都合が付かなかつたのか、現在部屋には一人しかいない。

窓のひとつもないの、日夜を問わず大きめのオイルランプに火が灯されている。

ランプの放つ光は、燈芯草の小さな灯りが僅かにあるだけの岩牢に比べたら、黄色に暮れた色合いであつても、格段に明るさを感じられた。

ランプの下には、昨夜の宿番であつた大柄で体格の良い男が机の上に足を組み上げ、椅子の背にだらしなくもたれかかりながら、瓶ごとの安物ホーリュ（地酒）を時に呷るように、時に嘗めるように飲んでいた。

「 今まで、そんなとひりで眺めてくるつもりだ？」

男はだらりと頭を落とし、つぶやくように言った。 伸びたばさばさの黒髪に隠れ表情は見えないが、その目は濁り虚ろなことが、低くかすれた声に現れていた。

（……）

ランプの灯りの届かない、階段下の踊り場で、ひとつの人影が怯えたような、落ち着かぬ様子で立っていた。

薄暗いうえに外套のフードを口深に被つてゐるため、その年齢も

性別も判然としないが、闇に浮かび上がる程に白い手をしている。

手を組み合わせた胸元には、鈍い輝きを見せる銀細工の鎖が時折、薄闇に浮かぶように見え隠れしている。

人影は幾度か足を踏み出し、男に何かを語りかけようと口を開いているようだつたが、躊躇いがあるのか、言葉を発せぬまますぐ身を引いてしまう。

「無駄な努力は、せぬことだ。 お前の望みは俺の望みと同じ」

男の言葉の最後は、闇を引き裂くが如き獣の奇声 いままやに訪れた死の叫喚、によつて搔き消されてしまった。

踊り場の人影は明らかに動搖し、救いを求めるよつに、再び男に向かい言葉を発しようとしたが、その言葉もまた音にすることが出来ず、人影は細く白い手で顔を覆うと、幾度も頭を振り、激しく苦惱している素振りを見せた。 手に覆われた顔の下で、銀細工の鎖の先に下がる透明な滴型の石が、水を湛えた玻璃杯のように揺らめき、幽かな光を放つていた。

だが男は、何も知らぬ風にホーキュを大きく呷つた。

己の肩を搔き抱き、幾度か大きな呼吸を繰り返すと、踊り場の人影は男の顔を睨み付けた。 しかし、その行為は無駄と知つてか、直ぐに諦め、怒りをぶつけるような勢いで階段を駆け上がり始めた。

その音は、小さな小鳥が羽ばたくよりも軽やかで、どこか儂げな印象だつた。

鉄扉が二回、開かれ閉じる重く鈍い響きが、地下に幾重にもこだました。

その鈍重な響きのむこうに、小さく軽い足音が遠ざかっていくことを、男の耳ははつきりと知ることが出来た。

先刻、闇を劈いた獣の断末魔の残響は消え去り、現在はただ、甘

い沈麝薰香の香りに融け込んだ新鮮な血の、胸をつく生暖かな臭いが、詰部屋までを侵そうとしていた。

断末魔の声と血の濃香は、岩牢に封じられている鳥獸達に激しい動搖を与え、彼等の怒りと恐怖を露わにさせた。理性の欠片もない狂つた咆哮に、地下の空氣は激しく揺さぶられ、全ての人間を切り裂き殺さんばかりの憎惡の刃を、男は全身の皮膚を感じた。

もちろん、実際に傷を負うことない。

かといって、殺意を顕かに感じさせる程強烈な憎惡の対象であり続けることは、例え獸のそれであれ、快いものではなかつた。

だが、皮膚を裂ぐが如き激しい憎しみと怒りを身に受けることで、男は望んだものを、成すべき事を、そのために選んだ道を、忘れることなく胸に刻み続けることができた。

ともすれば、道半ばでかつては陽光の下へと戻りたくなる、己の心の弱さや迷いを、憎惡の叫びは難き払い、新たな決意を成し遂げるべく、むしろ鼓舞さえしてくれる。

男は残りのホーシュを一気に呷ると、そのまま頭上のランプに目を止めた。

「そうだ。全ては我が意思。自ら選んだ。

思い描くだけでは、待つだけでは、為せぬ望みを、果たす為

町中に、一日の始まりを告げるラッパの音が響き渡つた。地下にも遠く聞こえるこの音は、地下の住人にとっては、地上の者達の大まかな時刻を知るという以外、無意味なものでしかなかつた。

男は酒に濁つた目をゆつくり、詰部屋から続く岩牢の闇へと向けていた。

田には見えぬ、闇に沈む岩牢の内には、数知れぬ鳥獸が封じるよう押し込められ、これら岩牢の闇の先にある 祭壇 では、聖

血奉還 の儀式が、数日に一度行われていた。

古の民。 正しき血脉。 真の神に、 レーゲスタの大地へ再臨
いただく

男には愚かな妄想にしか思えぬそれが、 この地下空間に集う者達の願いであり、 その妄想が、 彼等のいかなる行動にも正当性を与えていた。

男は、 全てを知った上で、 自ら望んでその内に身を投じ、 その手足になると誓約をした。

だが、 未だ心のどこかで、 ここに集う者達に、 自身に、 抑え難い嫌悪を感じずにはいられなかつた。

『 長き……望み……捨てる……か 』

しわがれて、 今にも消えてしまいそうな老人の干乾びた声が、 間のどこからか、 枯れ草の風に鳴る音のように滲み聞こえてくる。

男が迷いを感じる時、 必ずと言つてよいほど、 不鮮明な、 だが妙に心に掛る声で問いかけてくる。

「 おい、 あんたをお呼びだ。 どうも、 大がかりな 狩り をするらしい。 大物が掛かりそななんだとよ。 ここでの守りは交代だ」

一重の鎧扉を、 紙の板のように軽々と開け閉めし下りてきた鬚面の男は、 先程耳にした声とは対照的に野太かつた。

大陸の標準語であるシュア語を話してはいるものの、 早口な上に北方特有の巻舌音が酷く、 この鬚面の言葉を聞き取るのは骨が折れた。

だが鬚面の男は、 相手の心中などお構いなしにべらべらと話を続けた。

「それにしてもよ、この儀式、後の臭いは何度嗅いでも生臭くて堪らねえな。酒とタバコをいくらやったところで、到底ごまかせねえ。ゲロの臭いの方がよっぽどマシつてもんだ。聖獸とかつてのは、見た目はいいが、中に詰まってるモンは最悪だな。臭いは酷えわ、猛毒をもつているか知らんが、床にこびりついていた血に触れただけで、大火傷負つたみたいに爛れやがるし、ろくなモンじゃねえ。なあ、そう思わねえか？」

男は胸ポケットから、くしゃくしゃになつた巻タバコを取り出すと、ランプのショードを押し上げ、火を点け口の端にくわえた。

「しかしよ、今日の贊は 大鳳 だつたか？ あの四対の白羽。あの羽だけでも、売れば一・三年分の遊び金が出来るつてのになあ。生きたまま金持ち共に吹つかれりや、一生喰いつぱぐれねえだけの値が付いたかも知れねえつてのに。その聖なる御子様とかつてのは、なんでもまた、聖獸の血肉を大量に必要とするのかねえ。いまどき、そんな神話の世界の獸なんざ、そうそういうもんか。大陸中の聖獸、その血を少しでも引く鳥獸共を見つけ残らず焼き集めて來い、なんてよ、無茶言つよなあ？ もうとうに絶滅している種族だつて多いつて話じゃねえか？」

鬚面の言葉など聞こえぬよつて、男は空いた瓶を鬚面の顔横すれすれに投げた。

投げた先が丁度、ゴミ捨てになつていたからなのだが、鬚面の顔は明らかに引きつり険しくなつた。背丈はどちらの男も大差なかつたが、重量面で、鬚面の男が明らかに勝つていた。

鬚面は拳を握りしめ、俯き座つたままの男をしばし睨みすえたが、怒りをなんとか飲み下すと、嘲るような笑いを浮べ話を続けた。

「ほんとによ、『立派な経歴を持つてるあんたが羨ましい限りだ。

入つて半月足らずの新入りだってのに、随分と重用されるもんだ。
これで 狩り は五度めか？ 七にはなるか？ あやかりたいも
んだな。 狩り の報酬はいいからなあ。 こんな詰部屋の守り
番とは違つて。 酒も女も買いたい放題だろ？ もつとも、元
騎士 様というだけで、女は選り取り見取り、女の方から擦り寄つ
てくるんだろうな。 あんたは女好みの顔をしているしなあ？ ど
うだ、今度オレも一緒に 宿 に飲みに連れて行ってくれねえかい
？ 僕の行きつけの 宿 程度じゃ、好い女になかなか当たらなく
てよ。 なあ、ダンナよ」

鬚面は下卑た笑いを浮かべながら、馴れ馴れしく男の肩を叩いた。
鬚面のくわえた巻きタバコから、灰が男の肩に降り落ちた。

『源の思い、忘れたか。 その為に要するを、排するべき、を、
忘れたか……』

枯れた老人の言葉が、男の耳朵で幾度も繰り返し響いた。

男は、鬚面の存在自体を無視するように、無言のままゆらりと立
ち上がると、重い足で外界へ続く階段を上り、一枚の鉄扉を開いた。

1：地下（後書き）

次回 2：見知らぬ街 へ続きます。

次回よりようやく、主人公が再出いたします。

2・見知らぬ街

2・見知らぬ街

十の月に入り、過ごしやすい爽やかな天気が続き、旅人にとって実によい季節となつた。

夏の厳しい陽とは違い、この時期の陽光はまるやかで柔らかい。さらに、紅に黄に色付いた木々の葉が、目を楽しませてくれる。春先と並び、旅には最高の季節かもしだれない。

現在旅をしているキトナという地方は、旅立ちの前まで住んでいたオリアス地方より、かなり北に位置する。

同じ十の月でも、オリアスではまだ暑さで汗ばむことが多く、木々もまだ青々としていたものだ。場所が違つと、季節もずいぶん違つものだと、感じずにはいられない。

澄んだ青空の下、森の動物達は隠れることもせず、陽の光の心地よさを楽しんでいた。

おそらく、もうひと月もすると木々の葉はすっかり落ち、冷たい冬の風ばかりが、大地を嘗めるように走りだす。それまでの限られた幸せな時間を、如何に楽しむか、彼等はよく知っている。

オーレンという町の鍛冶屋で下働きをしていた頃、午前の仕事が終わった僅かな空き時間に、自分もよく人目がない気に入りの場所に座り込み、陽の光を思う存分に浴びていたことを思い出した。

「けつこう、贅沢な時間だつたんだよな、あれつて……」

がつくりと頭を落とし見た自分の影は、あるかないか分からぬほどに薄い。

木の葉の茂る森の中を歩いているとはいえ、陽の光は葉の間をすり抜け、自分の身体の上にも注いでいる。それなのに、土の上には木々の枝葉の影ばかりが目立つていた。

魔物の王 とも言い伝えられる 閨森の主 と取引をし、《影》を奪われて以来、どんなに照り付ける陽の下でも、影はほとんど生まれなくなつた。

命の有る無しに問わらず、この世界に存在するものは、等しく、光の下では自分だけの《影》を持つものだ。

言いかえれば、《影》を持たぬものは、少なくとも一般的な人々にとつては、あまり普通の存在とは見なされない。

おまけに、《影》を失うに併せ、身体は色硝子のように透けてしまつた。辛うじて色が残つているお陰で、輪郭が多少ぼやけつても、人間の姿を保つて見えるが、自分の身体を透してその先の景色がはつきりと見える、というのはあまり気持ちの良い状態ではない。自分で気持ちよくないのだから、他人が見たら、はつきり言って不気味な存在だろう。

故に、旅人が使う普通の街道ではなく、人目がないこの森の中を歩いている次第である。

オーレンを出てからの旅暮らしも、もう五ヶ月目に入つていた。鍛冶屋でこき使われていた時とは違つ、歩き詰めの日々に耐えられるのかと、自分でも不安に感じた時期もあつたが、身体は意外に早く慣れた。野宿も、嬉しいとは言えないが、食べる物と暖かな火が必ずあつたので、たびたび食事を抜かれたり、部屋に小さな灯火すらもなかつた鍛冶屋での生活に比べたら、いつそマシだと思った。

しかし、人の目を避け続けることが、こんなにも疲れることだと
は思いもしなかった。

オーレンの町でも、周囲の嫌悪をかわぬよう、目立たぬよう、（自分としては）控えめに暮らしていた。

身元の知れない流れ者の孤児であり、小柄で非力な上に不器用で、雇い主達の満足いく働きができなかつたため、怒鳴られ殴られることはしょっちゅうだつた。

しかし何より、雇い主ほか、多くの人々の嫌悪を招いたのは、自分の金色の瞳の所為だと知つていた。

ただ「金色」というだけならば、明るい茶系色の瞳といふことで済んだかもしれない。

だが、その瞳は闇の中で光つた。

夜動く獣の眼のように、暗い闇夜に輝く月の如く自らが光りを放つた。

迷信深い人々は、その瞳を魔物の眼と罵り、怖れ、忌み嫌つた。周囲のいらぬ不安を招くことは、自分の身を危険に曝すことだと身に沁みて知つていた。

自然、人の目のある通りを歩く時には端を歩き、目は伏せがちに道ばかりを見ていた。

このような経験上、人目を避けるという点では、何も変わらないと思つていた。

しかし、現実には大きく違つていた。

以前は瞳さえ見られなければ、知らない人間にはただの小さな子供で済んでいたが、今の自分は姿すら見られてはまずい状態だつた。道に外れたを行いをしたわけでもないのに、堂々と陽の下を歩けない。夜盗などの方が、よほど堂々と明るい陽の下を歩いているに

違いないと思うと、自分が招いたこととはいえ、なんともやるせない気持ちになる。

「カラ。 ひとやすみしよう」

先を行くラスターが立ち止まり、視線で大きなブナの木を示した。黄色く色付いた葉が陽に輝き眩しかった。ラスターの少し暗い金色の髪も、全身を包む白い衣も、陽の光に照らされ眩しかった。ラスターの肩を離れ、一足先にブナの太い枝へ舞い降りた有翼獣のガーランは、気持ちよさ気に伸びをすると、枝の上に伏せ、すっかり昼寝の体勢に入ってしまった。

カラ、カラ……ええっと、ああ、オレか。

カラは、ぼんやりする頭を振りながら、首から下がる古い木製のペンダントを手に取った。その表面に彫られていたはずの自分の名前は、鏃で削られたかのように見えなくなっていたが、厚みのある側面の彫り物は、今もはつきりと読み取ることが出来る。

古い北方の文字コーラで彫られた「カラ」という彼の愛称と、両親が自分に贈った守りの言葉だった。

「カラ。 カラ オレはカラだ。 しつかり覚えろよなあ」

カラは彫り物の側面を白い指でなぞりながら、何度も口の中で自分の名を繰り返した。

常に自分自身で注意していないと、自分の名前でありながら、全く思い出せなくなる。

カラは、闇森の主との取引で、《影》だけではなく《名》も失いかけた。

幸いにも、両親の遺したペンダントの側面の文字が残っていたおかげで、いまも「カラ」という愛称だけは持っていたが、欠けることのない完全な《名》は、どうやっても思い出すことができなかつた。

闇森の主に《名》を渡した者は、その後、如何なる名であると持つことが出来なくなると、取引の前、闇森の主は忠告をしていた。

その忠告は正しく、カラ、という愛称に限らず、他の適当につけてありがちな《名》を名乗るうとしても、自分はおろか、周囲の人間もその《名》を覚えおくことは出来なかつた。

拭い取られるかのように、《名》の記憶は薄れ、失われていく。そして終には、「カラ」という少年の存在自体が、記憶から消し去られていくのである。

現在は旅暮らしで、ひとつ所に長く留まることはないに等しいので、この呪いの影響はあまりないようにも感じられるが、そもそも自分が自分の名前を覚えておけないなんて、あまり笑えた事ではなかつた。

一足先に、大きなブナの木陰に入っていたラスターの横に、カラも足を投げ出すように座り込んだ。風が、火照っていた頬をやんわりと撫ぜながら通り過ぎていく。

「ラスターも座つたらいいのに」

横に立つ長身の青年の顔を見上げながら、カラは水袋から一口の水を含んだ。

ラスターは何も答えず、しばらく東の空を眺めていた。その右肩に、樹上にいたガーランがふわりと舞い降り、主人の頬に額を摺

り寄せ、甘えるじぐさをとつた。ラスターも応えるように、ガーランの喉下を撫ぜた。

「ガーランは本当にラスターが好きなんだな。オレのことは嫌いなくせに……」

ガーランが煩いといわんばかりに、長い尾を一回激しく振つた。

「ふん。邪魔して悪かつたね」

拗ねたように、カラはそっぽを向いてまた一口水を飲んだ。天気が良いせいか、妙に暑く喉が乾く。

涼やかな風が、また通り過ぎた。

横目でラスター達を見ると、ガーランは猫のようにクルクルと喉を鳴らし、幸せそうに目を細めていた。

神殿にある神の彫刻のように、端整な容姿のラスターと、輝く黄金の翼を持つガーランが一緒にいる姿は、まるで一枚の絵画のようだ、カラは常々思つていた。そんな彼等の姿をぼんやり見ていることが、カラは結構好きだつたのだが、ガーランは「見られているだけ」でも気に触るらしく、あからさまな威嚇の視線（と感じられる、険しい目付き）を、カラに向けることがしばしばあつた。察するに、彼女は大好きなラスターとの旅に、カラが加わったことが気に入らないのではないかと思つた。邪魔者を疎ましく思うのは、恐らくは当然の心理だ。

ガーランはグリフィスという聖獣の一種で、猫よりも一回り大きな黄金色の身体をしており、顔面には鷲の様な黒く鋭い嘴と、鮮やかな緑の宝石の様な瞳を、通常の左右一対の他、額にもひとつ有していた。

背には一対の大きな翼が生えており、陸を行くも空を行くも気まま様子だった。

見るからに氣位の高そうなガーランは、人間の言葉をかなり正確に把握するらしく、うつかり彼女を傷つける言葉（例えば「獣のくせに」などという見下した言葉）を吐こつものなら、気が付いた時にはその鋭い爪か嘴が、発言者の肉のどこかを引き裂いている。カラも「ただの動物じやないか」などと勢い口がすべり、幾度となく顔を引っ搔かれた。

高く澄んだ鳥のさえずりが、あちらこちらから聞こえてくる。穏やかな陽の光を浴びて輝く色付き始めた木々の葉や、風に揺れる草花を見ていると、自分が何のために旅をしているのか忘れてしまいそうになる。

「気持ちいいなあ……」

心地の良い音色に眠気を誘われ、カラはゆっくりと瞼を閉じた。五ヵ月前のあの日まで、自分がこんな旅に出ることになるなど、いくら空想好きなカラでも、想像だにしなかった

* * *

レークスタ大陸東南部、オリアス地方にオーレンの町があり、その北辺に 間森 と土地の人々から怖れられる、広大な黒い古の森があつた。

千年を生きる魔物の長 間森の主 は、この森の奥深くに棲んでいると云われていた。

如何なる願いも叶える力を持つこの魔物の長に、ある時カラは遇い、願いを訴えた。

間森の主 は、願いを叶える代わりに、カラの持つ『ふたつのお宝』を渡すことを条件に出した。

『名』と『影』

それが、闇森の主の言う『ふたつの宝』だった。カラは迷わずに応じた。

闇森の主は、そのふたつを渡したところで死ぬわけではないと言つた。死ぬことがないのであれば、そんな物はなくても、どうともなると思った。そんな物より、殴られ罵られ見下され続ける状況から抜け出せるだけの力が欲しかつた。

金や宝石、などとも思つたが、使えばなくなる（盜難の怖れもある）物より、自分と共に在り続けるものをカラは望んだ。

しかも、大胆にも闇森の主に『ふたつ』宝を渡すのならば、自分もふたつ願いを叶えて貰つてよいはずだと訴えた。

五の月の風のない終月の夜、闇森の主は、カラの訴えを聞き、『ふたつの宝』と引き換えに、ふたつの願いを叶える約束をした。先にカラの願いを叶え、その後に闇森の主がカラの『ふたつの宝』を貰い受けることとなつた。

闇森の主は約束どおり、カラの願いを叶え、そして、『ふたつの宝』をカラの身体から引き離す呪いを始めた。呪いは、完成されるかに思われた。

しかし、聖都ティルナの精靈王殿に仕える獣騎士、アラスター＝リージェスが現れ、闇森の主の呪いの完成を妨げた。有翼の聖獣ガーランと共に闇森の主を追い続けているというラスターは、結果、闇森の主の手からカラを救つてくれた。あの時ラスターが現れ、闇森の主の呪いを妨げなければ、カラの『影』は完全に奪われ、愛称の「カラ」という『名』の欠片ですら、ペンダントからは削り去られていたのだろう。

『名』は光、『影』は存在

レーゲスタ大陸に古くから言い伝えられる言葉があるという。

光ある世界に存在するものにのみ、《名》は「えられ、この世界に存在する者にしか、光は注がず、《影》は生まれない

《名》と《影》を失うということは、この光ある世界での暮らしどと縁を切る、ということになるのだと、漠然とだがカラにも理解は出来た。

闇森の主の呪いが完成しなかつたこと、ラスターから渡された短剣にある、命を護るという不思議な貴石オステイルの力に護られている現在はまだ、カラはこの光ある世界に留まっているが、それはきりぎりの境界線に立っているようなものだと、ラスターはカラに言った。

「この状況を変えたいと、以前と同じ暮らしの出来る身体に戻りたい、と望むのであれば、闇森の主に奪われた《ふたつの宝》を取り戻し、完全な《名》と《影》を持つ、「普通」の存在となることが必要だ、という結論にカラは達した。

ラスターは、どんな問いや疑問にも、明確な答えとなる言葉を口にしてはくれないので、それが真に正しい選択なのか確信は持てないのだが、ラスターがカラに、旅への同行を提案したことから考えても、カラの決意は、おそらく大きな間違いではないのだろう、と信じることにしていた。

カラは太陽も月も、灯明の小さな灯りすらない、無の闇の世界になど行きたくない。 そうである以上、選択の余地などは無いに等しいとも言えた。

闇森の主を追つて いるというラスターに同行し、自分の意思で闇森の主に渡した《ふたつの宝》を、自分の手で主から

取り戻す。

自分の『名』と『影』を取り戻すための旅。闇森の主を捕らえ、『ふたつの宝』を奪回するまで続く、どれほどの歳月を要するとも知れぬ旅。

ラスターから得られる僅かな情報によれば、カラから『ふたつの宝』を完全には奪い損ねた闇森の主は、オーレンから北に向かい、移動を続けているのだという。

だが、オーレンを出てのこの五ヶ月、闇森の主の行方は杳としてつかめなかつた。

以前、カラはこれから先、どのようにして主を追つていくのか、と尋ねたことがあつた。その問いにラスターは、「あれ（ラスターは闇森の主とは決して呼ばない）の残した痕跡を拾い、辿り、進んでいく」とだけ答えた。

どのような痕跡を、どのようにして拾い辿つているのか、また、行つた先々で、どのような情報を得られたのか得られていないのか、ラスターはカラに何も語つてくれない。

仮に、ラスターから事細かな説明を受けられたところで、理解しきれる自信はなかつたが、何も知らず、何も知らされず、次に向かう地すらも知りようがないカラはただ、淡い焦りと無力感を抱いたまま、ラスターに従い付いて行くしかなかつた。

旅はまだ、始まつたばかりなのだ。

* * *

「つらつらとしているうちに、いつのまにかすっかり寝入つてしまつたようだつた。

遠くから人々の話声が聞こえている。

寝入る前に聞いていた小鳥のさえずりとは随分ちがつて、せわし

なく煩い氣がする。

まだ瞼は重く、寝起き直後の浮遊感をもつ少し楽しんでいたい気分だった。

大きな枕の上で「口口」と一回転すると、また程よい眠気が襲つてくるのが分かつた。

このゆらりゆらりとした感覺。 波間に揺られる小船に乗つてゐみたいだと思った。

もしかしたら、さつきまで秋の森をふうふう言いながら歩いていたのは全部夢で、本当は、波蹴立て走る船で旅をしているのではないかとさえ思えてきた。（船には一度も乗つたことは無いのだが……）

先ほどからずっと身体に感じ続ける、緩やかで心地の良いゆらり感。 この感覺は、もうどれほど世のことが忘れてしまつたが、夏の盛り、水浴びに行つた小さな湖の水面に浮かんで眼を閉じ、水の優しい揺らめきを全身で愉しんだ、あの波の揺り籠に似ていた。 おまけに、少し遠いが時折聞こえてくる汽笛の音。 昔語りに聞いた、穏やかな海を航海した勇者の感想にとても似ている。

「ふううん。 波に揺られるつて、本当に気持ちいいもんなんだなあ。 ……けど、なんで船なんかに、乗つてんだろ？」

次第に頭は覚醒を始め、目は、周囲の様子を徐々に、はつきりと映し始めた。

「…………？」

明らかに知らない場所だった。

どうみても、夢の中で思い込みかけた波の上の船室ではなく、陸上の室内のようだ。

その証に、寝台から起き上がり足を床に着くと、先程まで感じていたゆらり感は消え、どっしりと安定した固い床板の冷たい感触が脳天にまでさつと伝わった。

顔を上げた正面にある窓から聞こえてくる人々の語らいの声や、車輪を引く蹄の音から察するに、ここは結構な人口を抱える、小・中規模の街ではないのだろうか？ 遠くには、これは聞き違いではなく、確かに汽笛の音がする。港を有する街ということだ。そうなると、予想以上に大きな都市かもしれない。

自分の置かれている状況がつかめず、慌てて首もとのペンダントをまさぐり、側面の文字を指で何度も何度もなぞった。

「オレは、 “力……” えつと、 “力 カラ” で、旅の途中 なんだよな。 それで、ええつと 」

比較的広い室内をカラはきょろきょろと見回した。二つの寝台とその横に置かれたそれぞれの小机。部屋の真中にはランプが置かれた円卓と椅子が三脚、入り口の右横には水差しと水盆が乗せられた小机がある。

天井には太い梁が渡され、所々が僅かに色褪せてはいたが、隅に蜘蛛が巣を張ることもない、掃除の行き届いた、どう見ても中級以上の旅籠の一室だった。

「なんで オレ、こんなところにいるの？」

カラは窓の外を見ようと、寝台から立ち上がった。軽い眩暈に襲われたが、気にならなかつた。

窓の外の陽は落ち、街の通りは人口の灯火で明るく照らされていた。男を誘う、酒場女の甘ったるく鼻にかかった声と、既に酒が入り気の大きくなつた男達の声が、あちらこちらの薄暗い通りから

聞こえてくる。

カラは田を閉じて、思い切り頭を振つてみた。
眩暈だけが更に
酷くなつた。

するすると窓枠に寄りかかるように座り込むと、ぽかんと口を開
け、ただ天井の太い梁を見つめた。

2・見知らぬ街（後書き）

次回 3・新たな出逢いへ続きます。

3・新たな出逢い

3・新たな出逢い

人生を語るほど、生きているわけではないが、生きた年数に見合うくらいの苦労はしてきたつもりだった。

生きていれば色々なことが起きる。

ありがちな言葉だが、カラも実際そうだと思っていた。先読みの能力でもない限り、一寸先に何が待ち構えているか、分からぬ。前もつて危険を知ることが出来ていれば、これまで数々あつた嫌な出来事の少なくとも半分は、回避できただに違いない。

しかし、カラに先読みの能力はない。

向かってくる未来は、どのようなものであれ避けようがない。であれば、自分の思いもしない事態にぶつかっても、できるだけ早くその状況を理解し、受け入れ、その中で如何に被害を最小に抑えるか、を考えることが得策だと、カラは自分に言い聞かせていた。

しかし、何故か今の状況は、なかなかどうにも理解が出来なかつた。

「 痛い」

天井の比較的太い梁を見つめたまま、頬をつねつてみた。単純だが、目を覚ましているか確認するには一番手っ取り早い方法だ。

「痛い」といふことは、目、覚めてるんだよね。でも、ここ、

見覚えない んだけどな

改めてゆっくり室内を見回したが、どこにも、他の誰の存在も確認できない。窓の外からは時折、何が楽しいのか分からない甲高い笑い声が聞こえてくる。

ぼんやりする頭をまた軽く振ると、床についていた手を、円卓のランプを掴むように伸ばしてみた。

手を透してランプの丸い硝子シェードが見える。その内で揺らめく焰の暖かな黄色も、手を通り抜けてはつきりと見える。

「やつぱり透けたまままだし 」

光にかざした右手を、そのまま白い壁の前に広げてみた。壁に映し出されるはずの手の影はぼんやりとして、消え際の虹のように曖昧で、あるかないかわからない。

「なんだ、別に元に戻ったわけじゃないんだ……ちえー……」

こんな人の多い場所にいるといつことは、もしかしたら普通の身体、に戻つたからかもしれない、といつ淡い期待が頭を過ぎつたが、そういうわけではないらしい。

だが、それならば尚更、何故このような町中の、しかもこんな旅籠の一室に自分がいるのか、カラには皆目見当がつかなかつた。眠る前に目についていたのは、色付いた森の木々だった。幹にもたれ座つた自分の横には、ラスターとガーランがいた。

しかし今、部屋のどこにも一人の姿は見当たらない。旅といつてもたいした荷物を持っているわけではないが、ラスターの白い外套も腰に帯びている長剣も、どこにも置かれているようには見えない。ちょっと部屋を出るだけならば、どちらも不要なはずだ。

「ええっと、冷静にこの状況を考えてみると、どうこうとかといふと……ひょっとして、置いてかれた……とか？」

透けた手にまた目を遣りながら、カラは頭の芯がジンジンと痺れてくるのを感じた。それに、なんだか今日は妙に喉が乾く。ぽんやりランプの灯りを見ていると、何故か、昔のことが次々と思い出された。

仕事がのろい、使えない、散々殴られた末に、道端に捨てられたことがあった。あの後は、悔しさと痛みとひもじいで、一晩中物陰に隠れて泣いて過ごしたつけ。

特に怒られも殴られもせず、無難になんとか仕事をこなしていたのに、目が覚めると、人買いに売り飛ばされていたこともあった。あの時は、他の買い集められた子供達に、珍しくも苛められることがなく、むしろ仲良くなれてちょっとだけ良かつたけど、その後とんでもない先に売られて、苦労したつけ。

自分の意思とは無関係に、自分の置かれる状況は、どんどん変わつていくものなのだと、カラは知っているつもりだった。

放り投げるよう伸ばしていた足を引き寄せる、両腕でしっかりと膝を抱え込み、頭をその中に埋めた。右腹の辺りに、硬く長い物が突つ張った。ラスターに与えられた短剣が、腰紐に結わえ付けられたままだった。

別にいいじゃないか。これが初めてじゃないし。ラスター

なんて、無表情で何考てるか分かんないし、喋らないし、喋つても何言つてるのか理解できないし。騎士にしてくれるつていつたのに、読み書き以外、何にも教えてくれないし。ガーランだつて僕のこと、嫌つて相手もしてくれないし。一人になつても、前と一緒だよ。困ることは、多いけど、前と、一緒だ……。

頭がぼんやりして、カラは自分が何を考えたいのか分からなかつた。頭を乗せた膝が湿っぽくなり、俯いていると鼻がグズグズとして、絶えずすらなくてはならなかつた。

拳を握り、カラは軽く床を叩いた。

叩かれた床板には、拳の形そのままで浅い穴が開いていた。もう一回、もつと強く叩いてみようか。そんな尖った気持ちが膨らんできて、抑えられない。

「まあ。窓が開いているのね。この部屋、とても冷えているわ」

突然の声だつた。

鼻をすする音に紛れてか、扉が開く音にも閉じられる音にも、全く気が付かなかつた。

顔を上げると、扉の前に白髪の年配女性が、盆を片手に静かに立つていた。

予期しない来客に、カラは一瞬呆気に取られた。老婦人の柔らかな微笑に引き込まれ、ついさっきまでの重苦しい、尖った気分が瞬間、和らいだように感じた。

気持ちが和らいだのも束の間、カラは自分の身体のことを思い出した。透けている身体のこと（影もないこと）がばれたら、化物扱いされるのがおちだ。罵られ殴られ蹴られるなんて、出来るだけ避けたいことだ。

カラは、慌てて身体を覆う何かを探した。外套、毛布でもいいから大きな布が欲しかつた。だが、窓から寝台までの間には老婦人が立ち、悪いことに、カラの外套も寝台横の小机の上に置かれていた。

こうなつたら、窓の外に逃げるしかないと思つた。今、通りは暗くなり、道を行く人々も、酒が入つてカラの姿などはつきり見え

ないに違いない。少なくとも影のあるなしあは、ほとんど関係ない明るさだ。

しかし、飛び降りるには少々高すぎた。

窓から改めて下を覗くと、どうもこの部屋は二階にあるらしく、しかも、飛び降り先は硬い石畳だ。

焦っているカラを尻目に、老婦人はゆっくりと円卓に歩み寄り、手にしていた盆を置いた。

老婦人の動きは流れるように静かで、歩くにも盆を置くにも、何一つ音を立てなかつた。

逃げる場に窮しつつも、カラは滑らかな老婦人の動きに見蕩れてしまつていた。

老婦人はゆっくりと顔をカラに向けると、穏やかに微笑みながら、落ち着きある品の良い口調で話しかけてきた。

「突然入つて驚かせたみたいね。ごめんなさい。あなたのこと
はアラスターから聞いています。カラ。さ、こちらへいらつし
やいな」

思わず言葉に驚き、カラは老婦人の顔をじっと見つめた。

“気品ある”という表現が、本当にぴたりな老婦人だった。

髪は総白（輝く白銀の色ともいえる）になつてはいても、その涼しげな目鼻立ちは、人々の目を惹きつける魅力を十分に持つていた。老いてなおこの美しさならば、若い頃はさぞや多くの男の目を釘付けにしたであろうことは、子供のカラにでも容易に想像の付くことだつた。

歳月ゆえのほんの僅かな小皺はあるものの、つるりとした卵形の顔を豊かな白髪が覆い、後頭部でふんわりと髪に結つてある。

淡い灰色のドレスに薄紫のショールを羽織つただけの、ごく普通の女性の装いだった。

簡素な木の笄以外、何一つ飾り気のない質素な装いなのに、カラ

にはこの老婦人が、自分なんかとは縁のない、昔語りに出て来るどこの国の王妃のようを感じられた。

見惚れるように、その老婦人の姿を見ていると、カラはふとしたことに気が付いた。

老婦人の灰緑色の瞳は、カラのいる方角には向けてられても、その瞳は全く動かず、カラを映してはいないようだった。

「あの、皿……」

おずおずと聞くカラの声に、老婦人はふんわりと微笑みながら、椅子の一脚を手で探しだし、腰掛けた。

「明るい暗いくらいはわかるのよ。お婆ちゃんになつたからではなくてね、若い時から少しづつ悪くなつてしまつたの。慣れね」

カラは何となくホッとして、老婦人の側に立つた。すると、老婦人のひんやりとした指の長い手が、カラの腕をそつと握つた。

「まだ熱が残つてゐるわね。鼻も、ぐずぐずいゝてゐる。さ、これをお飲みなさい」

老婦人は、盆に載せてきた緑色の小瓶から、小さな杯にどろりとした液体を注いだ。見るからに、苦そうで不味そうな黒色をしている。

「苦いけれど、よく効くの。この薬酒を飲んだ後に、このスープを飲んで。一日も眠りっぱなしで何も食べていかないから、身体がきっと栄養を欲しがつていてるはずよ。風邪の時には栄養を摂つて、温かくして寝るのが一番。それにあなた、少し痩せすぎね。こんなに細い腕をして。カラ、あなたもつとお肉を付けなくち

カラは確かに小柄で、ひょろひょろと細い身体をしていたが、これでも鍛冶屋にいた時よりは多少大きくなっていた。それでも、標準的な同年代の子供に比べたら、まだ小さいのかもしれない。もつとも、カラは自分が正確に何歳になるか知らないので、自分がどの程度標準的であるかないかも、はつきりと分かりはしなかった。

老婦人の穏やかな笑顔を見ていると、薬酒を飲むのは嫌だとは言えず、カラは差し出された小杯を受け取り、一気に飲み下した。途端、喉がかつと熱くなり、痺れるような苦味が舌から口いっぱいに広がった。涙目になり咳き込んでいると、老婦人はカラの背中にそっと手をまわし、優しくさすってくれた。

「偉いわね。さ、座つて温かいスープを召し上がれ」

カラは言われるままに椅子に腰掛けると、咳が治まるのを待つて、温かなスープの皿に手を伸ばした。煮込まれた野菜の甘い香りがカラの鼻腔をくすぐり、腹がぐぐう、と存在を主張した。今の今まで、腹が空いていたなど思いもしなかった。

懸命にスープをすするカラの横に、老婦人はただ静かに座つていた。

腹が満たされてくると、老婦人に穏やかに見つめられていことが、何となく落ち着かなくなり、空になつた皿を弄くりながら、カラはもじもじと言葉を探した。

「あ、あの、アラスターって、ラスター、のことですよね。あの、ぼ……オレのこと。ラスターに聞いてるって」

一瞬、老婦人は驚きのような表情を見せた。

じつと、カラの顔に見えぬ目を向け、ややすると、穏やかな笑顔を見せながら、カラの問いに答えた。

「アラスターとは、古い知り合いなのよ。だから、あなたの事情も話してくれたのね」

古い知り合いといつても、ラスターはどう見ても二十前後だ。もしかして若く見えるだけだとしても、老婦人の子供と同年代くらいだろう。

「ラスターは、どこかに行つてるんですか？ どうして、オレだけここにいるのかわからんくて。眠る前には森にいたはずなのに……ここ、人の多そうな場所にあるでしょう？ オレ、知らない人に姿見られたらまずいのに」

老婦人は水差しからゴップに水を注ぐと、カラに差し出した。

「アラスターが、あなたを抱えてこの部屋まで運んだのよ。自分の外套にすっぽりと包んでいたから、最初にその様子を見た孫も、その中にあなたがいるなんて、思いもしなかつたって言つていたわ。万が一、知らない誰かが田にしていたとしても、あなたの指一本、目にすることが出来ないほど、アラスターがあなたをしっかりと護つていたのだから、心配など無用ですよ。安心なさい」

ラスターに抱えられてきた、と聞いて、カラはよけい熱が上がったような気がした。

予想外の内容に、カラは水をするフリをしながら平静さを装い、普通に話の続きをしようと考えたが、考えれば考えるほど、言葉は上手く出てこなかつた。

「え、あ、いや、でも、あの、どうやってあの森からこの街まで
ずっと、ラスターがそんな、か、抱えて歩いてきた んですか
？」

老婦人は、落ち着かない様子のカラの言葉を、微笑ましげに目を
細め聞くと、穏やかな優しい口調で答えた。

「いいえ。アラスターはまず、ガーランに命じてわたくしに状況
を伝える手紙を寄越したの。そこで、孫に馬車での森まで迎え
に行かせたのよ。ここからあまり遠くない場所で本当によかつた
わ。あなた、カラ。運ばれてきた時は、もつと熱が高くて身体
がぽっぽしていたのよ。息も浅くなつて、本当に苦しそうだつた。
夜の冷え込みが厳しくなるこの季節に、あんな状態のあなたにま
で野宿を強いることは危険だと、アラスターは判断したのね。だ
から仕方なく、わたくしに援助を求めたのよ」

老婦人の話を聞いている途中、カラは何となく眠気を感じ始めた。
先程飲んだ薬酒の効果なのか、非常に気持ちの良い眠りの波がカラ
を襲い、うつらうつらとさせ始める。

そんなカラの様子を知つて、老婦人はカラをゆづくりと立たせ
と、「横におなりなさい」と寝台へ導いた。

老婦人の穏やかな微笑には、何故か有無を言わさぬ強制力があつ
た。

カラは素直に寝台へ行き、のろのろと上がると、枕を二つ重ねて
背もたれをつくり、それに背を半分寄り掛けるようして横になつた。
老婦人はそんなカラの肩口まで、そつと毛布を引き上げてくれた。
本当は、このまま今にも眠りの底に引きずり込まれそうだったが、
まだ、もう少し、何でもいいから話をしてみたい、と思つた。

ラスター以外で、カラを奇異の目で見ず、にこやかにおしゃべり

をしてくれる相手など、本当にずっといなかつた。もしかしたら、この先だって、永遠にそうかもしれない……。

考えもしなかつたのに、カラの手は勝手に、老婦人のショールの端を掴んでいた。老婦人を見上げる金色の瞳は、熱で潤んでいた。カラの思いを察したのか、老婦人はカラの頬をそつと撫でると、円卓傍の椅子を寝台の横まで持ち運び腰を下ろすと、カラの手を握りながらゆっくりと話を始めた。

「ここは、キソスという宿場町よ。東都と南都を結ぶ大街道沿いにあって、もう一日も歩けば東都にたどり着ける、南方から東都を目指す旅人にとっては最後の宿場町なの。でもね、今でこそただの宿場町だけれど、昔は、この街が“東都”だったこと、カラ、あなた知つていてるかしら？」

老婦人の、少しからかうような意外な話に、カラは半分寝ぼけながらも興味をそそられた。

カラが知つている昔語りの中で、都が変わったなんて話は聞いた事がなかつた。

「え、だつて、東都はルーシャンじゃないんですか？ 都、移つちやつたんですか？」

「ルーシャンの方が、陸にも海にも開けていて、特に海上貿易などにはとても便利な地だつたから、遷都してしまつたらしいの。東方の人間は商売人が多くてね、少しでも効率的に発展できる地を選んだのでしょうかね。実際、キソスが都であったのは、百年足らずのことだつたそうだし、昔語りの中でも、ルーシャンが東都と語られているから、あなたが知らないのも無理はないのよ。意地悪な事を言つてごめんなさいね。それでも、“都”的要である キトナ大神殿 がこの町にあつたから、都でなくなつた現在でも、キソ

スは賑わいのある町よ。 東都ほどに賑わい過ぎず、程よい情報が集る場所。 だから、アラスターは、東都周辺に滞在する時には、時々この宿を利用してくれている。 彼は、都のような賑やか過ぎる場所は、あまり好きではないらしいから

老婦人の口からラスターの名を聞いて、カラはまた、不安な、もやもやとした感情が胸の奥で蠢くのを感じた。

そんなカラの様子を知つてか、老婦人はカラの手を僅かに強く握ると、カラの目を見つめるように、言葉を続けた。

「アラスターは今、少し用事があつて出でているけれど、じき戻るでしょう。 あなたは置き去りにされたわけではないの。 だから、何も心配は要らない。 アラスターは必ず、カラを迎えて戻つてくるのだから、あまり悲しい考えばかりを心に描いてはいけないわ」

老婦人の言葉に、カラはほっと胸を撫で下ろしたのと同時に、気恥ずかしさを覚えた。

自分の言葉や表情に、そんなにはつきりと、ラスターがいないことへの不安や焦りが表れ出ていたのだろうか。

カラを見る老婦人の顔は、ただ穏やかに微笑み、カラの手を握つてくれている手は、暖かく、心地よい安心感をカラに与えた。

老婦人が与えてくれた安堵が、カラの胸の奥で燻り続ける不安や気がかりを薄れさせ、カラはより強い眠気を感じた。

「僕 一人でも……一人には慣れてるんだ けど、でも、やつぱり、ふたつめの願い……。 僕 」

カラは、自分が何を喋ろうとしているのか、自分でも分からなかつた。 言葉の最後まで言い終わらぬうちに、とうとう、睡魔の誘いに抗いきれなくなり、カラはすうっと、眠りに落ち始めた。

が、落ちようとした瞬間、階段を駆け上がり近付いて来る勢い激しい足音が、扉一枚隔てた先から響いてきて、カラの入眠を妨害した。

カラは重い瞼を擦り、扉のある方へと、今にも閉じてしまいそうな目を向けた。

向けると同時に、扉が弾けるように開いた。

猪突の勢いのまま、足音の主は部屋の扉を蹴破るように開け、力強く締めた。

そのあまりの騒々しさと、これらの音源の主が予想外の子供だったことに、カラの目は眠ることを止めた。

子供は、肩掛け鞄に背嚢にと、持てるだけの荷物を、その小さな身に負っていた。見ようによつては、荷物の総量の方が、子供より重いのではないかと思える程の量だった。

「おかえりなさい、アル。 お疲れ様。 けれど、もう少し静かに出入りをなさい。 病人が寝ていること、知つていたでしょ？」

アルと呼ばれた少年は、ペロリと舌を出すと、老婦人に言われた事など気にする風もなく、ずかすかと寝台の傍までやつてきた。

老婦人は、苦笑しながらカラの手を一回軽く叩いて離すと、少年へ顔を向けた。

「周囲の様子はどう？ 言われていたものは、揃いそろうかしら？」

「」のひとつ先の通りの辻辺りで、ヘンなのが一・三人うろついているのが気になつたから全速で裏道駆けて来たわ。 ほんと疲れたあ。 でも、うちは大丈夫でしょう？ ああ、それと頼まれ物、今田はこれだけ。 まだ、膏薬とかの材料が揃わないわ。 あんたの足下、借りるよ。 もう、重いつたらありやしない」

少年は不満を言いながらも、てきぱきと、扱いできた荷をカラの足下に放り出し始めた。

「空いている寝台を使えばよいのではないの？ こにはカラが休んでいるのよ」

老婦人は、再び嗜めるようにアルに言つたが、アルは「だつて、そつちはラスターが使うでしょ？」と、あつけらと答へ、全く氣にする様子なく作業を続けた。

カラの目は自然、少年に引き付けられた。

大きなカボチャ、被つてゐみたいだ。

アルは、鍔のある大きな半円状の帽子を被り、顔の上半分は帽子の陰に隠れて見えなかつた。だが、見える下半分の横顔と背格好から、カラと大差ない年齢だらうと思われた。シャツの白以外は、帽子とベストは暗緑、ズボンは煤のような黒と、どれもが地味な色合いで、他人から譲られたものなのか、丈直しはあるものの、どうにも大きすぎるようによくカラには思えた。

右肩の荷は衣類が纏められ、背嚢には、ぎゅうぎゅうに詰められた薬草が入つてゐるようだつた。左手の荷袋には、新しい短剣や繩・携帯の食料など、實に雑多な品々が取り揃えられていた。

状況が掴めず、カラはただ呆然と、荷を解き放り出すアルを見ていた。その視線に気付いたのか、アルは作業の手を停め、カラの枕元にいと近寄つた。腰に手を当て、大きな帽子の陰から、カラの上から下まで、じつくりと踏みでもするように見回した。

「イリス、この子。本当に オステイル と同じ色の瞳なのね。こんな、真つ黒髪に金の瞳なんて、なんか変ね。それに、面白

いわ。こんなに透けちゃって、まるで色硝子みたいだ。影もあるのかないのかわかんないわ。本当にウルド、えつと、あんたのいたオリアスでは、闇森の主っていうんだっけ？ そいつに取られたんだ。ええつと、で、あんたの名前、何だっけ？ えつと、聞いたのに……うん、もうつ、思い出せないわつ。記憶力には自信があるのに、まったく、《名》を覚えておけない呪いを受けたなんて面倒ね。居合わせた相手がラスターでなかつたら、あんた、今頃本当に完全な《名》無しになつて、闇の世の住人になつてたのよねえ」

自分と大差ない年齢の、しかも見ず知らずの相手に、訳の分からぬことを頭の上からポンポンと言われ、カラは何となく面白くなかった。しかし、アルという少年はお構いなしに質問を繰り返した。

「で、あんた何ていうの？ 《欠けることない名》は奪われていても、取りあえず愛称だけは残つてるつて聞いた。ね、その愛称は何？ あ、それとも、自分でも忘れてしまつて話だから、もしかして忘れちゃつたとか？」

「カラ」

ムツとしながら、カラもつづけんどんに答えてそっぽを向いた。その答え方が気に触つたのか、アルも腕を組んで、形のよい唇をへの字に曲げた。

カラの気持ちを知つてか、老婦人がのんびりと話の方向を変えていった。

「あら、そういうえば、わたくし、あなたにまだ名乗つていなかつたわね。ごめんなさい。

わたくしの名は、イリスミルト、というの。孫や周囲の人はイリスと呼んでいるわ。そして「アル」

腕を組んでぶすくれている、帽子の少年を自分の元へ呼び寄せる
と、イリスはまたにこやかに言葉を続けた。

「この子が孫のアルフィナ」

ゆつたり話すイリスの前に立つて、アルフィナは改めてカラを見
据えた。

「え、あ　じゃあ、オレ達を森まで馬車で迎えに来てくれたつ
いつ……」

イリスはうなずいて「あなたと同じ年くらいだから、仲良くして
やつてね」と微笑んだ。

カラは、森へ迎えに寄越したという孫が、まさかこんな子供だつ
たとは思つてもいなかつた。

少しばつの悪さを感じながら、恐る恐るアルフィナと呼ばれた少
年に視線を向けた。

全貌ははつきりと分からぬが、祖母と同じく整つた顔をしてい
るようだつた。

するりとした小さな卵形の輪郭に、筋の通つた鼻と唇、睫毛の長
そうな色の濃い大きな瞳が、帽子の影に隠されていても見て取れた。
とりわけ目を引く大きな瞳は、持ち主の意志の強さを、相対する
者にひと目で感じ取らせる。瞳の大きさだけならばカラも負けは
しないが、この力強さは、大きさ以上に、アルという存在の印象を
強くしている。

アルフィナは祖母の傍を離れ、円卓の椅子に座ると、カラの飲み

かけだつた水を一気に飲み干し、口元を拭いながら自己紹介を続けた。

「さつきから聞こえていたかと思つけれど、普通はアルで通つてゐるわ。うちの旅籠の仕入れ係兼出納係兼看板娘で、イリスのたつた一人の可愛い孫娘。この冬で十一よ」

早口の、アルの言葉全てを聞き逃さないことは難しかつたが、最後のふた言だけは、カラの耳にしつかりと引っかかつた。

「え？あのアル……フィナさんは看板、娘でイリスさんの孫、娘、つてことは、ひょつとして、女……？」

カラの質問に、イリスは笑い、アルは椅子を蹴り倒す勢いで立ち上がつた。

「あたしのどこが男に見えるつてのよつ。あんた“アルフィナ”つて名前、聞いてなかつたの？ほら、髪だつて長いし、ちょっと荒いけど、女言葉使つてるし、どう見たつて女の子じゃない！」

アルは被つていた帽子を脱ぎ捨て、三つ編みにして帽子の内にしまいこんでいた濃茶の長い髪を、付き付けるように、カラにしつかりと見せつけた。

カラは思わず、目を倍は見開いた。

見たこともないような美少女だつた。

鍛冶屋の娘フォーリンも、三つ編みをした可愛いらしい娘だつた。

しかし、露わになつたアルの顔は、それ以上に際立つていた。

初夏の陽光のように、キラキラと輝くその顔立ちは、とても華やかで、彫刻のように完璧な造形をしていて、それは既に美貌といつて差し支えなかつた。

睫毛の長い、大きな黒の瞳が、カラの金の瞳を射るよつに見据えている。

アルの顔から田を逸らせず、カラは蛇に睨まれた蛙よろしく、身動きひとつ出来ずに口をぽかんと開けていた。

まるで騙まし討ちをされた気分だった。

アルが女の子だということは、どう見ても疑いよつはなかつた。それでも、何となくカラは、素直に自分の勘違いを誤る気にならなかつた。

「ふ、ふんつだ」

腹に力を入れ、ようやくアルの顔から田を背けると、カラはなるべくふつきらぼうに言つた。

「名前だけじゃ分かんないし、髪なんて、男でも長い奴いるよ。見た目だつて、女より女らしい男だつているし、その格好、どう見たつて男じやないか」

「何ですつてつ！ チビのくせにつ」

カラは思わず寝台から立ち上がり、ムキになつてアルの言葉に応戦していた。熱も眠気も、すつかり何処かへ吹き飛んでしまつた。

「ちつ、チビはお互い様じやないかつ！ ちょっと僕のほうが小さいかもしけないけど、自分だつてチビじやないかつ」

アルは、ふふんと鼻で笑つた。

「あんた、さつきまで自分のこと“オレ”つて言つてたけど、最近言い直そうとし始めたばかりでしょ？ “僕”の方が言い慣れてる

感じよ

「う、うるさいなつ。 言い方なんてどうだつていいだろう」

「そうね、でもあんた。 そのチビ女の操る馬車に乗せられてこの宿にまで運ばれたのよ。 あんた、あの時ウンウンうなつてたわ。 ラスターはもちろんだけれど、あたしがいなかつたら、あんた、いまごろ森の中で凍え死んでたかもしれないのよ？ 感謝されこそすれ、そんな言い方はないんじやない？ ま、もつとも、あんたは意識がなかつたから、仕方ないかしらね」

ポンポンと出でくる、アルの言葉の勢いに押され、カラはパクパクと口を動かすしか出来なかつた。 そんな一人の様子を、イリスは穏やかに見守つていた。

カラとアルの言い争いが、カラの敗けで終わるうとした頃、すつと部屋の扉が開き、ラスターが入つてきた。

アルはぱつと田を輝かせ、ラスターに近付こうとしたが、イリスは手で孫の動きを制した。

「ラスター、お帰り 」

カラは、視線を合わせないラスターの背に、何とか言葉をかけた。 無言のまま外套を脱ぎ、腰の長剣をはずし寝台の上に置くと、ラスター自身も寝台に腰を下ろした。 視線を、膝の上で組んだ手に落とし、表情はよく分からなかつたが、明らかに普段とは違つている。 衣は所々擦れて汚れ、幾分疲れているようだつた。

何も言わず座るラスターを見ているうちに、カラは大きな物が欠けている事に気がついた。

「ねえ、ラスター。 ガーランはどこに行つたの？ 一人で夜空の

散歩 してるの？」

ラスターは何も答えなかつた。 ただじつと、物思つよつに視線を落とし、座り続けた。

ランプの焰の揺らめきに合わせ、壁に映し出される影が小さく揺れた。 その動きに誘われたかのように、ラスターはつと立ち、窓辺に寄り暗い夜の空を仰ぐと、初めて言葉を発した。

「ガーランは 狩られた」

カラも、その場にいるイリスもアルも、一様に驚き、互いの顔を見合させたが、言葉は誰も持たなかつた。

「このキソス近隣に 狩り人 が出ると、耳にはしていた。 その事実を探るつもりだつたが、見誤つていた」

カラは「おや」と思つた。

ラスターが自分の質問に答えるなんて、滅多にないことだつた。だが、ラスターは相変わらず無表情で、ガーランの事を、悲しんでいるようにも苦しんでいるようにも、カラには見えなかつた。

「 狩り人 つて、獵師のこと？ ガーラン、た、食べられたり、毛皮売られたりとかするの？ そんなの、あんまりだ。 ねえ、助けられないの？」

言葉に詰まりながら、カラはラスターの顔を覗き込んだ。アルも、不安そうに一人の会話に耳を傾けている。

「決まつている 」

何が、とは聞けなかつた。

一瞬、カラはラスターの口許に、微かな変化を見た。
笑つてゐる。 そう、感じた。

ランプの焰がまた、ゆらりと揺れた。

白い壁に映る影もまた、不安気に揺らいだ。

3・新たな出逢い（後書き）

次回 4・小さな事の始まりへ続きます。

4・小さな事の始まり

4・小さな事の始まり

『まつたく、これでは昼か夜かも分からん』

欠伸をひとつすると、声の主はぐるりと闇の中を見渡した。

岩牢の扉の上下部分には、看守が牢内の”住人”の生存を確認するため、柵吐きの覗き窓が取り付けられており、中の住人達もまた、そこから外を覗くことが出来た。

声の主の前にある岩牢には、まだ子供の白い鳳が入れられている。鳳は夜目があまり利かないらしく、蹲り、ただ静かに眠っている。その左横下段にある牢では、五尾の大猫が眼をぎらつかせながら、せわしなく威嚇の声を上げている。さらにその左隣では、三本の角を持つ山羊が、落ち着きなく、足を踏み鳴らし、怯え震えているようだつた。

背後でも、熊だ山犬だ猿だの声がするが、後方には覗き見る窓がないため、声と臭いで判断するしかなかつた。

岩牢は三列、部分的には上下一段に分かれており、声の主は、中央列上段の住人となつてしまつていた。

『それにしても、ここは糞尿臭いしつるやことだ。まつたく、ワシもとんだ間抜けをしたものよ』

これといつてやる事もなく、声の主は大欠伸をすると、再び眠りに着こなすと、身体をゆっくり横たえた。

その時、左方遙かに、幾つかの足音が響いていることに気が付いた。

足音が近付くにつれ、闇に置かれた鳥獣が、より激しい、悲鳴に似た声を上げ始め、じめじめとした岩壁の内は、憎悪に満ちた叫びの大鐘を打ち鳴らしたようで、騒々しいどころの騒ぎではなかつた。足音の主達は、上手い具合に覗き窓側の通路を歩いて来ている。しばらくすると、淡い燈芯草の灯火を先頭に、三人の男が近付いてくるのが目の端に入った。

一人の男の手には、縄で幾重にも縛られた獣の姿があつた。灯火に照らされたその毛は、薄明かりにも鮮やかな黄金色をしている。四足を持ちながら、その背には一対の翼がある。

有翼の獣は、鳳から右に三列ほど空けた、大きめの岩牢に置かれるようだつた。

そこは、人間達のいう 祭壇 とやらに、もっとも近い牢であつた。

「厳重に保管せよとのことだ。縛呪は、通常より強力なものを施すようにせよ。」これは、これまでにない最高の収穫。 万が一があつてはならぬぞ」

白く長い髪を生やした黒衣の男が命じ、残り一人の男は、黙々と言われたままに作業を行つていいく。 男達の低く呟く声と異臭が、岩牢内に重く漂い、獣達の怯えと怒りを更に煽つた。 当の有翼獣は、意識を完全に失つてゐるようだつた。

『こりやあ、また。面白いのが入つてきたもんだ』

闇の中で、声の主は、一つしかない黄緑の眼を細め、ししし、としゃがれた笑いを漏らした。

その夜は、ぐっすりと眠ることはできなかつた。

それでも、明け方近くには一度深い眠りに落ちたらしく、目が覚めた時にはとなりの寝台は既に整えられ、部屋にはカラ一人だけだつた。ラスターがいつ寝て、いつ出て行つたのか、カラは少しも知らなかつた。

もつとも、これは野宿の時でも同じで、ラスターが寝ている姿も、衣を替える姿も、この五ヶ月、一度として見たことはなかつた。襟の詰まつた、白と青の衣に黒革の長手袋と長靴を、常にきつちりと身に着けている。

真夏の炎天下でも、襟元ひとつ緩めず、それでも涼しげなラスターの姿は、修練を積んだ騎士であれば、驚くべきことではないのかとも思ったが、カラには、人間離れしているように感じられてならなかつた。

昨夜遅く、出先から戻つたラスターは、この旅籠の主人であるイリス・イリスミルトという目の不自由な老婦人と一人、何やら遅くまで話している様子だつた。

カラだけでなく、イリスの孫アルフィーナも、話を聞きたいと申し出たが、時間が遅いとイリスに促され、寝床に入るしかなかつた。

カラはペンドントの側面の文字を指でなぞつた。寝起きなどにはこうしないと、自分の『名』の欠片である愛称すら、まったく思い出せない。既に習慣化した行動だつた。

それから、腰にいつも付けている短剣の、柄先にある雲型の金色の石に手をやつた。

カラの瞳と同じに、自らが淡い光を放つこの オステイル という貴石と、ペンドントに彫られた『名』の文字が、カラを 光あるこの世界 に繋ぎ止めている。

大切な、命綱のような御守だつた。

「いい、天気になりそうだな　」

寝台から起き出すと、カラは窓を大きく開いた。冷たい朝の空気がさあっと部屋に流れ込み、寝ぼけた目をしっかりと開かせた。まだ時間が早いためか、通りにはあまり人の姿がない。霧がたち、向かいの建物や通りを霞ませている。遠くに汽笛の音が聞こえた。町の東には、ハルという大河が流れしており、その西岸にあるリソン港は、大陸内陸部の都市とを行き来する旅人や商人が利用する、重要な港なのだという。港の周辺には市場が立ち、一日数回上げ下ろしされる積荷と、その作業に従事する人足達の怒号のような掛け声とに溢れた、大変賑わいのある、キソスで一番活気ある場所なのだという。

カラはあまり大きな町に住んだことがない。

旅に出る前にいたオーレンは、東都と南都を結ぶ大街道から、内陸にかなり入り込んだ小さな田舎町で、人口も百人ほどだった。

キソスも、あくまで街道沿いの一宿場町だ、とイリスは言つていたが、カラの目には、キソスは大都会に映つた。

イリスの営むこの旅籠も、三階建ての立派な石造りで、周囲に並ぶ建物も整然と並び建つてゐる。明るい薄灰色の壁と青みがかつた黒い屋根に統一された町の色は、とても宿場町には見えない落ち着きがあり、人影少ない朝見つてゐるせいもあるだろうが、しつとりとした趣ある風情をしていた。

昨夜通りを照らしてゐた灯火は、朝の訪れと共に消され、代わりに建物の合間に射し込んできた朝日が、静かな通りを明るくしていく。

く。

「どうしたら　いいのかな……」

明るくなりだした空に、手をかざしてみた。

手を透して見える空の淡い肌色の雲に、カラは小さく嘆息した。

「ガーラン、探しに行きたいなあ。けど、陽射し、結構あるだろうし、人、多そうだし」

五ヶ月の経験で、透ける身体は、上から大きな厚手の布で覆い隠せば、実は、多少は誤魔化せることが分かつていた。

薄い布だと、カラの受けた呪いに引きずられ、被つた布まで身体諸共に透けてしまうのだが、分厚い、濃い色の毛織物などは、呪いの影響は多少なりと少ないことを知つた。

ラスターが、オーレンを出る前に買つてくれた、トルサニという北方原産の羊の毛で織られた外套は、軽いのに、地が厚く丈夫で、カラの身体をよく隠してくれた。フードを田深に被り、脱ぎさえしなければ、透ける身体の問題は、ある程度は克服できる。

だが、身体が透けていることをなんとか隠せたとしても、《影》が無い問題は残つたままだ。

《影》だけは、どんな厚手の布を被ろうと、濃くはならなかつた。透ける身体を、布で上手く隠したとしても、《影》がない事を隠す方法は、どうやっても見つけられなかつた。

どうやら、闇森の主から、《影》を奪い返さない限り、カラの影無しの問題は、解決しようがないようだつた。

呪いを受けて以来、カラは誰の目憚ることなく、暖かな陽の下を歩くことを、望みのひとつとしている。

そんな希望とは矛盾しているが、いっそ今日が、陽が射さず視界の悪い、曇りか雨ならば、外套で身体を覆い隠し、外出することも可能かもしれない。街灯の少ない町村の夜ならば、かなり気楽に歩くことが、出来たかもしけない。だが、昨夜垣間見た様子では、キソスは、夜すらも明るい町のようだつた。もっとも、白昼に比べれば当然暗いであろうが、なんとなく、夜、この宿から忍び出る

「ことは、難しいように感じられた。

「ラスター。どこかを探してゐるのかな」

人目があまりないのをよいことに、カラは窓枠に頬杖をつき、霧の薄くなりだした通りを見るでなしに見ていた。

すると、見覚えのある暗緑色の丸い帽子の子供が、奥の路地から走り出でくるのが目に映つた。

「 こんな早くから、何やつてゐるんだる。 仕入れ、つてやつかな？」

昨晩聞いた話から、カラは何となくそう思つたものの、アルの手は何も持つておらず、妙に慌ててゐるようにも見えた。

アルの姿が建物の陰に隠れ見えなくなつた直後、同じ路地にひとつの人影が見えた。

外套で全身を覆い、具体的な姿が見えるわけではなかつたが、その厳つい身体つきから、その人影をカラは男だと思った。

外套のフードを目深に被つた男は、通りには顔を出さず、それ以上先に進む様子も見せなかつたが、アルが走り去つた方角を、じつと見ていることは明らかだつた。 フードの下にカラは、赤く不気味に光る目を、見たように思つた。

「 なんだる、あいつ 。 そういうや、周囲の様子がなんとか、言つてたつけ 」

氣味の悪い嫌悪感を、カラはその男に抱いた。 陽の射し始めた通りには出られないかのように、暗い路地の壁に張り付き、じつとアルの去つた方角を見ている様は、狙いを付けた獲物を見ている蛇のようだつた。

男を注視していると、背後で扉を軽くノックする音がし、続けてイリスが盆を片手に入ってきた。

「あら。 カラ、起きていたのね。 おはよう。 昨日の晩はゆっくり眠れなかつたでしょうに、もう少し寝ていなくてよかつたの？ 冷たい空氣に当たりすぎては、また熱が戻りますよ」

イリスの顔は、円卓の上に向けられていたが、カラがどこにいるのか、はつきりと分かつている口調だった。 昨日と同じく、流れるような動きで円卓の傍まで行くと、静かに椅子に腰をかけた。 カラは窓の外をもう一度見た。

男の姿は、いつの間にか消えていた。

何か、引っかかるものを感じたものの、それが何だかはつきりとは判らず、カラは頭を搔きながらイリスの傍へと歩んだ。

「おはようございます。 あ、あの 」

「ラスターは、人に会つとかで早くに出かけたけれど、もう少しで戻ると思いますよ」

カラが質問するか迷つた問いの答えを、イリスは微笑みながら口にした。

「そう、ですか 」

カラは曖昧な返事をした。 カラの声に含むものを感じたのか、イリスは一瞬、伏し目で思案の表情を見せると、灰緑の瞳を上げ、カラを見つめるようにして語りかけた。

「昨夜のガーランの件で、あなたは聞きたいことがあるのでしょうか

？」

イリスの少し改まった口調に、カラは身を伸ばし、穏やかに自分を見つめているイリスの顔を見た。

「え、あ、あの　　はい」

突然にその機会を得て、カラは緊張をしてしまった。聞きたいことはたくさんあったが、いざとなると、何から聞いてよいのか分からぬ。目線を落とし、しばらく考えると、おずおずと、イリスの顔に視線を戻した。

「あの……昨晩ラスターが言つてた　狩り人　つて、なんですか？　獵師じゃないんですよ……ね？　イリスさんは、知つてるんでしょ？　狩り人　が何者なのか。　そいつらは、いつたい、何処にいるんですか？　その　狩り人　に狩られたら、どうなるの？　ガーランは……殺されたの　？」

言葉にするうちに、カラは自分の中の不安が目を覚ましていくのを感じた。　言葉を口にすればするほど、漠然とした不安が、確かな不安に変わつていく。

イリスは、カラの問いにすぐには答えなかつた。　しばらくの間、目線を窓の外に向け、やや間を置いて口を開いた。　その横顔は、変わらず穏やかなものだつたが、僅かに、周囲の空気が張りつめたような気がした。

「あなたの想像通り、　狩り人　は獵師ではなく、ある集団に属する者達の通称。　その者達は主に、　聖獣狩り　という役割を、その組織の中で担つてゐる」

「聖獣狩りって、ガーランみたいな、昔語りに出てくる珍しい獣を、狩るってことですか？でも聖獣って、すごく不思議な力を持つていてとても強いから、人間なんかでは手が出せないって、何かの話で聞いたことがある。実際ガーランも、小さいけどかなり凶暴で、頭もすごく良くって、そんな簡単には捕まえられない気が、するんだけど」

カラの間の抜けた問いに、イリスは「その通りね」と、顔を緩めた。しかし、その優しい笑顔にも、カラは強い不安を覚えた。

「つまり、その聖獣を狩つてしまえる程、狩り人は強いってこと、ですよね？ラスターは騎士で、多分、凄く強いですよね？それでも、ガーランが狩られてしまつたことは、それ以上に強いってことですか？」

イリスは、分かるか分からいか程に頷き、何かを確認するように、カラの顔に灰緑の瞳を向けた。

「狩り人は、知謀に長け、武勇に優れた者達が数人ずつ、共に行動しているのだと言われているわ。ここ数ヶ月、大陸各地で聖獣やその裔である鳥獣が、狩り人により次々と狩られているという噂があつた。そして、数週間前程から、キトナ地方、特にキソス付近で、彼等の活発な動きが見られたという情報が入つていた。アラスターには、以前からその動静を探るようとの要請があつていたらしいの。そして昨夜、アラスター達は調査に出かけ ガーランが捕らわれた」

一旦言葉を切ると、イリスはそれまで以上にゆっくりとした口調で、話を続けた。

「わたくしには、ガーランの現状に関する確かな情報が、まだ掴めていないの。 狩り人の真の目的が何かも、憶測でしかない。 けれど、カラ。 アラスターがガーランの死を口にしないからには、傷を負っているにしろ、ガーランは生きている。 これだけは、確かなことよ」

微笑みながら語られたイリスの言葉に、先程まで感じていた緊張は解れ、カラの声は自然明るくなつた。

「本当ですか？ ラスターが、そう言ってたんですか？」

イリスは微苦笑を浮かべ、カラに向かい手を差し伸べた。 カラは一瞬どうしてよいか迷つたが、その手をおずおずと取つた。

「アラスターは、何も言わないわ」

「じゃあ、なんで分かつたんですか？」

イリスは小さく笑うと、カラの手を両手で包むように握つた。

「そうね。 変な話よね。 けれど、長年の付き合いで、アラスターの無言を聞くことに、わたくし自信があるのよ」

「ラスターの、無言？ 無言を聞くって、なんですか？」

いかにも不思議そうに、しかも、かなり関心を持つて尋ねるカラに、イリスは笑みを浮かべるだけで、答えを口にはしなかつた。

「ガーランの身が心配で、落ち着いてなんかいられないでしちゃうけれど、カラ。 あなたはまず、身体を治すことに、専念をしなくて

はね。もし、ガーランを探しに行きたいと思うのならば、尚更早く、元気にならなくては。キソスの町は、結構広いのよ

つい先刻のカラの考えを知った上で、やんわりと針を刺したようなイリスの言葉に、カラはどう返答をしてよいか迷いついてしまった。その間に、イリスは運んできた小瓶から小杯へ、トロトロと不味そうな液体を注いだ。

しつかりと見直す必要もなく、昨夜と同じ薬酒であることは、独特の甘い臭い（しかし、味には少しの甘みもない）でも分かつた。

「あの、それ」

小さく笑いながら、イリスは黒い薬酒が満たされた小杯を、そつとカラの手に握らせた。

「早く、元気になりたいでしょ？」

イリスに優しく微笑みながら言われると、やはり「要らない」とは言えず、カラは小杯をしぶしぶ受け取った。しかし、既にその味を知ってしまった今は、たったこれだけの量とはいえ、飲むまではちよつとの時間と勇気が要った。

薬酒にむせ、カラが激しく咳き込んでいると、イリスは昨日と同じく、優しくカラの背をさすり、椅子に腰を掛けさせ、落ち着くのを待つてくれた。

「あ、あの 聖獣達は、なんで、狩られてるんですか？ やっぱり、金のため？」

咳のため、呼吸の乱れが残るカラの背をさすりながら、イリスは思い起こしながら話すように答えた。

「 聖獣 と称される獣達は、現在では大変稀少な存在。 例え、その血をほんの僅かに引いているというだけでも、たいそうな値が付くという話は、よく耳にするものね。 金銭目的の可能性も、あるでしょうね」

「 ”可能性も” ってことは、じゃあ、それ以外の可能性も 」

カラが言葉を言い終えないうちに、アルが昨晩と同じ勢いで部屋に入ってきた。

その手には、暖かな湯気の上がる椀を載せた盆があつた。 アルの頭の一部かと思われた、暗緑の大きな帽子は被つていなかつた。

「 イリス、持つてきたわよ。 朝食 一人分。 今は他にお客いないんだから、下の食堂に食べに来させればいいのに。 あ、それからイリス。 スープの香草が今朝ので無くなつたから、後で倉庫に取りに行くけど、他に取つてきておくものはある？ ついでに持つてくるわよ？ あと、買出ししておくものも教えてね、今日はリソンの市に行く予定だから」

カラ達のいる円卓の傍に歩んでくるまでの僅かの間に、アルは一人で三人分は話した。

イリスは、カラの顔を見て微笑すると、朝食の盆を置くスペースを開け始めた。

アルはすかずかと円卓に歩み寄ると、持つてきた盆を無造作に置いた。

椀のスープが数滴飛び散つたが、アルは全く気に留めていない様子だつた。

椅子の一脚を引き寄せると、アルはカラの顔を真剣な眼差しで、しげしげと観察し始めた。

アルの大きな黒の瞳に間近で見つめられ、カラは訳もなく緊張した。

顔の火照った感じから、きっと、耳の先まで真っ赤になっているんだろうと思うと、なんとも決まりが悪かった。

「これが、ラスターの連れの子？ こんな顔だつたっけ？ そんな気もするけど……あ、でもその金色の瞳は、覚えているわ。それにしても、すいぶん小さかつたわねえ」

アルは感心するように、座っているカラの上から下までを眺め回した。それから引き結んだ口元に指を当てる、思案の素振りをみせた。

「イリスに話は聞いていたけど、会わない時間が長くなると、『名』だけでなく、姿形まで忘れられていく呪い、だつてのは本当ね。だって、三日前に会つてから、毎日寝顔を見ていたのに、次の日にはその顔の記憶が曖昧になつてたし、昨日はちゃんと、起きている状態で会つて話もしたのに、名前も顔も、ぼんやりして思い出せないなんて、私にはありえないことだもの。 おまけに、呪いを受けた本人も、油断すると自分自身が何者か分からなくなっちゃうなんて、本当に笑えないわよね。 大変よね、あんた えつと、で、名前は？」

促すように、アルの大きな瞳が、真正面からカラの目を覗き込んだ。

「カラ」

悪意はないのかもしれないが、カラの触れられたくない内容を、アルは遠慮会釈なくポンポンと早口で捲くし立てる。アルのそん

な物言いに、カラはかなりムツとしていた。

だが、アルに腹を立てながら、カラはふとあることに気が付いた。

「イリスさんはほ……じゃないオレの名前、朝になつて忘れてなかつたんですか？ 聞かないのに、オレの”カラ”って名前、部屋に入つてすぐに呼んでましたよね？ あ、紙に書いて、置いておいたとか」

イリスは、一瞬驚いた顔をしたが、すぐに納得したように、カラに向かい、穏やかな微笑を見せた。

「わたくしは昔、大神殿で神聖文字の御守を授けられているのよ。それには色々な力があるの。 例えば そうね、どういえばよいのかしら。 あなたの受けた呪いのよつたものに、少しだけ、抵抗力があるの」

カラはイリスの言葉に反応し、慌てて腰元を探つた。

「 この文字ですか？ 名前、朝になると自分でも忘れてるのに、ラスターは絶対忘れないの、いつも不思議だつたんだけど、もしかして、これをラスターも持つているから、ラスターはオレの名前、忘れないの？」

カラは腰の短剣を外し、刀身に彫られている五つの文字を、イスの手に触れさせた。

イリスはゆつくりとその表面をなぞり、頷いた。

「そうね。 わたくしのものは、これとは少し違つけれど。 これは、より強く、大きな力を持つ神聖文字ね」

カラは田を大きくし、イリスの顔を食入るように覗き込んだ。

「『』の文字を持つていると、闇森の主 の呪いは消せるの？ もしかして、オレの欠けることのない『名』も、わかるんですか？」

期待に満ちたカラの声に、イリスは少し悲しげに首を横に振った。

「残念ながら、それは無理なの」

カラの視線を受け取るように、イリスはカラの顔に視線を注いだ。

「あなたは、カラ という愛称だけでも奪われずに残ったから、わたくしは、アラスターに聞いたその愛称だけは知っているし、覚えていられる。けれど、あなたの完全な、欠けることのない『名』は、半分以上が ウルド オリアスでいう 闇森の主 が奪い去り、あなたの『影』と共に、その身の一部としてしまっている。あなたの『名』と『影』は、既に ウルド のものとなっている。わたししながらではおいそれとは手が出せない、知りようがないもののよ。 例え他にも、わたくしのように何等かの加護で、今あなたのこと記憶に留められる人があったとしても、それはあなたの、完全な救いにはならないでしょう。 今のあなたを記憶に留めたからといって、本来、あなたのものであるべき『名』と『影』が、あなたに戻るわけではないのだから」

気が抜けたように、カラは肩を落とした。

「 そう……ですよね。 やっぱり、闇森の主 から取り戻さないと、ダメなんですよ……」

もしかして、欠けることのない『名』を知ることができれば、抱

える問題の、少なくとも半分は解決するのではないか、という淡い期待は、あつという間に崩れ去った。

のろのろと短剣を腰に戻し、顔を上げると、アルと目が合つた。カラの横で短剣を覗き込んでいたアルは、驚きとも怒りとも付かない表情を、その整つた白磁のような顔に浮べていた。

「その石 本物の オステイル だわ。 短剣だつて、精靈王殿だけで作られる、貴重な神聖銀で鍛えられたものよ。 ラスター、それをあんたに『えたの？』

アルはカラを睨みながら、突つかかるような勢いで言葉を投げつけた。

「ねえ、どうなのよ？ ラスター、それをあんたに『えたの？』どうなの？？」

「 あんたじゃなくて、カラだつて、さつき名乗つたじゃないか
」

アルの物言いはいちいち勘に触る。 カラはアルから顔を大きく背けた。

「なによ、話をしてる途中でしじう？ こっち向きなさいよ」

アルは、カラの態度が気に触つたのか、カラの肩を掴み、自分の方へ向かせようとした。

カラはカラで、アルのその強引な態度に腹を立てた。 少し脅かしてやるつか と、そんな気持ちになつていた。

イリスは一人の様子を、口を挟むことなく、ただじつと見守つていた。

「聞いてるの？　話をする時は、ちゃんと相手の顔を見て話しなさいよっ！」

そっぽを向いたまま、頑として動かないカラに、アルは更に腹を立てた。意地でもカラを自分の方へ向かせようと、更に強く、カラの肩を引っ張った。

「うるさいな。アルと話すことなんかないんだよ　」

肩を掴んでいるアルの手を、軽く、払い除けるだけのつもりだった。

だが、加減を誤った。

振り向きやまに出したカラの手は、アルの肩を突き飛ばすようになれた。

アルの身体は、弧を描くように投げ飛ばされた。カラに負けず小さなアルの身体は、軽い人形でも放るみたいに飛び、落下後も床を壁際まで滑つた。

アルの身体が浮いた瞬間、カラの頭は真っ白になつた。アルが呻く声を上げた時、カラは意識を呼び戻された。すぐさま立ち上ると、カラは蹲るアルの傍に駆け寄つた。アルは声を押し殺し、痛みに耐えているようだつた。

孫達の異変を感じたイリスも、既に椅子から立ち上がり歩み寄つてきていた。

「ア、アル。　アルっ　」

落ちる際に強打したのか、アルは肩を抱え蹲つたままだった。

カラはおろおろとし、手を差し出すことも出来ず、蹲るアルをただ見ていた。

イリスはアルの傍らに膝をつくと、様子を探るように孫娘の身体にそっと触れた。

「ア、アル、い、痛いの？ ぼ、僕、力、間違えて こんなつもりじや……」

俯き蹲つたまま、何も言わぬアルの様子に気を取られ、カラはラスターが入つて来たことに、全く気付いていなかつた。

ラスターは、何も言わず状況を見て取ると、アルとイリスの横に歩み寄り、片膝をついた。

「 アルフィナの状況は？」

「骨に異常はないようだから、大丈夫でしょう。アル？」

イリスに問われ、アルは俯いたまま首を縦に、僅かに動かした。カラは、自分の起こした事態に動搖し、ただ呆然と床に座り込んでいた。ラスターがすぐ傍に来ていたことも、立ち上がつたことも、カラは全く気付かなかつた。

突然腕を掴まれ、立ち上がらせられた時、初めて、ラスターが眼前にいることに気が付いた。

ラスターの青い瞳が、カラの目を見据えた。

「ラスター。 ぼ、僕 」

乾いた音が室内に響いた。

カラは左頬に、鋭い痛みと眩暈を感じた。

「同じ過ちを、繰り返したいか?」

ラスターの声は、あくまで静かだったが、カラを竦ませる力があった。顔を上げることが出来ず、カラは自分のつま先に視線を落とした。鼻がツンと熱く痛くなり、ぱたぱたと、床に涙がこぼれ落ちた。

「僕、ちょっと脅かして、払いのけるだけのつもりだったんだ。ラスター……」「…………ごめん」「

「私に謝罪は、無意味だ」

ラスターはそれ以上何も言わず、掴んでいたカラの腕を離した。

「僕……」

震えるカラの言葉の続きを、イリスがゆっくりと引き取った。

「アラスター。カラだけを責めてはいけない。アルの言葉が過ぎたからなの。アルも悪かったの。さ、立てるでしょ?」「

イリスはアルを立たせた。アルは、俯いたままで、顔を上げなかつた。飛ばされた際に乱れた髪が顔にかかり、表情は分からなかつた。普段はシャツの中にしまっていたらしい、銀細工の鎖が、アルの細い首から下がっていた。鎖の先には、青緑色の石が、滴のように揺らめいていた。

カラは袖で鼻をこすると、詰まつた声でなんとか話しかけた。

「アル。」「、ごめん。僕……」

アルは何も答えなかつた。

イリスが、穏やかな声でカラに答えた。

「大丈夫よ。アルもちょっと驚いているだけでしょう。あまり気にしないで」

俯いたままのアルを促し、イリスは部屋から静かに出て行つた。カラとラスターの残つた室内を、重く気まずい沈黙が満たした。

「ごめん……なさい」

俯いたまま、カラは小さく呟いた。ラスターはカラを一瞥しただけで、何も言わなかつた。

カラは、アルを払つた手を見つめ、唇をかんだ。

「こんなはずじや、なかつた

カラは無意識に左肩をさすつた。
あの時の傷は治つている。

けれど

傷跡は今も疼き続けていた。

4・小さな事の始まり（後書き）

次回 5・苦く痛い傷 に続きます。

5・苦く痛い傷

5・苦く痛い傷

「化物めつ」

激しい憎悪の眼差しが、カラに向けられた。

まだ。

オーレンを出て、この言葉を浴びせられたのはこれで二回目だつた。

油断していた。

昨夜宿をとつた村の、境を出てしばらく行つた、人気のない静かな場所だつた。

所用で単身動くラスターに言われ、カラは薄暗い雑木林の陰で時

間を潰していた。

雑木林の横に、道を隔て青々とした草地が広がつていた。
きれいに刈られた短い草の上に陽が降り注ぎ、とても気持ちがよ
れそうだった。

誰もいないと思い、カラは木の影から足を踏み出すと、草地の陽
の下に立つた。

暑い夏の日中だつた。外套は脱いでいた。
その姿を、村の子供が見ていた。

カラの身体が、色硝子のように透けていること、そしてその足下
には、自分にあるものが無いことに気が付き、親を、大人たちを

呼び集めに村へ走った。

気が付いた時には、カラは村の男達に取り囲まれていた。二十人はいただろうか。

村人に従いやつてきた犬が、カラに向かい、激しく吠えたてている。

昨夜泊まつた宿の主人が、男達の輪から一歩進み出した。宿を出て、まだ小半時しか経つていなかつたので、カラの存在を、瞼になりながらも、宿の主人は記憶をしていた。

大きく息を吐き出すと、怒りに震える声でカラを罵つた。

「化物め。人間を騙して、喰らいにでも来たか。胡散臭いとは思つていたんだ。真夏だつてのに、あんな分厚い外套を頭から被つて、室内でも脱ぎはしなかつた。大方、その姿を隠していやがつたんだろう?」

酒に酔つているのか、宿屋の主人の目は黄色く濁り、座つているようだつた。

それは、カラを囲む周囲の他の男達も皆、大差はなかつた。

「ち、違うつ。僕は化物なんかじゃないつ。ただの、ただの人間だよつ」

カラは、泣きそうな顔になつていていたに違ひない。

いくら自分の事を訴えても、いくら違うのだと否定しても、彼等の”思い込んでいる”ことに合わない限り、カラの言葉は、無意味で、空回りするばかりのようを感じられた。

「ほざくなつ。その姿が何よりの証だ。化物が人間の言葉なぞ真似して喋りやがつて。おい、もう一人いたな。仲間はどうした、

逃げたか、他の仲間を呼びに行つたか？」

ラスターは、自分が戻るまで陽の下には決して出ないよう、カラに言い残していた。

その言葉を、カラは重く受け止めなかつた。

馬鹿だ。僕。

男達は、手に手に斧や鉈といった刃物を握り、じりじりと、カラを取り囲む輪を狭めていた。

どこまでも青い空からは、夏の白く、激しい陽光が射し、その下に立つ男達の足下には、黒く濃い影が従つていた。

男達の先に立ち、牙を剥きカラを威嚇している犬の下にも、黒々とした影が生まれている。

しかしカラにだけ、影は従わなかつた。

あまりの陽の強さに、身体は常よりも透け、まるで光に溶け、消える寸前の虹のようだつた。

灼け付くような陽射しが、カラの視界を霞ませ、白い眩暈を誘つた。

意識がゆらゆらとして、真つ直ぐに立つてゐることが辛かつた。牙を剥いている黒犬が、前傾し、今にもカラに飛掛かろう、とう姿勢をとつてゐる。

化物。どこに行つても、やつぱり僕、化物にしかなれないんだ。

カラは笑いたくなつた。

何のために、あんな取引したんだろ。こんな目に遭いたくない、変わりたいから……なのに、僕はいつたい、何、したんだろ。

「やつちまえつ」

中心にいた男が叫んだ。犬がその声に応えるように吠え、地を蹴るやカラに猛然と踊りかかった。

太く白い牙が、カラの眼前に迫った。

もう、だめだ。

ぐるりを囲まれて、逃げ場はない。カラは両腕で顔を庇つように覆い、かたく目を瞑り、その時を待つた。痛みを血を伴い、自分に死がもたらされる。

その瞬間を待つことしか、出来なかつた。

だが、そうはならなかつた。

鋭い、一陣の風が吹き降りた。

犬の激しい悲鳴と、羽音、重い物体が地に叩きつけられる鈍い音が、続けざまにカラの耳に入つた。

男達のどよめきと怒声が、それに続いた。

「な、なんだこいつはつ」

「四足のぐせに、翼があるぞつ」

「こいつ、ひょつとして 聖獸 じゃないのか？ 神殿の彫刻なんかにある」

男達のどよめきにつられ、カラは恐る恐る目を開けた。開けた途端、端然としたラスターの姿が目に入った。カラはその横顔を、喰い入るように見上げた。

「ラ、ラスター」

きりきりと張りつめていた気持ちが緩み、カラの声は震え、泣きそうになつた。

ラスターは、カラには目もくれず、眼前の男達を静かに見据えていた。手には、鞘に收められたままの長剣が握られている。

先ほど牙を向けてきた犬は、ガーランに押さえつけられ、地面に横たわっていた。犬よりも小さなガーランの鋭く太い爪が、犬の肩や腹に深く食い込み、牙を剥いていた口は、大きな黒い嘴で咥え上げられている。

犬の周囲には、赤黒い池がじわりと広がり、胸の悪くなる、鉄の香を含んだ、硬く生暖かな臭気が辺りに漂つっていた。

左側面では、数人の男が呻きながら地に臥し、カラを取り囲んでいた輪は崩されていた。

「あんた、その剣、剣士……いや、その剣帯の紋。 方円の騎士団 の徽章 じゃないのか？ あんた、まさか騎士か？ 本物の騎士なら、何故そんな化物を」

男の一人が、倒れている男達とラスターを見比べながら、怯えるように言つた。

その言葉を遮るように、昨夜の宿の主人が、上ずつた声で叫んだ。

「こいつ、こいつがこの化物の仲間だつ！」

男達は改めてラスターを見遣つた。

どこをどのように見ても、化物の仲間には見えず、むしろ、雲上人の如く、近寄り難い高貴さを滲ませる。その端正な容姿と併まに、男達は躊躇と怒りを、縦い交ぜにざわめきだつた。

カラ達を睨む目は血走り、顔はどれも異様に強張り、蒼白く引きつっている。

カラは怖ろしかつた。

真つ直ぐと向けられる、黒い感情に圧され、足はどうしようもなく震えた。

だが、恐ろしさと同時に、理不尽を感じた。

何故、身体が透けているというだけで、影が無いというだけで、こんな扱いを受けるのだろう。別に、この村人達に迷惑をかけているわけでも、かけたわけでもない。

ただ、黙つて通り過ぎさせてくれればいいじゃないか。

男達は罵声の対象を、カラからラスターへと移し始めた。

「こんな女のような奴が、剣士。ましてやあの、方円の騎士団に認められた騎士なんかであるものか。大方、そういう触れ込みで人間を信用させ、ついでに、そのお綺麗な見た目で、人間様を誑かし近付こうってな魂胆だろうさ」

男達は、互いの顔を見合わせながら、卑屈で下卑た笑いを浮べた。

「悪知恵と魔力の有る化物は、美しい人間の姿に化けるのを好む、と聞くからな。こいつは、まさしくそれだろつさ。まるで神の像そのままの姿だ。化物のくせに、神を真似るとは、不届きにも程があるつ」

「その黄色い翼の獣も、ただの妖獸だつ」

「こいつ、他の仲間を呼びに行つてたんじゃないのか？ だとしたら、まずいんじゃないか？」

「な、仲間の奴等が来る前に、こいつら、せつと始末してしまつわねえと、きっとこいつちがやばいだつ」

「そうだ、殺せ！」

一人が、とつさに出した言葉を耳にすると、周囲の者達は、考へることなく諸手で賛同した。その目には、何を映しているのか分からぬ、虚空が広がつてゐるようだつた。

「殺せ、殺せ、殺せ」

数十人の男達が口々に、「殺せ」の、同じ言葉を繰り返した。有る者は呟くよつに、有る者は叫ぶよつに、ただひたすら、同じ言葉を繰り返し口にした。

カラは次第に腹が立つてきた。

怒りが、恐怖に取つて代わつていぐ。

無意識に、カラは腰の短剣に手を伸ばし、柄に手をかけ、握つていた。

ラスターの肩に戻つていたガーランが、毛を逆立て威嚇の声を上げた。

「ガーラン。 お前は先に行き、この先の道を探しておくんだ」

主人の命に従い、ガーランは短く一声鳴くと、肩からふわりと舞い上がつた。

ラスターは振り返ることもせず、ここにきて始めて、カラに言葉をかけた。

「生きたくば、己で活路を拓け。死にたくなぐば、カラ。生に執着し、己が果たすと決めた目的だけに心を集めよ。生きるを求むるに妥協などは無用。それは彼の者達も同じこと。あとは君の覚悟次第だ」

ラスターの言葉が終わると同時に、

男の一人が鉈を振り上げ、猛然と向かってきた。

ラスターはカラを右手で誘導しながら足を一步引き、鉈を鼻先でかわすと、男の鳩尾に柄頭を沈めた。

男は奇妙な短い呻き声と共に、どつと前のめりに倒れた。

その音が呼び水となり、男達は、言葉にならぬ言葉を叫びながら一斉にかかってきた。

ラスターは、川の流れに乗る木の葉が、川中の岩を器用に避け、前へと流れ進むように、向かって来る男達を、前後左右にするりとかわし、必要最低限の力で相手の急所を撃ち、倒していった。

その後ろで、カラは必死だった。

カラはただ、むちゃくちゃに短剣を振り回した。剣の長さも、カラの腕の長さも、男達を威嚇する力すら持たなかつた。

数で勝る男達に、右から左から切りつけられ、カラは次第に、ラスターから引き離されていった。

男達の振るう刃物が、容赦なく、次々とカラに向かい打ち下ろされてくる。

カラの振り回す剣は、空しく空を切るだけで、どの男にも、髪一筋の傷を負わせるこども出来なかつた。男達の懷に飛び込みでも

しない限り、カラの攻撃は、ただひたすら空しいだけだった。

なんとか、なんとかしなくっちゃ

息が上がり、身体が重く感じた。

つい先ほどまで自分を突き動かした怒りも、身体が重くなるに連れ、身体のどこかへ沈み、見えなくなっていく。

周囲には、一時でも身を隠せる物陰はなかった。雑木林まで走り逃げ身を隠したくとも、背を向けて走りだすタイミングが見つけられない。

襲い来る刃を避けるだけで、カラは体力を消耗していった。

伸びた草に足を捕られ、打ち下ろされた鎧を避けるのが遅れた。左肩にサッと、熱い痛みが走った。

じわりとシャツが湿り、肩から胸へ、赤い染みがみるみる広がった。垂らした腕を伝い、指先から血が滴った。

本気なんだ。本気で殺すつもりなんだ。

恐怖が、頭の芯まで締め付けた。
殺される。

心臓が激しく打つて、胸が痛い。苦しい。

呼吸が勝手に速く、浅くなり、上手く息を吸うことが出来ない。

「や、やだ。僕、いやだ」

泣き出しそうなカラの言葉など、男達の耳には入らなかつた。ぶるぶると震えるカラの姿は、男達にはただ、傷を負つた化物の姿としか映つていなかつた。

「覚悟しやがれ。 化物」

三人の男が、カラの眼前にいた。

うち一番若い男が、口元に奇妙な歪んだ笑いを浮かべ、大鉈をゆっくりと振り上げた。

その目は異様に血走り、カラを確かに見ているのに、他の何か、を見ているようだった。

大鉈の黒い影が、カラの顔にかかつた。

あの刃が、僕の頭を 割る……

想像した瞬間、何かが千切れた気がした。

「う、う、うわあああつ 」

カラは飛び出していた。

無我夢中で、男の握る鉈の柄を掴み、力任せに奪い取ると、丸太でも抱えるように、男の太い右腕を捉えて抱え込み、カラの数倍はある男の身体を、紙で作られた人形のように軽々と持ち上げ、自分から出来るだけ遠く、離れた場所へと投げ飛ばした。

カラの思いもかけぬ行動と力に、若い男はなんの対処もとれず、ただ高く、遠くへと投げ飛ばされた。

運悪いことに、飛ばされた先には、剥き出しの大岩があった。

そして、高く放り上げられた分、落下の勢いがあった。

激しく岩に叩きつけられた後、男はざるりと、一段低くなつた地面に落ちた。

落ちた男は息が出来ず、呻きを漏らすように口を数度動かすと、びくびくと数回大きな痙攣をし、口から赤い泡を吹き出したのを最後に、動かなくなつた。

「お、おいつ」

仲間の男一人が、落ちた男の脇に駆け寄り、口々に名前を呼んだ。しかし、落ちた男は指先一つ動かさなかつた。

「死んでる、死んでいるぞつ」

仲間の男の叫びが、他の男達に衝撃を与えた。カラには、男の言つてゐる言葉の意味が、一瞬分からなかつた。分からなかつたが、膝ががくがくと震え出し、手に握つていた大鉈は、どさりと地に落ちた。

仲間の死を確認した男の一人が、ゆらりと立ち上がり、カラを指差し、叫んだ。

「殺せ、この化物を、殺せ　つ」

椅子に座り、カラは俯いていた。

円卓の上には、アルフィナの運んできた朝食が置かれていた。両膝の間に垂らしていた左手を見た。

まだ、アルを払つた時の感覚が残つてゐる。

アルの身体が飛んだ光景が、どつと床に落ちた時の音が、まざまざと蘇つてくる。

そしてそれは、過去の苦い記憶も蘇らせた。

「　こんなつもりじゃ……なかつたのに」

闇森の主　に《ふたつの宝》を渡すのと引き代えに手に入れた、

身体的な強い 力。

身体が小さな上に、腕力もなかつたカラは、力強さに憧れた。非力なだけで馬鹿にした、鍛冶屋の弟子たちを見返したかった。力があれば、荷運びでもなんでも、ありつける仕事も増えると思った。

単純な思い付きで望んだものであつたが、たつた一人で、大人でも見上げる大岩を動かせる力を得たことは、とても嬉しく、自慢したくて堪らぬことだった。

しかし、時間の経過と共に、身体に見合わない大き過ぎる力は、トラブルを招くことが多くなつていつた。

力の加減を誤つて、手を着いた壁に穴を開ける、扉などの取手、場合によつては扉丸ごとを壊す、そんなことはしょっちゅうだつた。

この五ヶ月の間、カラ達は人目のない場所ばかりを通つて来たわけではない。時には人目の多い村や町を通過し、宿に泊まることもあつた。

カラは、極力物に触れぬようにし、必要な時は、細心の注意を払いつつ手足を動かした。

だが、力の加減以上に注意を払つていたのは、影を持たない、透けた身体を見られないようにするのことだつた。

人の目のある場所では、常に気を張つていた。ラスターの背後に身を隠し、少しでも濃い影の下に身を置くようにしていた。

それでも思わぬことから、カラの身体の異常を見咎められることが幾度かあつた。

説明をして納得されることは、まずない。

特に、これまで通つてきた南部の田舎町では、オーレンと同じく、迷信深い人々が多く、カラを魔物、化物と怖れ、追い払おうとすることが、人々の当然の反応だつた。時には、あの村のようになに、化物をわざわざ「退治」しようとする村さえあつた。

言葉で分かつてもらえない以上、見咎められれば逃げるしかない。逃げ切るには、防衛のための抵抗が、必要な場合もまああった。

そして、あの事件が起つた。

あの後、どうやって逃げおおせたか、はつきりとは覚えていない。ラスターが加勢に駆けつけ、仲間の死に更に怒りに狂つた男達の囲みを破り、呆然となつていたカラを連れ出した。

背後から、いつまでもカラを呪う男達の声が聞こえていた。あの時の、若い男の血を流し痙攣する姿が、仲間達の叫び声が、目に耳に、いつまでも張り付いて消えなかつた。

傷からの熱と悪夢にうなされながら、カラはこの時初めて、ラスターに、闇森の主との取引で得た力について打ち明けた。それからしばらくの間、夜は眠れず、人影を見るだけで怯え、手が足が勝手に震えた。

そんなカラに、ラスターは何の言葉もかけなかつた。ただ、ガーランが時々、気紛れにカラの傍らで丸くなつて眠つた。

力の制御を学ぶ必要を、カラは痛切に感じた。

あれから三ヶ月。ようやく最近、自分なりのコツが、身に付いてきたと思っていた。

しかしちょつと油断をすると、アルに起きたような事態を招く。むしろ、アルに対しては、まだ加減が利いていたくらいだつた。だが、一步間違えれば、アルもあの若い男と同じことになつたかもしれない。

そう考えただけで、身体が勝手に震えた。

鼓動が早くなり、息が苦しくなる。

カラは震える身体を屈め込み、床に触れた。床板はとても硬かつた。

「痛いよ。 こんな床に叩きつけられたら、すぐ、痛いよ 」

アルが運んでくれた食事に、手をだす気にはなれなかつた。 床に転がつていた小杯を拾い上げると、カラは両手で包み込んだ。

「 ごめん……、ごめん……」

しゃくり上げそになるのを必死で堪え、カラは幾度も鼻をすすぐつた。 どれだけの時間、そうして俯いていたか分からなかつた。 窓から差し込む光は、高さと白さを増し、静かに、窓と対面する壁を照らしながら、室内をいつそう、明るくしていった。

明るく暖かな陽の光は、カラの座る円卓の辺りも照らした。 陽光に包まれているうちに、カラも徐々に落ち着きを取り戻した。 袖で涙と鼻を拭い、のろりと顔を上げると、ラスターが剣帯に長剣を下げ、外出する支度を整えていた。

「 ラスター。 どこかに 行くの？」

「 イリスには全て話してある。 カラ。 君はこの宿の敷地外へは出るな。 ガーランの件は、君とは無関係なことだ」

それだけを口にすると、ラスターはカラを振り返ることなく、部屋を出て行つた。

扉の閉められる音が、妙に大きく感じられた。
ラスターの残した言葉が、扉を閉めた残響と合い混ざり、カラの耳に繰り返し聞こえる。

窓からは、眠りから醒め活動を始めたキソスの町の音が、遠くに聞こえていた。

5・苦く痛い傷（後書き）

次回 6・諍い・そして仲間
に続きます。

6：諂い・そして仲間

6：諂い・そして仲間

レーゲスター大陸東北部、キトナ地方の中央にキソスの町はあり、その東郊外、フォイナという小高い丘の上に、一千有余年の歴史を誇る、白亜のキトナ大神殿はある。

第三のエラン・コーラを守護神に、御子の親である陽の男神ソルギムと、月の女神ユルソルを併せ祀る、大陸東方最大の聖地である。

かつては東都であつたキソスの町を一望できるこの場所から、大神殿の神官達は、キソスや現在の東都ルーシャンがあるキトナ地方のみならず、東方地域に現れる様々な兆しを読み解き、人々に教え、正し導いてきた。

大神殿は、前殿 祭殿 奥殿、奥殿に付随する 深殿
とからなり、一般の人々に解放されているのは、大扉から続く長大な方形の前殿、二重の柱を両側にめぐらした柱廊を間に挟み、エランの神像が坐ます 聖壇 が置かれる祭殿、の一殿である。

見上げるばかりの重厚な大扉をくぐった途端、燭台の僅かな灯りしかない前殿の、仄暗い、冷えた空気に包まれる。視線の遙か先まで、等間隔に並び立つ柱の上部に灯された焰が、夜の水面に映る月灯りのように揺らめき、その場に立つ者に、それまでいた日常とは異なる、幻想の世界に足を踏み入れたかのような錯覚を与える。

静謐な薄闇に置かれた者達は、視線をひたすら前に据え、注意深く足を踏み出す。

変化の見えない、柱列の合間を数十歩進むと、燭台の焰は途切れ、

代わるように、進行先に燭灯とは異なる淡い光を見出す。

更に数十歩の闇を抜けると、唐突に闇は終わり、柔らかな陽光に満たされた柱廊、それに続く、大神殿の中核となる祭殿へと行き着く。

祭殿の円形天井は遙か高く、壁面の上部により多く穿たれた窓の開口部から差し込む光が、天井部を地上より明るく見せる。

この祭殿深奥部に、大神殿の心臓ともいえる聖壇が置かれている。前殿から柱廊、そして祭殿中央まで貫くように立てられた柱列が、祭殿入り口に立つた者の視線を、自然に、祭殿正面に置かれる聖壇へと誘う。

祭殿を満たす静寂と、三方の窓から注ぎ込む光が生み出す淡い影とが、殿内に神秘的な陰影をつくり出し、訪れた者に時を忘れさせる。

祭殿聖壇の後方、東奥次扉から続く歩廊を進むと、祭殿より小規模な祈祷所である、奥殿があり、ここは神官および巫子等、大神殿に仕える聖職者専用の空間である。この奥殿の背後には、大陸東方の神殿・教会堂に属する全聖職者の頂に座す、大神官の御座所、深殿が置かれている。

深殿には、大神官の居住空間である御座所の他、御座所から別々の歩廊でつながれた、奉獻物や財宝を置いた宝物庫である 後室と、託宣の秘儀が行われる至聖所である 沈思の間 があつた。

また、御座所の隣室には、内々で大神官を尋ね来る客人が通される 諸賢の間 謁見のための部屋が設けられていた。

*

「エラノール ？」

脇に控える侍童が捧げ持つ銀盆に玻璃の杯を戻しながら、老人は御座所の隣室、諸賢の間で頭を垂れている男に言葉を向けた。

薰らせた香の白い煙が、御座の間から諸賢の間まで、細くゆるりとなびいている。

高雅な香りに満たされた御座は、さほど広くはなく、室内を照らすのは、中央に置かれた御座の脇で灯される、小さな銀の燭台の二つの焰だけだった。

過度の装飾はなかつたが、支柱や天蓋に施された彫刻、壁面に描かれた画は何れも精緻であり、わざわざ目を向けなければ気付かぬ蝶番ひとつひとつにまで、緻密な文様が彫り込まれていて。

高い天井部を支える柱から、扉や梁を飾る小さな金具に至るまで、建設当時最高の技を以つて造られたことは、その方面に明るくない者をしても十二分に感じさせる、壯麗な空間であった。

祭殿とは異なり、奥殿にも深殿にもほとんど窓はなく、支柱に支えられた高い方形の天井部はまるで光が届かず、黒く重い闇が漂い、御座の背後もまた、光が届かぬが故の薄闇が常に漂つっていた。

現在の御座の主は、相当の高齢にも関わらず、声は太く肩幅はがつしりとして広い。
立てば背丈もかなりあることは、座っている姿からも、容易に察することが出来た。

高位を示す濃紫の艶ある綿衣に、金糸をふんだんに用いた肩衣をかけ、胸元まで伸びる白鬚を、節の目立つ長い指で優雅に梳いている。

老人の背後に一つある蠅燭の灯火は仄暗く、垂れ布で御座の上部を隠さずとも、その顔をはつきりと見ることは難しかつた。

「狩り人 の一名が、左様申しております。先日、聖獸グリフィスの捕獲に成功いたしましたおり、 狩り人 が対峙したグリフ

イスの主らしき者。その者は、精靈王殿の騎士である
ノールであると「

「グリフィスを連れた 騎士

「しかし、真に、そうなのでしょうか？ 伝えにあります
エラノールなど、真に存在しておりますのでしょうか？」

「それは即ち、我らが 神 をも信じられぬ、といふことか
神官トマ？」

御座の老人は、重く響く声で問い合わせ返した。

トマと呼ばれた五十がらみの白衣の男は、身を縮め、蝦蟇のよう
に床に這い蹲り、ようやく、といった様子で言葉を口にした。

「い、いえ、神 を信じぬなど、そのようなこと、私は、決して

」

頭を垂れたまま、トマはガサガサとしわがれた声で答えた。小
柄で白髪交じりのトマが控える諸賢の間の左右には、御座とは違い、
格子飾りの付いた窓があった。そこから、まだ低い朝の陽光が室
内に射し込んでいたが、やはり高い天井と室の四隅に光は届かず、
そこには御座の間同様、薄暗い闇があつた。

「エラノール」

老人は、低く笑いを漏らすと、謳うよつて言葉を続けた。

「レーゲスター創世の神、エランの 聖なる血 の器となるもの。
ただ、その身の内に満たされる聖血を護るために存在する、仮

の 器 で あ り 種 子 と な る も の 「

トマはちらりと後方に視線を向けると、御座に向かい姿勢を正した。

「かの者は、かつて騎士としてキトナに仕えた者であり、エラノールを見たと申してある 狩り人 でございます。腕は、確かにござります。お許し頂けますならば、聖獣ではなく、そちらの狩りに、向かわせたく思い、拝謁を賜つた次第にござります」

諸賢の間両側に並ぶ八本の柱の、一本置きには衛士が直立し、陽の光の届かぬ左列最後の柱陰に、一人の男が肩膝をつき、影に潜むよつに控えていた。

俯いた男の顔には、油氣のない伸びた黒髪がかかり、その顔はよく見えはしなかつたが、生活に疲れた者特有の、暗く重い影を纏っていた。衣服は着古された安物のようだつたが、そういった外見の様子とは無関係に、控える男の姿には一部の隙もなかつた。

「現在は落ち、野伏となつた 元騎士か」

無感動に老人は言い放つと、髪を梳いていた手を止め、ゆっくりと、右中指にはめられた指輪に視線を落とした。

厳つい老人の指には纖細すぎる、銀細工の指輪の中央には、薄い光を放つ金色の石が嵌め込まれていた。

「エラノールの出現。神は、我等が望みを聴き、道を開くか。または、我等を誑かし貶める、神の謀か」

御座の老人は、再び低い笑いを漏らした。

「まあ、どちらでもよい。全てを手にした時、その答えも自ずと、

判ひつとこひものよ 」

老人は指輪の手を払ひよひ、僅かに動かした。諸賢の間に控えていたトマは、柱陰に控える影のよつた男に、肩越しに視線を投げ、行動を促した。

黒髪の男は言葉なく立ち上ると、影に融けひよひ、諸賢の間を出た。

＊＊＊

廊下には、暗緑色の大きな帽子を田深に被つたアルが立っていた。その口元はむつつりと引き結ばれ、落としている視線を少しも上げようとはしない。

カラは、心の準備ができていなかつた。

謝らなくてはいけないとthoughtいたが、どのように切り出すか、なんと言つて詫びればよいか、まだ考えがまとまつていなかつた。

そんな最中の、予想外のアルからの訪問にカラは困惑し、頭は言うべき言葉を必死に探しだそうとしていたが、何もよい言葉は浮かんでこない。

「あ、あの、アル。 僕」

「ついて来て」

「え、あ、あの……」

アルの平板で無愛想な声に、カラは更にまじついた。

「馬達の餌、今日、まだなの。 厥舎の敷き藁も変えなきやいけない。 イリスがあんたに手伝つて貰えつて。 中庭を通るから、念のため外套は着ておいて。 出入りの店の注文取りが、来ないとも限らないから」

言葉を言い終わらぬうちに、アルはぐるりと向きを変え、階段を下つていった。 アルの背を呆然と見ていたカラも、慌てて外套を羽織るとアルの後を追つた。

馬小屋は、旅籠の中庭を抜けた、イリスとアルフィナの暮らす母屋の横手にあつた。

厩舎には、馬車を引く六頭の馬の他に、四頭の驃馬と三頭の驢馬、五頭の山羊がいた。

ようやく食事が貰えると知つてか、彼等はせわしなく首を振り足を踏んでは、少しでも早く餌を貰えるよう、自分の存在をさかんにアピールし、厩舎の中は大変な賑わいだつた。

餌の前に、まず熊手で古い敷き藁を搔きだし、新しい藁を入れてやつた。 それからようやく、彼等がお待ちかねの飼葉を、各柵内の住人のもとへと運んだ。

秋も深まり、朝晩は肌寒さを感じる気候になつていて、働くうちに、カラは汗びつしょりになつっていた。

万が一、人に姿を目撃されても誤魔化せるよう羽織つてきた外套も、馬や山羊達の前でまで着ておく必要はない、と、さつさと脱いでしまつっていた。

身体を動かしていると、先程までの悶々とした気分が、汗が流れると一緒に、少しずつだが流れ消えていく。 かつて、鍛冶屋などでもよくやつていた作業だが、久しぶりに行ってみると、これ

はこれで楽しかつた。

全部の馬や山羊達に餌をやり終えると、カラは柵の一つに腰を下ろし、厩舎内を見まわした。すると、厩舎の一一番奥にもう一頭、馬がいることに気が付いた。

他の家畜とやや離され置かれたその馬は、カラを見ているようだつた。

「アル、もう一頭いる。あの馬は？ 餌、あげないの？」

「あんたがやつて」

背中を向け立っているアルから、つつけんどんな答が返ってきた。その言ひように、カラはまたちょっとムツとしたが、離れた馬の存在の方が気になり、素直に飼葉桶を手に近付いていった。

他のどの馬よりも姿形の良い、見事な黒毛の馬だった。カラの記憶する馬の中で、群を抜いて美しく、立派な馬だと思った。

毛と同じ、深い黒茶の瞳は知的な光を湛え、鏡のようじに、カラの姿を静かに映していた。

「エアルース。ラスターの馬よ」

相変わらず不機嫌なままのアルの声が、投げつけられるようじに、カラへと飛んできた。

しかし、馬に見惚れていたカラは、アルの不機嫌も気にならなかつた。

「ラスターの馬？ ラスター、馬なんか持つてたんだ。すごいや、こんな綺麗な馬、初めて見た！ すごく速そうな馬だよね？ でも、なんでオーレンには乗つて来なかつたんだろ？ 馬だつたら、楽だし早いのに」

「オーレン オリアスに行く前、エアルースが傷を負つたから、ラスターはここに預けていったの。危険が多いし、むしろ徒步の方が回りやすいからつて。それまでは、何処へ行くにも必ず一緒にだつた。エアルースはガーランと同じ、ラスターの大切な旅の仲間で友達で、家族なのよ」

「へえ、そうなんだ」

カラはエアルースの目を覗き込んだ。
穏やかな深い黒が、カラの目を見返した。

「あんた、ラスターに短剣を『えられたくせに、ラスターのこと、何にも知らないのね』

気持ちを無理矢理押さえ込んだような低い声で、アルは吐いた。

「仕方ないだろつ、ラスターは何にも話してくれないんだから

棘のある言葉に反論しようと、カラはアルを振り返つた。
視線の先に立つアルは帽子を脱ぎ、怒つてもいるかのように、真つ直ぐにカラを睨みつけていた。

綺麗な顔は、怒つても綺麗なんだと、カラは驚きと感心半分でアルの顔を見た。
よくよく見ると、力強い大きな黒の瞳には、薄つすらと光る物が浮かんでいた。

「…………！ ア、アル、泣いて…………の？ も、もしかして、あの時ぶつけた肩が痛いの？ 僕、あの、本当に…………」

アルは目を丸くすると、大きく息を吸い込み腰に手をあてた。

「あんた、馬鹿じゃないの？ なんだってあたしが、そんなことで泣かなきゃいけないのよ。 だいたい、泣いてなんかいないじゃないつ」

アルの強い語氣に、腹立ちと戸惑いを感じながら、カラはアルの正面に向かい直った。

「だ、だって涙。 それに、あの時、すごく痛そうに俯いてたから。 だから、あの……」

「あ、あれば、あんたの動きを読めなくて、避けきれなかつた自分に腹が立つてただけよ。 あんたのせいじゃないわ。 だから」

それまで決してカラから目を逸らさなかつたアルが、ふいに視線を逸らせた。

「 悪かつたわよ……」

顔を横に向け、アルはぼそぼそと言った。

カラは一瞬、何を言われたのか分からず、目を大きくしてアルの顔を見つめた。

「あの時は ちょっとイライラしてて、あんたに、八つ当たりしちゃつた……のよ。 あんたつたら、とろとろしてるし、何にも知つちゃいないし、見ていると余計腹が立つて。 でも、我ながらみつともなかつたし……あんたには 悪いことしたと思うわ」

アルフィナは時々言い淀みながらも、早口で話し通した。 その

言わんとすることを理解しきれず、カラは相変わらず呆然と、アルの顔を見つめていた。

その視線に苛立ちを感じたのか、アルは軽く舌打ちをし、カラを正面から睨みつけた。

「もひつ、だから 謝つてんのよ。 悪かつたって……ごめんなさいって、言つてるのよ!」

謝られてているとは氣付かなかつたが、アルの顔が微妙に赤くなつていることは分かつた。

謝られついでに、たくさんんの悪口も言われたような氣がしたが、アルが必死にその言葉を伝えよつとしていることは、さすがのカラにも感じられた。

アルの意を解したことで、カラもアルに言つべき言葉をよつやく見つけ、口にするきつかけを得たと思つた。

「あ、あの、僕も」

「あーあ、これで肩の荷が下りた」

言つだけの事を言つてスッキリしたのか、アルは大きくひとつ伸びをすると、不敵な笑みを浮かべ、カラを上目に見つめた。

「私の方が先に言つたわ」

「え? 何が?」

何の話になつたのか付いてゆけず、カラはきょとんとアルの顔を見つめた。

「イリスも言つていたでしょ？　”アルも悪かった”つて。　”も”つてことは、つまり、あなたにも、悪いところはあつたのよ。　その馬鹿力とか、ちゃんと制御できないのは、あなたのミスだもんね？　ということは、あんただつて、私に謝るべき点はあるのよね」

先程までの、多少のしおりしさから一転したアルの態度と勢いに、カラは口を開けたまま、何の言葉も切り出せなくなつた。　そんなカラの様子を見て、アルは少し控えめに笑うと、一方的に言葉を続けた。

「でも、私は気にならないわ。　あんたは病人だし、旅の苦労は私にだつて多少は理解できるもの。　疲れていたら、判断力が落ちるのは当然だものね。　ましてや、あんたは知識も経験も少ない子供なんだから、尚更よね。　わざとではないんだし、この先こんなことがないよつ、注意すればいいだけのことだわ」

言葉が早くて半分ほど聞き逃したが、カラにとつて、明らかに不快で腹立たしい発言が含まれていることだけははつきりと分かつた。

「な、なんだよつ。　自分ばっかり一方的に喋つて。　勝手なことばっかり言つて　。　僕だつて、君に謝ろうつて思つてたのにつ。　どうやって謝ろうかって、ずっと、考えてたのに　」

口を開くと感情が昂ぶり、声は震え、涙が出そうになつた。　しかしここで泣くと、更にアルに笑われるだけだと思った。　カラは拳をきつく握り、腹に力を入れると、懸命に声の震えを抑えようとした。

「じゃあ、仲直りしましょ？」

アルは、いつの間にかカラのすぐ目の前に立ち、白い小さな手を、すっとカラに向かい差し出した。

アルの黒の瞳が、カラの金色の瞳を真っ直ぐに見つめている。口元には、それまでには見られなかつた、優しい笑みがあつた。アルの言葉に怒つていたはずなのに、正面きつて微笑まれ、手を差し伸べられると、怒りも涙も、急に何処かへ消えてしまった。

「あたしとあんた、友達になれると思うの。

正直言うとあたし、こんな性格だからすぐにケンカになつて、友達、多くはないの。あんたも、きっと少ないでしよう？ あたし達、きっと仲良くなれると思うし、そうしたら、いい友達になると思うの。でもまず、ケンカを終わらせなくちゃ、あんたもスッキリできないでしよう？」

よく分からぬ理屈だったが、アルフィナの目は真剣で、どこか寂しげな色をしていた。

友達 。

少ないも何も、そんな言葉で思い出す顔が、カラにはひとつもなかつた。自分をそういう言葉で紹介してくれた人の顔も、全く記憶にはなかつた。

「 カラ」

カラは視線を足元に落とし、胸元のペンダントを弄りながら、ぼそぼそと短く言つた。

アルはきょとんとした顔でカラを見つめた。

「 ”あんた” じゃなくて、僕は ”カラ” だよ」

アルは一瞬呆気に取られた顔をしたが、すぐに鈴のよくな笑い声を上げた。聞いているカラも嬉しくなるよつな、明るく、楽しそうな笑い声だった。

「そうね。あんたは”カラ”。カラだわ。ラスター やイリスみたいには、あたし覚えておけないけど、忘れたら聞くわ。いいでしょ？ カラ」

「うん」

自分でも単純だと思ったが、真っ直ぐに向けられるアルの、好意に満ちた笑顔が嬉しくて、つられてカラも満面の笑顔になった。

「あ、あの、それから僕、ごめん、なさい。君に怪我させて。それから」

カラはおずおずと手を伸ばして、差し出されたアルの手を、ぎこちなく握った。

「ありがとう。僕を森から運んでくれて。助けてくれたのが、アルで、よかつた」

言ひながら、カラはまた顔が真つ赤になつてゐるだらうと思つた。ちらりと上目遣いに見ると、アルの頬も赤く染まり、一寸、戸惑つてゐる様にも見えた。

しばらくカラの瞳を見つめると、アルはしつかりとその手を握り返し、改めて綺麗な笑顔を見せた。

「困った時は、お互ひ様よ。さ、あたし戻つてお昼の支度をしなくちゃ。カラも朝食、結局食べてないんでしょう？ 部屋に戻つ

て待つて。温かいシチューとパン、すぐを持って行くから。あ、それからあんた　じゃない、カラ。部屋を後で移つて、イリスが言つていたわ。母屋の空き部屋を準備するつて。ラスターの話しだとしばらくキソスに滞在するだろうから、客じゃなくて家族、としてあんたを迎えるつて。カラは、あたし達の家族になるのよ

アルフィナは、軽く咳払いをして帽子を被りなおすと、バタバタと厩舎から出ていった。

「家族。　かぞく？」

アルの残した、自分には馴染みのない言葉を、カラは口の中で繰り返した。なんだか夢の中で喋つているような気分だつた。ぼんやり、アルの走り去つた中庭へ目を向けたままにしていると、横から生暖かい息に続き、大きな鼻面がカラの頬を軽く突いた。

「う、わつ。　あ、なに、えつと、エアルース、だつけ？」

エアルースは軽く上下に頭を振ると、左足で飼葉桶のある地面を数回かき、何かを要求するような態度を取つた。

「え、あ、あつ、」めんつ。僕、君の」飯、まだ入れてなかつたんだ。」めんよ」

エアルースは一回、カラに粗く鼻息を吹きかけると、大きな頬を擦り付けて、カラに甘えるような仕草をした。

「エアルース。もしかしてご主人の、ラスターの匂いを、僕から嗅ぎ取つてゐるの？　まるで、ガーランがラスターに甘える時みたい

だ……」

エアルースの黒く艶やかな首筋を撫でてやりながら、カラは、気位の高い黄金のグリフィスの、主人に甘える幸せそうな姿を思い出した。

もしかしたらもう、ガーランの命は失われているかも知れない。
。 そんな思いが、濶が上へ上へと押し出されるように、頭に次々と浮かんでくる。

ラスターに「無関係」だと言われたことのショックもあり、イリスの言葉を聞いていてもなお、悪い考えばかりが浮かび、なかなか消すことが出来ずについた。

カラは大きく頭を振つて、そんな悲観的な考えを払い落とそうとした。

「ラスターは、ガーランが死んだなんて言わなかつた。 イリスさんも、ラスターが言わないうちは大丈夫だつて、言つたじやないか。
そうだよ。 まだ何にも、ちゃんとは分かつてないんだ。 だつたら」

決意を固めたと同時に、腹がぐぐうと大きく鳴つた。

エアルースの飼葉桶をたつぶりと満たし、その黒い鼻面をひと撫ですると、柵にかけていた外套を羽織り、カラはシチューが待つ部屋へと、全速で駆けて行つた。

6：諂い・そして仲間（後書き）

次回 7：行動 に続きます。

今日も、朝から見事な秋晴れだつた。

雲ひとつない青空は、キソスの町を明るく包み、からりとした爽やかな風がそよぐ中、旅人であろう男達が、あちらこちらの戸外席で、ティエールといつさつぱりとした香りの花茶を、氣の合つ仲間と一緒に楽しんでいた。

足を組んでゆつたりと座り、パイプを吹かしている男達の話は主に、どこでどんな品を売ったの買ったのと、さり気ない自慢も交えつつ、情報交換といったものようだつた。会話の中には、大陸公用語であるシュア語の他、諸地方の言語も入り混じつており、それぞれの言語の音律が混然として、通りに不思議な活氣を生み出していた。

昼食前の時間とあつて、通り沿いの食堂の内からは、香辛料をまぶした揚げ物や煮込みの芳しい香りが通りまで漂つてきている。だが、カラはアルフィナの話を聞くことに精一杯で、異国の響きにも鼻腔をくすぐる香りにも、氣を逸らせる余裕などなかつた。

「えつと、つまり、生き物はみんな、エランが自分の血を分け与えて創つたつてこと? でも、びっくりだな。エランつて、あの神殿とか教会に行くと必ずある石像の神様だろ? 五人もいたんだ」

「そんなことも知らなかつたあんたの方が、あたしにはよっぽど驚きよ」

せかせかとカラの先を歩きながら、心底呆れたような声でアルは言った。そんなアルの言い方に、カラは例の如くムツとした。

「だつてさ、どの石像も全部同じ顔に見えたよ？ すこく髪の長い綺麗な顔をしてて、必ず白い、高価そうな石で造られててさ。だから全部同じ一人の神様かと思ってた。キトナ大神殿にあるのは、三番目のエランの ルーラ？ あれ、ラーナ、だつけ？ その像だつて、どうせ白い玉石で造られた、綺麗な姿してるんだろ？」

建物の落とす影から極力はみ出ないよう注意しながら、カラは早足のアルの後を離れずについて歩いた。

外套で身体を隠し、フードを田深に被つて歩くこと、既に半刻（三十分）は経つている。

天気の良いこともあって、カラは軽く汗ばんでいた。

「誰よ、ルーラって。 ノーラよ。 一度も聞かせたでしょ？ あんた、本当に信じられないくらい物覚え悪いわね」

アルは、後ろに歩くカラの顔を僅かに振り返り、少し怒ったような口調で言った。

『エラン神を讃える詩』なる、アルに言わせれば「昔語りの基本」だという詩の講釈を、カラは歩きながら受けていたのだが、一・二度聞いたくらいでは到底頭に入りはしない。

物覚えがよくないことは、カラ自身、かなり自覚はあつたのだが、他人にこうもずけずけ言わると、やはり面白くない。

面白くないことを言わると、声には自然、険がでてしまう。しかし、カラとアルの会話では、言い合いに近いやり取りが、この数日ですっかり普通となっていた。

「そんな長つたらしい詩、一・二度聞いただけじゃ覚えきれないよ。だいたいさ、怪物が暴れるわけでも、英雄が活躍するわけでもないしや、全然面白くなんかないよ」

「レーゲスターの創世を詠んだ詩の中でも、これが一番簡単なものよ。好き嫌いじゃなくて、伝承や歴史の勉強の一環だわ。この程度、もつと小さな子供だつて、読み書きを始めると一緒に習い知つているわよ」

「だつてオレ、読み書きなんか」

カラは言いかけて慌てて口を塞いだ。

アルは、足を止めてカラを振り返ると、大きな帽子の下で、意味ありげな笑みを見せた。

「ふうん。読み書き、出来ないんだ？」

「す、少しくらいは知つてるよつ。昔いた町の尼僧様が、ちょっとは教えてくれたし、ここに来るまでもラスターが少しほは教えてくれたし」

カラがラスターの名を口にすると、アルの顔は決まって険しくなる。一瞬の間をおいて、アルは明らかに不機嫌な声を出した。

「ラスター、あんたに読み書きを教えてるの？」

アルはカラを、睨み付けるように見据えた。帽子のつばに隠れ、アルの顔全てがはつきりと見えるわけではなかつたが、アルの大きな黒の瞳に睨まれていると思つただけで、カラは一瞬まごついてしまう。

「あ、う、うん。公用語のシュア語と、ユーア、つていつの？北方の古い言葉だつていうやつ。オレのペンダントに刻まれてる文字が、それなんだつて」

アルは「それはよかつたわね」とだけ言つと、ぐるりと背を向けて先を歩き出した。

顔は見えなくても、相当不機嫌になつてゐることが、硬くなつた手足の動きからはつきりと分かつた。

昨夜も、数日戻らないラスターの事を話している内に、カラはアルと言い合いになつた。

その場にいたイリスミルトの仲裁で、二人の言い合いは早めに終結したのだが、アルは厨房の後片付けをすると言つて、不機嫌顔のまま、さつさと部屋を出て行つてしまつた。

イリスと一人になつたカラは、何故アルはラスターの話になると、自分にきつくる当たるのかを、愚痴を混ぜながら尋ねた。

イリスは苦笑しながら、「話したことは内緒よ」と言つた後に、アルもカラと同じく騎士となることに、幼い頃から憧れを抱いていたのだと話してくれた。

レーゲスターの歴史の中には、少ないながらも女騎士は存在していた。女騎士を讃えた詩や、女騎士の活躍を詠んだ叙事詩なども多數あつた。そんな昔語りの女騎士に、アルも憧れを抱いたのかも知れない。

イリスの話の中で知つたことだが、ラスターは、騎士の中で最も位の高い 聖騎士 という称号を得てゐるのだという。

そしてアルは、そんな騎士中の騎士であるラスターに心酔しており、事ある毎に、ラスターに様々な教えを請つてゐるのだが、一度として聞き入れられたことはないのだという。

それ故に、ラスターが連れとしているカラのことが、羨ましくて、妬ましかつたのだろうと、イリスは穏やかに微笑みながら言った。

そして、そんなアルの怒りを増幅させているのが、ラスターがカラに与えた短剣の存在だった。

指摘されるまでカラは認識していなかつたのだが、騎士から短剣を授けられるということは、授けた騎士に随行を許された証となる。言い換えれば、その騎士は、短剣を授け与えた者を、己の騎士見習 徒騎士 として導き育てる、師弟の契りを交わしたこととなるのである。

カラが聞いた昔語りの中でも、騎士となることを志す少年が、憧れの騎士に幾度となく師事を請い、己の固い決意を示し続けた末に、ようやく短剣を授けられ、騎士見習となり、感激に涙する場面があつた。

その話を始めて聞いた時、カラはその少年を心底羨ましく思い、自分もその少年のように、上手い具合に騎士と出会い、見習になれないか、などと夢想したことがあつた。

だが、カラがラスターの短剣を所持するに至つた経緯は、そんな感動的なものではなく、むしろ、自分の軽率と愚かさを想起させる、戒めのような存在であつた。 とはいゝ、カラがラスターに短剣を与えられた、という点だけを取れば、それもまた事実だつた。

どういう経緯であれ、ラスターの短剣をカラが所持していることが事実である以上、アルにしてみれば、面白くないことに違ひはないだろう。

アルは、それまで以上の早足で歩いていた。

二人が歩く飲食街は、昼食を取るために繰り出して来た人々で賑わい始め、うかうかしていると人込みに紛れ、互いを見失いかねない。 カラはアルを見失わないよう、必死に付いて歩いた。

「べ、別にぼ、じゃないオレが頼んで教えてもらつてるわけじゃないし、最近はそんな時間もなかつたから、全然進んでないし」

悪い事をしていわけではないが、カラはなんとなく、アルに言い訳じみたことを言つた。

そんなカラの弱気な言葉に、アルは更に腹を立てたようだつた。

「あんた騎士になりたいんでしょ？ 騎士つてのは、あらゆることに秀でた者しかなれないのよ。 そんな人間が、読み書きも出来ません、なんて、武芸以前の問題じやない。 誰かに教えてもらつたを待たないで、自分から勉強してみたらどうなのよ」

アルの物言いはいつも容赦がない。 一週間そちらの付き合いで、アルの言葉にどれだけ腹を立てたか、カラは数え切れなかつた。

「あんたじゃなくて、カラだよつ。 アルだつて、物覚え悪いじやないかつ」

「あたしがあんたの名前を覚えられないのは、あんたが受けた呪いのせいじょ？ それよりさつさからカラ、あんた影からはみ出てるしフードから顔が出かかつてる。 注意が足りなさ過ぎるわよ」

カラはムツとしつつも、アルに言われたとおり、建物の影の中に全身を入れ直し、頭からずり落ちかけていたフードを、再び目深に引き下ろした。

多少肌寒い日だつたので、昼の日中から外套で身体をしつかり覆つついても、そのことで人目を引くことはなかつた。

だが、ラスターが買つてくれた外套は、着丈がカラにはかなり長く、まるで、大きな布を巻いて作つた案山子が歩いているような、

少々珍妙な姿に見えた。 その奇妙さが、すれ違う人々の目を、一瞬だがカラの上に誘つた。 透ける身体を隠すための大きさであるとは思うが、それでも、ラスターのサイズ選びは、かなり大雑把なものだつたのではないかと、カラは思つてゐる。

「だいたいオレ、ラスターに旅籠の敷地からは絶対出るなつて言われてるのに。 ついて来てくれつて言うんならさ、いつたいどこに行つてるのか、いい加減教えてくれたつていいじゃないか」

「あんた、外に出たくてうずうずしてたでしょ？ あたしがちょっと誘つたら簡単について来たくせに。 いいじやない。 ラスターが戻る前に帰ればいいだけのことでしょう」

「”ちよつと”なんて誘い方じやなかつたじやないかつ。 オレの部屋に来た途端、泣きそうな顔して迫つてきたんじやないかつ。 ガーランの」

「よう！ アルつ。 やつぱりな。 アルフィナの声が聞こえるつて思つてさ、飛んできて正解だつたよ。 愛の力は偉大だろ？」

周囲の田を気にし、小声で文句を言つていたカラの言葉を吹き飛ばす、陽気な声を上げながら、明るい赤茶の髪の少年が、通りの斜向かいの居酒屋から、転げ走る子犬のようにアルの元へと駆け寄つてきた。

アルより三・四歳程年上に見える、そばかすの目立つ顔は赤く、吐く息からは酒の臭いがふんふんとしていた。

身体の線は、まだ子供の細さが残つてゐるもの、背はカラより頭ひとつ以上大きく、声も既に変声を終え、少年の高さはなかつた。 着てゐる服の生地や仕立てが、素人のカラが見ても上質であると判ることから、良家の子息なのだと簡単に察しが付く。 少年の後

ろには、一十歳前後の青年が一人、面倒くさそうな足取りでついて来ていた。

赤毛の少年は人懐こい、こぼれんばかりの笑顔を浮かべていたが、アルは、苦くて不味いあの薬酒を、巨杯で飲まされたような、苦々しい顔をしている。

「アル、久しぶりだなあ？ 元気にしてたか なんて、お前に聞くだけ野暮つてなもんだよな。 しつかしさ、お前まだそんな帽子被つてんのか？ その男物の服もさ、どうにかなんなのか？ ここの俺を、一目で虜にした、キトナーの いや、レー・ゲスターだな、その美貌をさ、そんな小汚い帽子で隠して歩くなんざ、もつたいねえだろ？ 寄り付いてくる男共が鬱陶しつてんなら、俺が全部蹴散らして追い払つてやるから、もう少し前にお前に合つた格好をしろよな」

アルは、わざとらしい程大きなため息を吐くと、ゆっくりと身体の立ち位置を変え、カラを自分の背後に隠した。

「コートリー家のエイリナ坊ちゃん。 まだ昼にもならないこんな時間から、ずいぶん洒落た場所で、素晴らしい怠惰な時間を過ごしていらしたようね？ わざわざこんな町中の飲み屋に来なくて、坊ちゃんの家には、最高級の酒がいくらでもあるでしょうに。 まあたしがとやかく言つことじやないけど。 失礼、あたし先を急いでるの。 坊ちゃんも、飲みなれないもの馬鹿飲みして、道端で無様に倒れないよう気を付けることね。 あれ、かなりみつともないから。 あと、その言葉遣い、『両親が聞いたら卒倒されること間違いなしだから、癖にならないうちに、使うのはやめることね』

アルは少年と田も合わさず、いつも以上の早口で言つ立てると、カラの外套の裾をつまみ、目的地へ歩き出そうとした。

「アル、そんなことを心配してくれてんのか？　じゃあ、安心しなつて。場所によつてきつちり、言葉遣いは変えてるから、アルは心配しなくて大丈夫さ。そもそも、我が理解ある親父殿は、既に知つてつから何の問題もなしだ。けど、まあ、確かに母上は、心配されるかも、だなあ……。アルも俺のこと心配してるんなら、少し考えてみてもいいけど。なんてつたつて、俺達は将来夫婦になるかもしれないんだからな。嫁の言うことに耳を傾けないほど、旧い男じゃないぜ、俺」

エイリナと呼ばれた少年は、アルの毒舌悪態に相当耐性がついているのか、怒るどころか却つて嬉しそうに、自分のペースを崩すことなく喋り続けた。

アルもまた、エイリナの性格を知り尽くしているのか、比較的、怒りを抑えている様子だった。

「誰が誰の嫁になるつてのよ。どこの馬鹿者の考えかは知らないけど、そんな妄想に付き合える程の暇、あたしにはないの」

「酷いなあ、妄想だなんて。我が親父殿は本気だぜ。つい先日だつて、アルへの贈り物にどうだつてんで、雌雄の沙由狼を買つて来たんだぜ。知ってるだろ？ 今では稀少な聖獣の一種で、この狼、一旦夫婦になつたら、どんなことがあらうと決して互いを裏切らず離れないっていう、なんとも涙を誘う、素晴らしい愛情に溢れた聖獣なんだぞ」

聖獣、という言葉に、アルもカラも同時に反応した。アルが乱暴にエイリナの胸元を掴み揺さぶると、流石に予想外の行動だったと見え、エイリナもお供の若者達も、驚き慌てた反応を見せた。

「聖獣つて。 沙白狼 つて、本当なの？ それ、もうあなたの家にいるの？」

アルの剣幕に押され、エイリナは髪の色と同じ赤茶の瞳を大きくし、二・三歩後退りをした。

「そ、それがさ、キソスの町境を過ぎてすぐのアイサンの村辺りでよ、武装した男共に襲われて、一頭とも持ち去られちまつたんだよ。護衛の何人かが、手酷く痛めつけられたらしいんだけどさ、親父殿の代理でルーシャンに受け取りに行つた家令と他の買い付け品は全くの無傷で助かつたんだ。 けどよ、持つてかれた狼はさ、ようやく手に入つた珍しいもんだったからさ、親父殿、相当口惜しかつたみたいなんだよな。 未だに愚痴つてゐるし。 それに何より、アルフィナがそんなに欲しがつてゐるのを知つてたら、俺が何としてでもお前の家まで送り届けたのによ。 よし。 わかつた、まかしとけ。 また北の商人のツテを使って、前以上に立派な大狼を

「延々と終わらないかに思えたエイリナの言葉を、アルの拳骨が終了させた。 アルの拳は綺麗にエイリナの左頬を撃ち、エイリナも話を中断するしかなかつた。

「親の金で衣食住、追加で道楽までしているあんたからは、何を貰つたつて嬉しくなんかないわよつ。 そんなに親に浪費させたいんなら、いつそその妄想が停まらない頭を、大陸一氣の長い名医に診てもらうことね。 だいたい、聖獣を狩ることは、大陸全土で禁止されていることよ。 あんた、そういうた法があることすら知らないでしょ？」

「へえ、そなんだ？ 聖獣、だめなんだ？ あらら、そうだった

んだ。俺てつきり、ヤスリグの爺さんやオコルの婆さんが、一対の翼を持つた鳳やら、五本の大角を持つ金嶺鹿なんかを飼つてていうから、いいのかと思つてた。爺さん達がさ、聖獸つてのは言い伝え通り氣位がむちゃくちや高いだの、餌は最高級の鮮度のいいものを調達してこなくちやなんねーの、それを『える係りの使用人が、聖獸に襲われて次々怪我して辞めてくんで、金がかかつて大変なんだとかさ、すつげえ自慢げに話してたから、問題なしかと思つてたわ』

アルに殴られた頬をさすりながら、エイリナは他人事のように、暢気に感心しながら喋つた。

「何のために、そんな金がかかつて苦労するもの、わざわざ捕まえて飼うのさ？」

「そりや決まつてんじやないの？」自分はこんなにも金持ちだつて、証になるし、自慢もできるだろ。何てつたつて、聖獸つてのは、聖なる獸だからな。ただ”珍しい”だけじゃなくて、美しくて高貴で神聖なつて、お前、誰？」

思わず質問をしたカラの存在に、エイリナはようやく気が付いたようだつた。

分厚い外套を頭からすっぽり被り、顔は全く見えず、背丈もアルフィナと変わらないか、少々小さいくらいである。だが、姿が見えずともその声が、この辺りで聞き覚えないものであることを、エイリナは直ぐに知つた。

「この辺りじゃ聞いたことない声だ。しかも、小さいけど、お前男か？ その発音、東方の人間じやないだろ？ んーん、最近聞いたことあるぞ そう、北だ。この間、親父殿が会つてた北方の

神殿の使いのに似てんだ。 でもまよ、最後の音は、南のに近い気がするけど お前、誰？ なんでアルフィナと一緒にいるんだ。 しかも、よりによつてそんな垂れ布みたいな奇妙な格好で。 アルと一緒に歩くんなら、アルの一番の幼なじみ兼、兄貴分兼、未來の婚約者の俺に、一言挨拶して貰おうか」

エイリナは憤然と手を伸ばし、カラのフードを剥いで、その顔を見ようとした。

良く通るエイリナの大きな声に、興味を示した通行人の、好奇の視線が集まり出した。

それを素早く覚ったアルは、陽が高くなり細くなつた建物の陰にカラを押し入れ、エイリナの手から離し、他の通行人からカラが見えないよう、改めて自分の背後に回した。

「あたしと歩くのに、なんでいちいちあんたに挨拶しなきやなんないのよつ。 この子はあたしの いとこのはとこよ。 すつごく久しぶりに家を訪ねて來たから、キソスを案内して回つてんの。だからこれ以上邪魔しないでよね」

言い終わるや、アルはカラの手をしつかりと握り、猛スピードで駆け出した。

*

「 つたく、疲れたあ」

狭い路地の物陰に、一人して座り込んだ。

陽の当たらない路地裏は、表通りよりぐつと気温が低く、通常なら肌寒さを感じるのだろうが、走りに走り、火照つたカラ達の身体には、その冷えた空気がいつそ心地良かつた。

アルは、帽子を脱いで顔を数回扇ぐと、家から下がってきていた雑嚢から皮の水袋を取り出し、カラにすいと差し出した。

「あ、ありがと。でも、アルが先に」

外套のフードがずり落ちないように押さえながら、カラはアルの顔を恐る恐る覗き込んだ。予測どおり、声だけでなく、顔にもはつきりと不機嫌さが表れていた。

「もてなす者は、客人が一口のワインと一切れのパンを飲み下すまで、一滴の水とて口にはせず」これがキソスのもてなしの基本なの。今はこの水しかないけどね。妙な遠慮はいいから、先に飲んで。その後あたしも飲むんだから、早く受け取つてよね」

怒ったように言つアルに逆らえず、カラは一口、水を口に含んだ。よく冷えている上に、柑橘の爽やかな香りが水に溶け込んでいるようで、後口がスッキリとして疲れが飛ぶのが早い。

もう一口含んだ後、水袋をアルに渡そうとすると、アルは何処を見ているのか分からぬ、沈んだ顔をしていた。水袋を受け取りはしたが、飲むことはしなかつた。

「アル、あの、どうかしたの？ 走りすぎて、疲れたんなら、今日はもう、帰つたほうが……」

アルはいつもの、力強い黒の瞳でカラを睨み上げると、乱暴な仕草で水を飲み始めた。

「いつたい誰のせいで、あんなに走ることになつたと思つてんのよつ。あんたの存在、隠し通してあの妄想魔の前から去ろうと思つてたのに。あんたが口を開かなきや、あいつはあたししか見てな

かつたのに、あんたが自分から存在を主張するんだもの。取りあえずは誤魔化したけど、場合によつたらあんたの身体の異常、見破られてたかも知れないんだからね」

「う、ごめん なさい。で、でも、あの人面白いよね。アルの幼なじみだつて言つてたけど、将来結婚するつて約束してるんだ？ 仲良さそうだつたもんね」

自分の失敗から話題を変えようと、何気なく口にした内容が、アルの機嫌を更に損ねてしまつたらしく、アルはカラを忌々しげに睨み付けた。

「あんた、どこをどう見てたら仲良く見えたのよつ。だいたいね、エイリナの言うことの九割は、あいつの頭の中で出来上がつた妄想、友達どころか顔見知りにもなりたくないわよ。 だけど、腹立たしいことに幼なじみなのは事実。あの世間ざれしたサンリルール演奏家の妄想ドラ息子とあたしは、十年来の付き合いなのよ」

アルは、腹立たしげに帽子で膝を打つと、再び荒々しく水を飲んだ。

「サ、サンリルールつて？」

「楽器よ。 神殿とかで奏される楽には欠かせない弦楽器。 コーリー家は由緒ある楽師の一族で エイリナの父様は、サンリルールの弾き手として、歴代でも随一といわれる高名な方なの。 ただ、その道では、とっても素晴らしい方なんだけど、美しいものと珍しいものに目がなくて、これまでにも、金に飽かしてくだらない物を色々買い漁つてたみたいだつた。 けど、よりによつて聖獣の密買なんて、まったく、父子共々何考えてんのか、本当に全く理解

できないわよっ

激しく怒っている割に、アルの顔は普段よりも蒼白く見えた。アルはカラから視線を外すと、壁に背をもたせかけ、建物の隙間から見える空を仰いだ。

カラも、これ以上アルを刺激しないように、黙つて空を見上げた。

「 あんた、北方にいたことあるの？」

アルは相変わらずの不機嫌な声で尋ねた。

「 北？ なんで？」

「 さつき、エイリナがあんたの発音が北方のものに似てるって言ってた。エイリナは耳だけ、はいいの。 あんな騒がしい雜踏の、溢れる音の中からあたしの声だけを拾い出せるくらいに、様々な音を正確に聞き分けることが出来るのよ」

アルはもたせかけていた背を伸ばし、探るようにカラの瞳を覗き込んだ。

かなり慣れてはきたものの、大きくて力強いアルの黒の瞳に真正面から見つめられると、カラはやはり緊張をしてしまう。

「 し、知らないよ。 だつて、オレ、名前も知らない町にいたことが結構あるから。 けど、多分ほとんどは、東か、南方の町や村、だつた と思う、けど……」

尻すぼみになるカラの答えに、明らかに納得をしていないアルの目が、更に探るようにカラを睨み付けた。その視線から逃れるよう、カラは通りから路地に入ってきた猫に目を移した。

猫は、自分の縄張りに闖入している一人の様子を、遠巻きに見張つてゐるようだつた。

「それよりさ、聖獣つてまだ、そんなにいるものなんだね。沙白狼つて、昔語りにも出てくる氷狼ウールスの仲間で、北の森の王者つて畏れられる、すっごく誇り高い大狼なんだよね？見てみたかったなあ、本物。でも連れ去られたつて言つてたから、そもそも無理か」

カラは腕を組むと黙り込み、考えに耽つた。

「ね、アルはどう思つ？ その奪われた沙白狼、金目当てかな？ それともガーランを狩つたと同じ、狩り人の仕業かな？ もし、そうなら、その狼達が奪われた現場に行つたら、何か手がかりとか残つてないかな？ 狼を奪うにはそれなりに乱闘があつたろうから、その時に、その中の誰かが何か落して 例えば、その一味の紋章が描かれたボタンとか、何か身分とかが分かりそうなもの。昔語りの中でもさ、そんなのから手掛かりを得る話があるよね？ それを見つけられたら、ガーランを探す手掛かりに、ならないかな？」

空想の世界に入りかけているカラを見て、アルは呆れ、思わず笑い出してしまつた。

「あんた えつと、カラ、といつといいわね。緊張が半減できるわ。カラの空想推理を聞いてたら、悩んでた自分が、なんか、馬鹿みたいに思えてきた。さつきまで迷つてたけど、お陰で

腹が決まつたわ」

笑つたアルの笑顔はいつものものだつたが、氣のせいではなく、

やはり顔色が悪い。

「あのせ、今日はもう、帰らない？　何の面てもなく歩き回ったつて、無理だよ」

「私は　ガーランを一刻も早く連れ戻したいの。　あんただつて、そう思つていたでしょ？　この四日、家にいても一向に埒が明かなくて、あんたも苛立つてたでしょ？　行動を起こさなきや、何にも解決できない、そう思つていたでしょ？　だから、宿を抜け出すことを提案したら、即答で決断したんでしょう、違つ？」

アルの言葉の勢いと、強い意志を感じさせん瞳に睨まれ、カラは返答に窮してしまった。

「そりや、そりだけど

」

ラスターは四日前の朝、部屋を出て以来戻つてきていない。　その間カラは、アルやイリスに頼まれて馬達の世話を手伝う以外、母屋から一歩も外へは出なかつた。　イリスにさり気なく脱走を阻まれていた所為もあるが、ラスターが帰つてきて、何か新たな情報が聞き出せるこに期待もしていた。

しかし、ラスターは帰らなかつた。

ガーランの事件に加え、ラスターまで帰らないことに、カラは更なる不安を覚えていた。

そんな不安を抱きながら、部屋にずっと閉じ籠つてゐることせ、気が滅入るだけだつた。

しかし言いつけに背き、旅籠を抜け出したことがラスターに知れたら、またあの冷たい青い目で見据えられ、場合によつては鋭い一発を、再び頬に受けたかも知れない。

どちらにしても、カラは憂鬱だつた。

「ガーランを助けたいの。何としても、助けたいの。あんただつてそうでしょう?」

「ガーランの居場所、アル もしかして、知つてるの?」

「心当たりがあるの。はつきり断言は出来ないけど 可能性がある。早く確かめなくちゃ、手遅れになるかもしねないの。だから

アルにしては珍しく、歯切れの悪い言い方だつた。その言葉に、切羽詰つた響きを感じ、カラはそれ以上、アルに何かを問うことが出来なかつた。

＊＊＊

天空には、太陽が輝いているにも関わらず、そこは薄暗く、時間の感覚がなかつた。

薄暗い室内に、薄暗い灯明が一つ、ゆらゆらと頼りなげな光を生み、壁に掛けられた剣や戦斧などに鈍い輝きを反射え、四方に曖昧な影を生み出していた。

「招待状。無事、あんたの元へ届いたようだな」

崩れかけた土壁に、軽くもたれ掛かり俯いている男は、全身煤色の衣に身を包み、その様は影よりも黒く沈み、陰鬱な室内の薄闇に開いた虚のようだつた。

部屋の中程まで進み入ったラスターは、無言のまま、書状の結び付けられた黄金の風切羽根を、男に向かい手刀のよう投げた。

男は右手で羽根を受け止めると、弄ぶよつて手の内で幾度か回転させ、落とした。

床へ落ちた羽根は、黄金の炎となつて燃え上がり、光を放ち、消滅した。

「 よもや、こんな見え透いた招きに応じるとは意外だったが、出向く手間が省け助かる。十五、いや、二十年は経つか。本当に変らぬな。 聖都テイルナの騎士 選ばれし 聖騎士 」

男はゆっくりと顔を上げると、ラスターをその視界に入れた。下げたままの左手には酒瓶が握られ、その中身はほとんど残つておらず、男の呼気はかなりの酒氣を帯びている。だが、その田も声も、決して醉人のものではなかつた。

「 変わる、とは、何を指して言つているのか。 キトナの騎士 レセル＝ホーン 」

レセルと呼ばれた男の黒の瞳が、ほんの一瞬光を宿し、ラスターの白い顔を射るよう見た。無表情なラスターの抑揚のない言葉に、レセルは自嘲の笑いを漏らした。

「 その名、久しい響きだ。 騎士……そんなものであつたことも、あつたな 」

レセルは残りの酒を一気に呷り、空になつた瓶を床に落とした。瓶は鈍い音をたてながら、部屋の端へゆっくりと転がつていった。

「 」の世に存在するものが変るは、不变の定め。ならば、永劫に変わらぬあんたは、」の世のものではない、と看做してよいわけだ

レセルは独り言のように、低く言葉を吐いた。その暗い黒の瞳は、ラスターを映してはいなかつた。土壁に更に深く背を預けると、レセルは再び俯き、何も言葉を発さず、影に溶けるように立ち続けた。

ラスターは、レセルの上に視線を定めていた。

ラスターより一回りは大きい、がつしりと引き締まつた体躯の、年齢は三十半ば程か。油氣のない伸びた黒髪に隠された眉間に、深い傷が刻まれている。

二十年程前、この男と会つた記憶が、ラスターにも確かにあつた。その頃のレセルは、まだ線の細い、どこか危なげな少年だつた。自分の中に秘める情熱を、真つ直ぐに映し出す力強い黒の瞳が、ラスターの印象に深く刻まれていた。

レーゲスターにおいて、正式に 騎士 を名乗れるのは、 方円の 騎士団 という、何れの都市国家にも属さない、騎士・剣士の組合ギルドに、 騎士 としての資質を認められ、更に、各 央都 の長、または大神殿の長である大神官など、公人とされる人々により 正騎士 として承認され、叙任の儀を執り行われた、ほんの一部の選ばれた者のみである。

正騎士となつた者は、技量・知識・人格共に最高の人物と見なされ、これらの騎士を抱えることは、名立たる王族であれ神殿であれ、容易く叶うことではなかつた。

大陸では、各央都を中心に、国家間で様々な条約が締結されており、その中には、民衆の居住地について定められた条文もある。

一般民衆は、旅などで他国を訪れる自由はあつたが、基本、居住

地は出生国に定められ、煩雑な手続きを踏まなければ、自由に変わることは許されなかつた。人口の偏在を防ぐために央都の長が取り決めた、レーゲスタ全土で施行されている法のためであるが、騎士、及びそれに準じる者に、その縛りはなかつた。

正騎士は全て、方円の騎士団に属することを義務付けられたが、方円の騎士団には定まった拠点地がないため、騎士の居住地は、一般民衆と異なり自由に選ぶことができ、また、居住の地を定めないことも許されていた。

何れかの王家や神殿などに請われ、主従を結ぶ場合でも、何れの主家に仕えるかは、騎士が自由に選ぶことができ、また、何時その主家の下を去るかも、騎士によつて決めることが出来た。

騎士が仕えるのは、己の信ずる正義であり、己が貫く信念であり、己の良心の声であるとされ、騎士の意思是、迎えよつとする主家の意向よりも重視された。

故に、騎士によつては、生涯何処の地にも属さず、諸国を歴遊し、自身の信ずる道に従い、戦などに身を投じ続ける孤高の者も少なくなかつた。

このように、様々な特権を与えられるが故に、正騎士の選定基準は大変厳しく、最終選定の場まで残ることができるのは、数年に一度、ごく僅かな人数しかいなかつた。

剣や槍など、武芸の腕を磨き上げることで、まず与えられるのが、剣士 という称号である。騎士 となることを望む剣士は、己の技量を、その住まつ国や都市の権力者に売り込み、腕を認められれば抱えられる。

一般に数年の奉公の後、仕える主家などの推薦があれば、騎士団の課す試験に臨み、及第すれば 准騎士 に認められる。

騎士を志す若者の中には、騎士見習として正騎士に師事し、師である正騎士から直接様々な知識や武芸を学び、短い期間で准騎士の

資格を得る幸運な者も、極稀にあつた。

准騎士となつた者は、更に剣の技を磨き、武だけに限らず、あらゆる知識と学問を会得しなければならない。准騎士の間に課せられる様々な試練を克服し、騎士団に認められた者だけが、騎士となるための資格を得る。

しかし、騎士団にその資質を認められても、最終的な騎士の叙任権は、聖都・東都・西都・南都・北都・沙都各都市の長、大神官、または正騎士の中でも特別の位にある聖騎士だけが有している。騎士団が認めたとしても、これらいずれかの公人五人以上が、その騎士候補を”適格”と認めなければ、騎士叙任の儀は執り行われず、公に騎士と名乗ることは許されない。

このように騎士団と公人に査定を分けることで、騎士の質を保つ目的があるのだといわれている。

剣士となり、准騎士を経て正騎士の称号を授与されるまで、どんなに優れた者でも七・八年の歳月を要した。二十年三十年の年月を費やす者もまた、珍しくはなかつた。

レセルは、剣士の称号を得てから、正騎士の叙任を受けるまで五年だつた。

ラスターは、正騎士の叙任権を持つ、数少ない聖騎士の一人である。故に、数々の候補者を見てきた。最終選定の場で、候補者の剣の相手を務めたことも幾度かあり、レセルはその一人だつた。

キトナ大神殿において、レセルの騎士叙任の儀は執り行われた。ラスターは証人の一人として、その場に居合わせた。

多くの正騎士の列席を得られることは、新しい騎士にとって大変な誉れであり、列席した正騎士の名により、新しく正騎士に名を連ねる者の実力を、公人は知ることが出来た。

レセルは叙任の儀の直後、キトナ大神殿に仕えることを選んだ。新しい騎士が、大神殿に請われることは、滅多にないことだつた。

この数十年、レセルほど順調に、短期間で騎士となつた者をラスターは知らない。

貪欲なまでの向上心が、印象に深く残つていた。筋がよい、といつだけではなく、内に秘めたものが彼を突き動かし、伸ばしていくのだと感じた。

その動機が如何なるものなのか、ラスターには知りようがなかつたが、騎士になるだけの資質を、レセルは、どの方面にも漏らすことなく供えていた。

だが、二十年の後。レセルは騎士の称号を捨て、闇に潜む狩り人として、ラスターの前に現れた。

「アラスター＝リージェス＝シン」

レセルは床に落としていた視線を、ゆっくりとラスターの顔に戻した。

「シン＝ヒラノール」

歪んだ暗い笑いが、その口に浮かんでいた。
壁にもたせかけていた背を伸ばし、レセルはラスターと対峙する
ように真っ直ぐと立つた。

「ヒラノール　　聖血の器　　ヒランの作りし、生き人形」

ラスターは変らぬ無表情だったが、その青い瞳には、灯明の光が照り返つていた。

「否定しないところ」とは、事実か

レセルの笑いは消えていた。それに代わり、瞳の奥底に激しい光が宿っていた。

「真に、そのようなものが存在しているとは、な。だが、あんたを見知った者ならば、納得できるというもの。時の頸木を逃れ、生死の理を知らぬ 不老不死の化物」

ラスターは目を伏せると、額に手をやり、前髪をゆっくりとかき上げた。一拍置いて伏せた瞳を開くと、真っ直ぐにレセルの目を見据えた。

「だから、何だ?」

無表情だったラスターの口の端に、微笑が浮かんでいた。冷淡で、挑発的な笑みだった。

「”時の頸木””生死の理”。確かに、私には何れも無縁の言葉」

ラスターは一旦言葉を切ると、レセルの眼前にまで歩み寄り、間近でその瞳を見据えた。

「私がエラノールであれば、それが何だと言つのだ? 時の頸木に捉われ嘆く者を、生死の理より逃れようと足搔く者を、その苦悩を恐怖を、私に同等に感じよと? それらの者達に共感し、同情し、与えれば、全ての者が同じに、心安らかになれる、と?」

レセルの目には、はつきりとした怒りが現れていた。握られた

拳には血管が浮かび上がり、その内からは血が滴り落ちていた。

「 聖なる御子 のため。 貴様の内の 聖血 、貰い受ける 」

レセルは、壁に掛け置かれていた戦斧に手を伸ばした。
ラスターの瞳が、冷たい光を宿し揺らめいた。

「 面白い 」

その白い顔には、再び微笑が浮かんでいた。

7：行動（後書き）

次回 8：入り口 に 続きます。

騎士

それはカラにとつて、夢の中で聞く美しい調べのような、手の届かない憧れを表した言葉だつた。

颯爽と馬を駆つて化物に挑む僕は、小山ほどもある、毒火を吐くあの大蜥蜴を、微塵も怖れることはない。僕のこの剣に、あの村人皆の運命がかかっているんだ。

大丈夫。僕は決して負けはしない。

僕はこの化物を倒し、必ず、生きてまた、あの村人達の前に立つんだ。そう約束したのだから。例え、この戦いで命を落とすことになつても、皆の穏やかな暮らしが守られるのならば、僕の命なんか、いくら賭けたつていい。人々の命を護ることは、騎士である僕の、成すべき当然の事なのだから

カラは空想の世界ではいつも、自分が騎士になつた姿を思い描いていた。

実戦の経験は当然ないので、具体的な戦の場面は上手く描写できなかつたが、騎士になつた自分の姿や、戦う悪領主、怪物等の描写は、言葉で上手く表現出来ずとも、絵で詳細な特徴を描き表せるほど、しっかりと頭の中に出来上がつていた。何事にも悉く不器用なカラであつたが、絵だけは器用に描きこなし、一見しただけのものでも、その対象を写実に描くことが出来た。

憧れるだけ、空想に思い描くだけの、騎士となつた自分。

だがそれは、カラの前にラスターという本物の騎士が現れ、手を差し伸べてもらつたことにより、ただの空想から実現が可能かもしない夢　目標へと変わつた。

オーレンの鍛冶屋で、ラスターは自身のことを、ティルナの精霊王殿に仕える獣騎士だと名乗つていた。

昔語りの中で、ティルナ という地名を聞いたことはあつた。確か、カラが好きな昔語りの英雄が、ティルナの王子の一人だつた。

課せられた、数々の苦難を乗り越えた末に王子は、この世のあらゆる理を制するという 秘宝 を護る、聖なる竜 ナジヤルーン＝カイナルのもとへと辿り着く。

王子はその智慧と勇氣で、聖竜 を従えさせ、この世で最も貴いとされる 秘宝 と、この世の何者よりも深き智慧を持つと云われた 聖竜 の、ふたつの至宝を得た。

帰国を果たした王子は、後にティルナの王となり、自國のみならず、レーゲスタ全土に、等しく繁栄をもたらした名君として、現在に至るまで語り継がれている

憧れの英雄が治めた、大陸最古の王国であるティルナが、現実にはどのような国なのか、カラは知る由もなかつた。辛うじて知つていることと言えば、エランがレーゲスタへ降り立つた最初の地であり、人々から 原初の地 と称される、とても神聖な国であるらしい、という程度のものだつた。

更に言えば、鍛冶屋の主人達の反応から見て、その国が、そして精霊王殿 というティルナにある神殿が、相当な権威を持つているらしいことは察せられた。

そんな特別な地の、特別な神殿に仕える騎士（しかも、騎士の中でも最高位の騎士）が、自分を弟子にしてくれると言つたのだ。

こんな心躍るような出来事は、カラは生まれて初めてだった。

それが、『名』と『影』を 間森の主 に奪われた後でなければ、
眞実、どんなに良かつたかと思つが、反面、あの怖ろしい事件を起
こさなければ、ラスターとの出会い自体が、なかつたことかもしれ
ない。

*

「ちよつと。 ぼーつとしてないで早く来なさいよつ」

アルフィナの鋭いひと声で、カラは長い眠りから突然目覚めたよ
うに、はつと顔を上げた。 空想の世界から戻ると、カラはいつの
間にか、巨大な建物近くの木陰に立つていた。

キソスの町中を抜けた後、二人は西郊外の小高い丘の上を目指し、
よつやく、その目的地に着いたのだった。

丘の上は町中より空に近いためか、空気は軽やかで、爽やかな風
がよく渡る。 斜面には陽の光が絶えず注ぎ、温められた地表には、
地中の水が天に還る際の揺らめきが見える。

視線を右に巡らせると、青みを帯びた黒屋根と白壁の、落ち着き
あるキソスの町並みが一望できた。

町の中央を、緩やかな曲線を描き流れるハル河の水面に陽光が反
射し、碎かれた宝石が流れているかのように、キラキラと美しく輝
いている。

思わぬ絶景に見惚れていると、リソン港の汽笛の音が風に運ばれ、
カラ達の立つ丘の上にまで届いた。 汽笛の音を運んだ風は、頭上
の木々の葉や足下に茂る草を、ゆつたりと鳴らしていく。 穏やか
な優しい葉擦れの音が、カラの耳に心地よかつた。

目を閉じ、暖かな光と風と音に包まれていると、心が穏やかにな
つてくる。

こんなのがかな場所で、日がな一日ほんやりできたりどんなに幸せだろうと、ふつと思つた。

だが、田を開けるとその思いは即座に打ち消される。

なだらかな丘の半分を占める、灰色の建物。

厳しい堀に囲まれたその建物は巨大で、ある種の威容を誇つている。

堀に取り付けられている鉄門は、幾重にも巻かれた鎖で固く閉ざされ、人の姿はない。陽光に照らされることで、壁面のおうどに生じる虚ろな影が際立つて見える。

明るく心地よい風景の中に、この建物が在るというだけで、丘全体が重苦しい、不気味で荒涼とした印象に変わってしまう。

外観が酷く荒れ果てているわけではない。

だが、この建物を見ているだけで、カラは訳もなく嫌な気分になつてくる。

「あ、えっと　　じー、　じー？」

カラは周囲をキヨロキヨロと見回した。

アルは堀により近い、陽射しの中に立つている。その足下には、濃い影が生まれていた。太陽は天頂にあつた。今カラが立っている木陰を出てしまふと、身を隠せる程の大きな陰は、建物の内に入らなければなさそうだった。

「キトナ大神殿の旧宝物庫。今は中身全部、大神殿の深殿に移つているから中は空っぽ。軽く百年は使われていない無人、の廃墟よ。陰を探す必要はないから安心して」

言いながらアルは、迷うことなく廃墟へ向かい歩いて行く。「ついて来て」と急かされるので、カラも仕方なく後に従うべく、木陰から足を踏み出した。

「……う」

天頂から降り注ぐ陽光の白さに、瞬間、目が眩み、視界がぐにゅりと歪んだ。

頭を振つて視界の歪みを正し、足下に視線を落とすと、消えかけた蜃氣楼のように、あるかないかのカラの淡い影が、心許なげに揺らめいていた。

カラは胸元のペンドントを握り深呼吸をすると、先を行くアルの後を小走りに追つた。

アルが”宝物庫”と言つた廃墟は、田舎の教会堂よりも遙かに大きく、ちょっとした神殿並みの規模があるように見えた。石煉瓦を積み上げ築かれた表面には漆喰が塗られており、とても堅牢そうな造りである。

使われなくなつて久しいというだけあり、高い塙の石煉瓦は部分的に大きく崩れ、周囲にその瓦礫が散乱している。近付いてよく見ると、宝物庫の天井部もまた、雷でも落ちたのか打ち壊されたよう崩れていった。

だが、それらの崩れた部分以外は、ほぼ完全な姿で残つているようだつた。

枯れかけた長い草が廃墟周辺を覆つていたが、定期的に何者かが通るのか、塙の南側面に向かい、細い獸道のような筋ができている。道にはなつているが、茂つた草と石煉瓦の残骸とに足を奪われ、カラはとても歩き辛かつたが、アルはその道を慣れた足取りでさつさと進んで行つた。崩れた塙を軽々と乗り越え敷地内に下り立つと、アルは宝物庫の大扉前まで行き、後方を振り返つた。

一足遅れて、カラは崩れた塙を乗り越え、恐る恐る敷地内へと下りて來た。

「あんた、本当にとろいわね。あれくらいの高さの壙くらい、もう少しささつと越えられないの？ いくらチビでもあんた、男でしょう？」

ようやく追い付いたカラを、アルは容赦ない言葉で迎えた。

「チビは余計だろつ。アルこそ女のクセに、こんなことばっかりしてるから、ちつとも女らしく見えないんじゃないの？」

「あたしは活動的なの。それに、あんたに女らしく見られなくて、あたしはちつとも構わないもの」

カラから大きく顔を背けると、アルは眼前に聳えるよつに立つ、巨大な黒鉄製の大扉に目を向けた。アルに従つように、カラも視線を大扉に向けた。扉表面には、幾種類かの獣の浮き彫りがあった。

巨大な熊や大角鹿、五本の尾を有する狼、天を飛ぶ竜や鳳等の姿が、精緻に描かれている。その中には、ガーランそつくりな有翼獣の姿もあつたことから、これらの獣が聖獣なのだと察しが付いた。

「聖獣。綺麗でしょ？ キトナ大神殿は、五大神殿の中でも特に、聖獣の保護に力を入れていたの。大神殿の内部には、もつとす「」聖獣達の彫像があるわ」

浮き彫りの聖獣に見惚れているカラに付き合つよつに、アルも聖獣達の姿に目を向けていた。

「すごいや。こんな彫刻、オレ初めて見た。本当に生きてるみたいだ」

聖獣は、神話や昔語りの中などで、神の使いとして語られることが多い。しかし、神殿などの柱や壁面の装飾の題材として扱われることは珍しくない。

遥か昔には、百種近い聖獣が存在していたらしいが、現在では数えるほどの種族しか存在しておらず、殆どが絶滅したか、混血の結果、聖獣というには程遠い獣になってしまったのだと、イリスはカラに教えてくれた。

ガーランのように完全な純血の聖獣は、現在では奇跡と言つてしま程に珍しい存在なのだと話してくれた。

「……………」

ラスターは、ガーランを探すとも取り返すとも言わず、カラに「無関係」だという、あまりな言葉だけを残して出て行つた。

ならば、自分でガーランの行方を探そう。

そう決意はしたものの、カラは探し出すための一歩を、なかなか踏み出せずにいた。

そこへ、アルの”誘い”がかかつた。

その誘いは、カラにとつては渡りに船であり、踏み出しきれなかつた一步に踏み出すきっかけを与えてくれた。

一步は踏み出した。だが、その先をどうするかが、全く決まっていなかつた。

「これ、開けて」

黒い鉄製の大扉に手をかけると、アルはカラに向かい言い放つた。見上げるばかりの巨大な扉は、屈強な男が五・六人がかりで開かねばならなそうな程、非常に重厚な両開きのものだった。

「これ……オレ一人で 開けるの？」

「他に誰がいるってのよ。 しとやかでか弱い女のあたしが、開けられる大きさに見えて？」

先刻の言葉とは相反する言葉をしらつと口にすると、アルはカラの背を押して大扉の正面を譲り、自分は離れた後方に移動した。押されるままに扉の前に立つたカラは、威容を持つてそそり立つ黒い鉄の扉を、改めて仰ぎ見た。 目に映る聖獣達の美しい姿に、溜め息が出そuddた。

聖獣の姿を追いながら視線を更に上に向けると、大扉上部に、訪れた者を迎えるように両手を広げた、非常に美しい顔貌をした人間の彫像があった。

見上げているうちに、カラの顔を覆っていたフードは背に落ち、透けた顔が露わになつた。 だが、そんなことに気を逸らされる事なく、カラは石像の優しく少し物悲しげな節目の顔に、惹き込まれる様に見入つていた。

「 つ

陽光を浴び、見上げ続けていたカラを、ふいに激しい眩暈が襲つた。

倒れはしなかつたが、ただ真つ直ぐ立つだけに、相当の気力を要した。

陽に照らされ立つてゐる事が、耐え難い苦痛に感じられた。

一日の内で一番強い昼の陽を、外套越しにではなく浴びることを、カラは長らくしたことがなかつた。 そのため、陽に中てられてしまつたのだと思つた。

額からは、冷たい汗が次々と滲み出でくる。

いくら久しぶりに、まともに陽の光を浴びたからって、こんな

眩暈

手で額の汗を拭い、何気なく視線をその手に向けると、何時にも増して淡く、頬りなげに透けていた。

オーレンを出た頃よりも肌の色は薄くなり、指先は光に溶けて、周囲との境がほとんど分からなくなっている。陽光に翳すとその薄れ様は更に顕著だつた。

言い知れぬ恐怖が、カラの身体を突き抜けた。

闇森の主の呪いが、強くなつていいのだろうか？ そんな不安が、カラの中に生まれた。陽に照らされているにも関わらず、身体の芯が冷え、手足が痺れしていく。

意識が次第に遠のいていく気がした。

明るい陽光の下にいることが辛い。
早く、影の、濃い闇の中に行きたい。

薄れ行く意識の、更に奥深い場所から、影や闇への思慕の念が、はつきりとした言葉となつて、次々と浮かんでくる。
まるで、今ここにいる”カラ”という自分がいなくななり、もう一人いる、新しい自分が、そのように望んでいるみたいだと、薄れ行く”カラ”は感じた。

「……嫌だ、違う。 オレは、そんな

カラは慌てて胸元のペンダントを掴み、いま一方の手を柄先のオスタイルに伸ばした。

そのふたつを握り締めること以外、カラは何も思い付かなかつた。ただ、必死に、祈るように、それらを握り締めた。

「 したの？ ねえつ、ビリしたのよ？」

鋭い声に、カラは意識を呼び戻された。

横を向くと、背後に離れて立っていたアルが、すぐ傍でカラの顔を覗き込んでいた。

妙に身体が揺れると思っていたら、アルがカラの腕を掴み揺さ振つていたようだった。

「ねえ、どうしたのよ、顔色は 分からないけど、あんた、気分悪そうよ。 えっと カラ？」

「 あ……アル？」

自分の名を呼ぶアルの少し緊張した声に、カラはほっと息を吐いた。

握り締めていた両掌から、暖かな力がカラの身体に流れ込んでくる気がした。消えかけていた手に目をやると、先程より幾分、肌の色を取り戻したような気がした。

「ねえ、どうしたのよ？」

「どうしたって えっと、何？」

「 何？”じゃないわよつ。 あんたさつきよろけてたし、なんか辛そうに身体を屈めるから、その だから、もしかして体調が悪いんなら、言つてよね」

尖った口調の割に、カラを覗き込むアルの黒の瞳は怒っている時の力強さはなく、カラを気遣つてることが感じられた。怒られたい訳ではないが、アルにあまり優しくされると、嬉しくはあった

が、何だか少し落ち着かない。

「え、あ だ、大丈夫だよ。 よろけたのは、石かなんかを踏んだんだ、きっと」

眩暈はすっかり去つていた。
変わらず注いでいる陽光にも、もう何も感じはしない。
手も、透けているには違いないが、周囲とは区別が付くだけの色を取り戻している。

「よかつたあ 」

ほつとして、カラは思わずへらへらと笑つてしまつた。 すると、
その笑いがアルの不機嫌を招いた。

「ふうん？ 何が”良かつた”のか知らないけど、あんた。 あた
しのお願いしたことは、ちゃんと聞いていたかしら？ ガーランを
探しに、あたしはこの扉の中に入りたいんだけど？」

「ガーラン、この中にいるの？？」

「それを確かめるために来たの。 一刻も早く確かめたいから、扉
を開けてつて、さつきからあんたに頼んでいるのだけど？」

アルの怒りをひしひしと感じ、カラは慌てて突き刺さるような視
線から目を逸らすと、再び大扉を見上げ、その表面に手を当てた。
陽が当たるためか、扉の表面は僅かに熱くなつていた。 が、し
ばらく触れていると、陽の熱の届かない、内側に残つていた鉄の冷
たさと堅い感触が、掌を通してじわりと全身に伝わつてくる。 そ
の冷たさが、カラの頭を更にはつきりとさせた。

「あ でも、これ。どう見ても一人で開けられる大きさじゃない、と 思うんだけど……」

扉の表面を撫ぜるように触れながら、カラはぼそぼそと頬りなげな声で言った。

アルは被つていた帽子のつばを軽く上げると、大きな力強い黒の瞳でカラを睨んだ。

「あんた、馬鹿力を手にしたんでしょう？ こんな時に使えなかつたら、そんな力持つてる意味ないじゃないつ」

いちいち頭にきていては限の無いアルの言葉が、今回だけは、カラをスッキリとさせた。

「あ、そうか。 そうだ、そうだよね」

身体を覆っていた外套を肩に絡げると、カラは両手を静かに扉に押し当て、目を閉じた。

大きく一息吐いて、気持ちを掌に集中させると、腹の底まで息を吸い込み、腕にじわじわと力を込めていった。

「ええーーいっ」

力を入れやすいように、腹の底から声を出した。足下の土が、扉を押そうと踏ん張るに合わせて微妙にへこんでいく。それでもカラは気にすることなく、一歩一歩と前に足を踏み出していった。重い、腹に響く轟音と共に、黒い鉄の扉は、予想外の速さで開いた。

開けてしまえば、なんてことのない重さだったが、カラは背中に

軽い汗をかいていた。

「ほんとに、本当だつたのね。あんたの得た力つて、呆然とした声が耳に入った。振り向くと、声の調子そのままの、呆然としてカラを見つめるアルの姿が目に入った。

「前に、ラスターが一度だけ、初めてまみえる相手との争いに臨む際のアドバイス、を言つてくれたつて言つてたじやない？確かに”相対した者達の、己に対する視覚的評価を適切に推測、利用して、相手に隙を生じさせることが出来れば、その特異な身体能力を活かし、勝利に繋げることも可能だらう”だつけ？

ラスターの言う通りよ。あんた、を見てその馬鹿力を想像することなんて、まず出来ないもの。正直、あんたみたいな小さい身体の子供が、大岩をも動かす程の力を得たなんて、半分は嘘だらうつて思つてた。でも、本当だつたのね。疑つて、悪かつたわ。

凄いわよ、その力。本当に、凄いわ！」

始めは少し、戸惑つた様子に見えたアルの顔は、言葉の最後には紅潮し、我が事のように嬉しく誇らし気な眼差しでカラを見ていた。そこには、カラも認める最高に綺麗な笑顔が添えられていた。言葉だけで聞けば、褒められているのかけなされているのか微妙ではあつたが、カラはこの力を初めて、はつきりと役に立てられたことが嬉しく、そして少し照れくさかった。

興奮が収まると、アルはしばらくその場にじつと立ち、開かれた扉の先を見ていた。

それから何かを決心したように帽子を被りなおすと、カラの腕を掴んだ。

「「」の先は、どうなつてゐるか、あたしも詳しきは知らないの。 だ
から……カラはここで待つてゐるか、帰つても いいわ」

視線を扉の先へと向けたまま、アルは硬い声でカラに言った。

「そ、そんなことしないよつ。 オレもガーランを探しに行く。
そのために抜け出してきたんだ。 ガーランを見つけるまで、オレ
もアルと一緒に行くに決まつてゐるじゃなかつ」

カラは憤然と答えた。 カラの答えが嬉しかつたのか、アルはカラの手を握ると、カラの金の瞳を見つめて綺麗な微笑を見せた。

扉の内に陽光は全く届かず、屋内の様子は暗い闇に沈んでよくは見えない。

アルは下げていた雑嚢から小さなカンテラを取り出ると、慣れた手つきで携帯用の火口から灯りをつけた。
手にした小さな灯りを前に突き出すと、アルは再びカラの手をぎゅつと握つた。

「はぐれないでよ。 はぐれて、時間が経つたら、あたし、あんたのこと忘れちゃうんだからね。 絶対、離れないで カラ」

真つ直ぐに、前だけを見ているアルの表情は分からなかつたが、カラの腕を掴むその手は硬く、小さく震えているようだつた。

「「」心配には及びませぬぞ 」

御座の奥の薄闇に向かい、現在の御座の主、キトナの大神官オリ

『オナは、ゆつたりと言葉を続けた。

「先頃、ティルナの聖騎士　エラノールが、このキソスに入ったとの報せが入りましてな。　その者の手足の一つを、我らが掌中に収めております。　首尾よく事運べば、エラノールを、手に入れられるやもしれませぬ」

『足りぬ　。　それだけ　で、は、まだ、足りぬ　足り、ぬ』

薄闇の中から漏れ出す声は、地の底から滲み出るかのように擦れ、虚ろな響きをしている。　声と声の間に、喘ぐような、浅い呼吸の音が混じる。　それは何か苦痛に耐えてこられるよりも、怒りに悶えてこられるように聞こえた。

『承知、しております。　あなた様が喰い残した者の行方も、手下の者共に捜させております。　が、しかし、同時に全てが揃うは流石に難しい。　まずは　現在のあなた様の瑕を癒すため、仮の血　を用い、補修するが宜しいかと、我は思っております。新しき器を整えたところで、あなた様がその状態では、為るものも為りませぬゆえ』

オリ＝オナは、長い白髪を梳いていた手を停めると、その中指に揺らめく黄金色の貴石に目を移し、薄く笑つた。

＊＊＊

『鈍つたな』

レセルの喉元に切先を突き付け、ラスターは無表情に、睨みあげ

る黒の瞳を見下ろした。

「 殺すがいい 」

薄暗い室内での闘いは、小一時間ほどで決着が付いた。

室内とはいえ、その空間は広く、天井は高かつた。床に置かれた雑多な物の配置を熟知している分、地の利はレセルにあった。

ラスターの動きが速く、懷に飛び込まれたら防ぎ様がないことは、二十年前、騎士の最終選考試合の際に実体験で知っていた。速さと剣捌きでは比にはならない。

しかし、ラスターは身体が細く身が軽い分、腕力では身体の大きなレセルに劣っている。

力任せで勝てる相手ではないことは承知していた。 だが、間合いを保ち、懷に入り込ませなければ、勝機はある。 更に言えば、ラスターの剣は細身で華奢だった。 刃の分厚い戦斧で刀身を撃てれば、その刃は必ず折れると踏んでいた。

だが、闘いはラスターの一方的なものだった。

レセルがラスターとの間合いを計りつつ、じりじりと位置を移していく間、ラスターはただ静かに立っているだけだった。

いつまでも続く睨み合いに痺れを切らし、レセルが仕掛けても、ラスターは決して剣を抜こうとはしなかった。

間断なく打ち下ろし払われるレセルの戦斧を、鼻先一寸でかわし後方へ下がる、という動きをラスターは繰り返した。

初めての場にも関わらず、ラスターは足下にどのような物が落ちているのかを熟知しているように、巧妙にそれらの障害物を避け、

微笑を浮かべた顔をレセルに向けたまま、円を描くように室内を移動していった。

何か謀があるかと思い、レセルが動きを止め、乱れかけた息を整えようとした時だった。

「もづ、いいだらう　」

ラスターの口から、その一言が漏れた。

何が起こったのか分からなかつた。

気が付いた時には、まず、左頬に鋭い痛みが走り、生暖かい血が頬を伝つた。その血を拭う間もなく、次には左肩、肘、膝を皮一枚で裂かれた。

ラスターの白い衣は、薄暗い室内でも目立つ。田の端に白い影が過ぎるのを捉え、レセルは戦斧を薙いだ。

斧を大きく振れば、それだけ隙が生じる。

その隙を突かれ、右肩と脇腹を続けざまに切られた。右肩は他の傷に比べ深かつた。

呻つていたアルコールと疲労のため、出血は眩暈を誘い、レセルの足を一瞬ふらつかせた。そこへ、ラスターは間髪を入れず、膝へ強烈な蹴りの一撃を見舞つた。

レセルは無様に尻と手を突き、顔を上げた時には、ラスターの剣が喉元に突き付けられていた。

右肩から脇腹に流れる血が、踏み荒らされた床に黒い染みを広げていた。

二人の争つた室内の古柱は折れ、あちらこちらの土壁には穴が開いていた。

戦斧は、手を伸ばせば届く場所に落ちている。それを手に、再

びこの眼前の白い化物に撃ちかかるか、レセルは何故か迷いを感じていた。迷う必要はないはずだった。

「殺す。現在のそなたに、その価値がある、と思つか？」

ラスターの声はとても平淡だった。

レセルの瞳が激しい憎悪に燃えた。言葉にはならぬ憤怒の光がラスターを射た。

「その三　変わらぬな」

ラスターは微かな笑みを浮かべると、手首を返しレセルの喉元から剣を引いた。

「そなたに、私の身を預けよう。連れて行くがいい。そう、命じられているはずだ」

ラスターは帯ごと剣を外すと、レセルの前に静かに置いた。レセルは相手の真意が分からなかつた。

完全な優位に立ち、すぐにでも自分の命を奪える状況にありながら、それを捨て、何故自ら虜になるというのか？

「何のため　その身を預ける？」

「目的のため」

レセルは置かれた剣帯を手に取ると、ゆらりと立ち上がった。

先程まで睨み上げていたラスターの顔は、見下ろす形となつた。

そこにある、どこまでも白い秀麗な横顔は、レセルの記憶の奥深くにある顔を呼び覚ました。

決して褪せることのない、だが、一度と見ることの叶わぬ。頭を振り、脳裏に映りかけたその顔をレセルは振り払った。

「目的　あの聖獣を取り戻すことか？　あれが狩られた所以は、あんたも察しているのであるつ。　ならば既に必要を終え、生きてはおらぬと、そうは思わんのか」

「ガーランは生きている。　それだけのことならば、ここへ、来る必要などはない」

キソスの町に夕刻を告げるラッパの音が、遙か遠く、夕靄に滲むよつに響いていた。

8：入り口（後書き）

次回 9：闇中を行くに続きます。

「 暗いんだ」

外から見た時、建物の上部が崩れていたので、内部にもそれなりの光が差し込んでいるのかと思っていたが、内部は月のない夜のように真っ暗だつた。

大扉から十数歩も進むと、扉から差し込む光すらも届かない、じんと静まり返つた深い闇に包まれた。

小さな窓ひとつない、四方を漆喰の壁で囲まれた、奥へと深い、がらんとした空間。

陽光の暖かさに慣れていた身体に、このただ広いばかりの空間は、寒々しく感じられた。

旧宝物庫は、地上一階地下一階の三層に別れており、崩れたのは最上階の一角のみで、階下は堅牢な石壁に護られた闇を保つているのだと、アルは口早に説明をしてくれた。

天井は高く、左右は大型の乗り合いの馬車が行き違える程、ゆつたりとした幅がある。

廊下の両脇には、十数歩おきに、人と馬の彫像が交互に置かれていた。

人の彫像は、地まで伸びた長い髪や浮世離れした美しい顔立ちから、エランであろうと思われた。エラン像と並ぶように置かれている馬の像は、とても精悍で躍動感ある姿をしていた。中には、背に翼を生やしている馬の像もあった。

「すうじいなあ。まるでエアルースみたいだ。こんなに綺麗な像なのに、なんでここに置かれっぱなしなんだろ。他の宝物が多すぎて、引越し先に入らなかつたのかな？」

左右の壁面には、これは木製であろう扉が等間隔に延々と並んでいる。旧宝物庫というからには、それぞの扉の先に、宝物が納められていた部屋でもあつたのだろう。

アルに手を引かれたまま、カラは周囲をきょろきょろと見回しながら歩いていた。

アルは小さなカントラで進む先を照らしながら、慎重に、しかし歩む速度を落すことなく、勢いよく歩んでいく。外にいた時と変わらぬよつに振舞つてゐるが、この闇中を進み行くことに、少なからず緊張していることが、握られている手から伝わつてきた。

恐らく、灯りの照らす僅かな範囲しか、アルには見えていないのだろう。

一方カラは、この暗闇に内心ホッとしていた。

闇を見透す瞳を持つカラは、暗い闇中でいることが、元々不安でも不快でもなかつた。

むしろ最近は、闇中に在ることに、『安らぎ』に似た心地よさを感じることも少なくはない。

濃い影の中、暗い闇の中では、姿が薄れていることも、『影』がないことも気にする必要はない。暗ければ暗いほど、それらのことに気を置く必要はなくなる。

陽の下を、堂々と誰の目を憚ることなく歩きたい、という願いを持つ自分がいる一方で、『ぐく普通の人々が怖れる、一條の光も見出せない、真の暗闇に在ること』『安堵を覚える自分がいることを、カラは確かに感じていた。

でもさつきみたいに、陽の光を嫌だと、感じることなんて、なかつたのに

宝物庫の外で、陽の光に感じた異質な感覚。

これまで感じたことのなかつた不快感に、カラは戸惑いを感じ、それが胸の奥底で、妙にもやもやとわだかまつっていた。

陽光を怖れ、忌避する者 それは、昔語りでは決まって闇に潜み蠢く存在。平たく言えば、魔物か夜盗のような、人々に嫌悪される存在でしかない。

「 やだなあ……」

「あんた、さつきから何一人でぶつぶつ言つてるのか知らないけど、もう少し早く歩けないの？ 早くしないと、ラスターが帰る前にガーランを見つけて帰ること出来ないわよ」

考え事に気を取られ、歩みが遅くなりがちなカラを、アルは握る手に更に力を入れて引っ張つた。

引っ張られたことで、一瞬バランスを崩したカラは、アルの口から出た「ラスター」の名に、また別の憂鬱な現実を思い出した。

「あのや もしかしてさ、ここでラスターとはち合わせる、なんてこと、ないよ、ね……？」

カラは無意識に左頬を押された。

物腰穏やかな外見の印象とは違い、ラスターは意外とすぐに手が動く。

カラはこれまでに数度、ラスターに頬を打たれたことがあった。ラスターの身のこなしは速くて鋭い。恐らく、力の加減はかな

りしてくれているのだろうが、打たれた後は、刃物で切られたかのように、熱く鋭い痛みが残る。受けずに済むなら、一度と受けたくないものだつた。

「さあ？ でも何で？」

鋭く短いアルの問いかけに、まさかラスターに叩かれるのが怖いから、などとは言えず、カラはさり気なく会話の方向を変えていった。

「ううん。 ただ、その、ラスター、どこに行つたんだろうって思つてさ。 まさか、実は何処かで怪我をしていて動けない なんてこと、ないよね？」

「ラスターはね、レーゲスタで一・一の腕を持つと讃えられる剣の達人、騎士中の騎士なのよ。 そう簡単に傷を負わされるわけないでしょう」

ラスターを見くびるような発言をしたこと、アルの口調は明らかに厳しくなつた。

「でも、ラスターは獣騎士なんだよね。 人間一人で 騎士 やつてる人と、聖獣と一緒に 獣騎士 つて、同じに考えていいの？」

「獣騎士も騎士も、同じよ。 ただ、聖獣が傍らにいて、その力を主人たる 騎士 に貸すつてだけで、騎士としての能力は、騎士も獣騎士も同じ。 方円の騎士団 に認められて、正式に叙任されなければ騎士にはなれないのよ。 あんた、イリスに話聞いてなかつたつけ？」

ピリピリとしたアルの言葉に、カラは首をすくめた。救いは、アルが振り返らず、歩きながら答えてくれたことだった。お陰で、あの黒の瞳に睨まれずに済んでいた。

「そりいえば、聞いた……かな？」

獣騎士　といふ騎士が存在することを、カラはラスターと会つまで知らなかつた。

イリスに聞いた話では、獣騎士　は　騎士　と公に認められた者の中でも、ごく少数の存在なのだという。

聖獸は、　獣の器を持った精靈　ともいわれ、火水風地などの精靈に近い存在で、何かしら、自然と呼応する力を有していることが多いという。イリスの話では、ガーランは火と風の力を宿す聖獸なのだそうだ。

獣騎士となる者は、精靈の言葉を解し、その力を引き出し統べる能力をも要求される。

それは　精靈使い　と称される者達と同じく、単純に騎士としての精進だけでは得られない、生まれながらに具え持つた、偶然の能力に由る処が大きい。

それ故、聖獸を従わせる獣騎士は、騎士でありながら、在野の神官と称される　精靈使い　に近い存在なのだともいわれている。

精靈使い　は、神に近い存在である精靈と言葉を交わし、精靈の力を己の力として行使することの出来る術者であり、多くは、神殿や教会のない小さな村や町に在り、土地の人々の求めに応じ、その祈りの対象である精靈と、人間達との仲立ちを勤めている。

その中でも特に、火の精靈と交感する者を　火師　、水を　水の守　、風は　風使い　、地の精靈と交感する者を　地の長　と称した。

精靈は、自分の認めた人間としか言葉は交わさず、その力を貸し『える』ことはない。

運良く精靈に遭遇し、人間が呼びかけ、精靈が口を開いたとしても、精靈が言葉を“聞かせる”意思がなければ、人間がいくら耳を傾けたところで、その言葉を理解することは出来ないと言わされている。

「そういえば、ラスターはガーランの鳴き声を聞いて、色々なことを判断してたみたいだけど……ひょっとして、ガーランの鳴き声って、ラスターにはちゃんとした言葉に、聞こえてるのかな？」

「なに今更なこと言つてるのよ、あたりまえじゃない。ガーランとラスターはお互いを選んで一緒にいるのよ。獣騎士と聖獣は対の存在なんだから、たとえ言葉がなくたって、互いのことは分かるの」

声を抑えつつ、アルはイライラと答えた。

建物内部の冷たく動かない空気が、黒い闇とひとつとなり、そこに侵入した者を拒むが如く、じわりと圧力をかけてくる。

その息の詰まるような重さを、アルは全身で感じていた。先の見えない闇の怖ろしさは、頭で想像していた以上に大きく、そう簡単に慣れられるものではなかつた。

「へえ、そりなんだ。オレにはガーランの声、ただの獣の声にしか聞こえないのに。ガーランの言葉つて、オレ達と同じ言葉なんか？ それとも他の国の言葉みたいに、ぜんぜん違うのかな？ ね、アルはどんなんだと思つ？」

自分の緊張と対照的な、暢気で間の抜けたカラの質問に、アルは苛立ちを感じ、それまで握っていた手を乱暴に振り払つと、立ち止

まつてカラを見返った。

「いい加減にして。よくそつ暢氣にペラペラ喋つていられるわねつ。知らないわよつ、あたしにだつてガーランの声は」

カラを睨みつけたアルの顔から、みるみると怒りが消え、驚きとも怖れともつかない表情が、それに代わり浮かんだ。

「？ アル、どうかした？」

「 瞳……光つてゐる」

アルの言葉で、表情で、カラは自分の瞳のことを思い出した。魔物と罵られ、化物と打ち据えられる原因となる、金色の瞳。暗がりで、獣のよう輝き光る、闇をも見通す眼。

「あ、あの、これは」

カラは、アルの目を避けるように俯き、視線を床に落とした。旅に出てからは、透けた身体や《影》のことばかりに気を取られ、瞳のことなどすっかり、とまではいかないにしろ、忘れていた。

瞳は変わつてはいない。変らない。

カラは、アルの顔に視線を戻すことができず、目に付いた落ち葉や鳥の羽を拾うふりをして屈みこみ、視線をかわそうとした。

「僕の、瞳は」

「 オステイルの瞳 月の光を宿し、闇を照らす 聖なる眼」

凛とした声が、カラの頭上に降つてきた。

「 オステイルの瞳 ？」

カラは上目遣いにアルを見た。 そういえば、アルと初めて会つた晚にも、アルは、カラの顔を覗いて同じよつなことを言つていた。

「 そうよ。 あんたの瞳はエランと同じ、 オステイルの瞳 と言われる、 とても稀少な瞳。 あんたの短剣の柄にある貴石オステイルと同じ、 とても強い破魔の力を持ち、 見得ぬものを見通す眼、 だといわれているわ。 聞いたことなかつた？」

カラはただこぐりと頷いた。

「 あたしもね、 その瞳を持つ人に会つたのは、 あんが初めて。 オステイルの瞳 については、 イリスから聞いて知つていたけど、 本当に、 こんな綺麗な金色をしているなんて思わなかつたし、 何より、 こんなに光り輝くなんて、 正直言つて、 驚いたわ。 見えるんでしよう。 あんた。 こんな灯りがなくても、 この真つ暗な室内の何もかも。 陽の下で見るように、 全てが、 はつきりと、 見えるんでしょう？」

アルの声は、 怒つてゐるでも怖れてゐるでもなく、 静かで、 畏まつた響きをしていた。

カラはどう答えてよいか分からずに、 蹲り俯いたまま、 再び小さく頷いた。

「 そう なんだ」

小さく息を呑む音がカラの直ぐ頭の上で聞こえた。

暗闇からすべての音が消え、カラの身体を押し潰すかのような沈黙が、束の間、その場を覆つた。

「 で、あんた。 まさかとは思つけど、その瞳のこと、恥じてるんじゃない でしうね?」

いつもの乱暴なアルの声に戻つていた。

その勢いにつられ、カラはアルの顔を見上げた。 アルは帽子を後ろ前に被り、腰に手を当て、カラの顔を覗き込んでいた。 小さなカンテラは、腹の前に器用に結び付けられている。

「 だつて……この瞳、化物の目だつて思つてるんだろ。 気味……悪いんだろ?」

ぼそぼそと、カラははつきりしない口調で答えた。 アルは大きく息を吸い込むと、カラの耳を掴み、無理矢理に立ち上がらせた。

「 馬つ鹿じゃないの、あんたつ。 今までのあたしの話、ちゃんと聞いてた? その瞳は、誰もが望んで得られるものじゃない、エランと同じ瞳。 聖眼 と讃えられるほど貴重な瞳なのよ! 生まれたばかりの人間達が闇に迷わぬように、エランが人間に贈つた宝の瞳とも言わてるんだから。 昔はね、導く者 にのみ与えられる神の瞳として、信仰の対象になつたくらい貴いものだつたのよ。 今では、その瞳を受け継ぐ人間はほとんどいないから、そういつた信仰は廃れたみたいだけど 」

「 でもつ

」

アルの言葉を遮るように、カラは突然大きな声を出した。

「でも、この目が獣と同じだって、化物の目だって……何処に行つても、そういうふうにしか……言わなかつた」

かつて、人々から受けた仕打ちが頭の中に甦り、腹の底がぐじぐじと気持ちが悪かつた。

カラは俯き、堪えるように拳を握り締めた。握っている拳が僅かに震えているのを見て、アルは、しばらく間を置き、声を和らげて言葉を続けた。

「確かに、エランの瞳が金の光を宿していたことは、あまり広くは伝わってないらしいから、オスティルの瞳の事を知らない人も多いんだろうけど、知っている人は知つてゐるわ。その瞳は化物の目なんかじゃないってね。あたしもその一人よ

優しくなつたアルの声に、カラはおずおずと視線を上げた。

「アルは、この目、気持ち悪くない？ 僕のこと怖いって、思わないの？」

すがるような気持ちで、カラはアルの顔を見た。アルもカラの顔を真っ直ぐに見ていた。アルの瞳に映る自分の顔の、金の瞳だけが、より強く揺らめいて見えた。

アルは大きく息を吐き出すと、カンテラを手に持ち直し、帽子を元の向きに被り直した。

「その瞳を気味が悪いなんて思う奴ら、放つておけばいいのよ。だいたい、瞳の色が何色だつて、あんたを知る上ではあんまり関係ないんじゃないの？ それに何より、お父さんお母さんから貰つた身体を、周りがとやかく言うから恥じるなんて、卑屈極まりないわ。

それこそ 恥じるべきことよ。 誇りなさいよね、その瞳。
それに綺麗じゃない。 満月みたいな優しい金色。 あたし 好
きよ、あなたの瞳」

ふいと背を向けると、アルはすたすたと歩き始めた。

カラは、アルの言葉が耳に馴染まず、ぼんやりと突っ立つたまま
その背を見送っていた。

その動かない気配を感じたのか、アルは立ち止まり、振り返りざ
まにカラを睨み付けた。

「はぐれたら困るつて、最初に言つたでしょつー。 せつぞと歩い、
て」

カラの金の瞳から、ボロボロと大粒の涙が落ちていた。 しゃく
り上げまではしていなかつたが、鼻を啜る音が、一定の間を置いて
聞こえてくる。

「な、何？ なんで、泣いてるの。 ねえ、どうしたのよ、ね、え
つと カ、カラ？」

アルは困惑したような、おずおずとした調子で問いかけると、カラ
を気遣つようつに近付き、涙の止まらぬ顔を覗き込んだ。

「だつて、この田、好きだつて 言われたこと、な、なかつたか
ら」

言葉を口にして、カラは余計に激しく涙を流しだした。 アルは
どうしてよいのか分からずに、おろおろしたが、雑叢の中から綺
麗な布を取り出ると、カラの顔を優しく拭いてやつた。

「そんなんに、嫌だつたんだ。 その瞳」

アルの声は、今までに聞いたことのない優しさがあつた。

「だつて、この田のせいで、みんなに、嫌われて、殴られたんだ。 化物だつて、追つ払われて、蹴られたんだ。 綺麗だつて、言つてくれた子もいたけど、それだつて、この目が、闇でも見えるとか、本当のこと、知らなかつたから。 こんな透けた身体になつたら、とうとう僕のこと怖がつて、田も畠わせてくれなかつた……」

「瞳が光ろうが暗闇が見えようが、姿がちょっとくらい薄れて透けてしまおうが、そんなこと程度で態度が変わるなんて、そいつはその程度の度量、小心者で上つ面だけいい奴だつたつてことよ。 そんな奴、むしろ縁が切れて良かつたのよ。 今はいいじゃない。 ラスター や イリス がいるし、何てつたつてあたし、がいるんだから文句ないでしょ？」

「 うん。 でも、フォーリンも、身体がこんなになるまでは本当に親切だつたんだ。 すごく優しい声で、僕の名を呼んでくれてたし、時々、お菓子もくれたし」

優しかつたアルの手が、ぴたりと動きを止めた。

「 フォーリン？ それ、女の子の名前、よね？」

カラは少し落ち着きを取り戻し、アルの顔を見た。 優しかつた声が、何故か刺々しい響きに変わつてゐる。

「うん、フォーリンは女の子だよ？」

「ふうん？」 で、そのオーレンとあんたって、ビリーヴ関係？

「ビリーヴ関係って、オーレンにいた時に雇われてた鍛冶屋の娘さん」

「ふうん、そう？ そこで一緒に暮らしてたんだ。 で、その子、可愛かった？」

「うん。 アルと同じで編んだ長い髪をしていて、深い青色の目をした、オーレンでは一番可愛い子だったんだ」

鼻を啜りながら、カラは素直に答えた。

アルは涙を拭つてやつていた布を、カラの顔にしきゅっと押し付けると、ぐるりと背を向けすたすたと歩き出した。

「のののひしないでわつたと付いてきなわこよね。 あんたに付き合ついたら、日が暮れちゃうわよ」

何がアルの気に触つたのか、カラは全く分からなかつた。 それでも、このままぼやぼやしていたら、キツイ言葉の三つ四つが飛んでくることは、考えるまでもなく分かつた。

「ま、待つてよ。 置いてかないでよ」

意味もなく拾つた品々をズボンのポケットに突つ込むと、カラは慌ててアルの背中を追つた。

昼を過ぎても、アルフィナは厨房に現れず、厩に行つてもカラの姿はなかつた。

「あらまあ。 やつぱりアラスターの言つた通りになつたわね。 困つた子達だ」と

イリスミルトは、おつとりと頬に手をあてると、慌てるでもなく「どうしましようか」と、独り言を口にした。

イリスは目の不自由を感じさせぬ足取りで、厩の一一番奥にいる黒馬の前まで進んだ。

「エアルース。 あなた、ご主人の香りを纏つた少年のこと、覚えているかしら？」

黒馬は答えるように鼻息を一回吐いた。

「あの子とアルフィナがいなくなつてしまつたの。 ガーランを探しに行つたのでしようけれど、きっと逃げ戻らなくてはいけなくなるわ。 その時、あの小さな一人ではすぐに追いつかれてしまうと思つの。」

イリスは流れるような、柔らかな手付きでエアルースの首筋を撫でると、ふつと小さなため息を吐き、困り笑いの表情でエアルースに再び語り始めた。

「本当はあなた自身、危険な立場なのだけれど、それを承知でお願いをしたいの。あの子達を迎えに、行つてくれるかしら？」

エアルースは左前足で数回、土をかいだ。

イリスは穏やかに微笑むと、エアルースの前に掛けられた太い柵

の丸太を外した。

エアルースはゆつくりと囲いから出ると、イリスに額を摺り寄せ挨拶をした。

「エアルースだけを行かせても、子供達が腰を抜かしていたら、乗ることすらできないかもしませんよ?」

イリスの後ろに、薄汚れた暗緑色の外套を着た男が、眠そうな顔をして立っていた。

「私も行きますよ、イリス」

欠伸を噛み殺しながら、男は寝ぼけた笑顔を見せた。

今朝早くに旅籠に着いたばかりの男の肌は浅黒く、無造作に束ねた黒髪は埃を被り、衣服は全体に白茶けた、かなり疲れきった見た目をしていた。

「着いたばかりで、疲れているでしょう? あなたはお客様なのだから、ゆっくりなさつていいのよ、ナハ」

イリスは柔らかな微笑を、ナハと呼びかけた男に向けた。ナハは苦笑しながら頭を搔いた。その胸のポケットでは、小さな白ネズミが鼻をぴくぴくとさせながら、二人の会話に耳を傾けていた。

「客、といわれると、辛いですね。いつもツケで泊まらせて頂いている身ですから。だから、たまには何か一つくらい仕事をしないくては、私も身の置き場がない。そもそも今回は、そのためにここへ來たのですしね」

人懐こい笑顔を見せるナハの顔を、イリスは目を細め見つめた。

「けれどあなた、こういったこと、苦手でしょうか？」

ナハは照れたように短く笑うと、姿勢を正し、イリスに真っ直ぐと向き合つた。

「仔細は先日アラスター殿に聞いていますし、自分に出来る範囲のことしか、私はしませんし、やれもしません。あとはまあ、やつてみないと、でしょう？」

イリスは口元を押さえ、上品な笑い声を上げた。ナハもつられて苦笑をした。

「そう？ では、ここはひとつ、お願ひしても宜しいかしら？ 力ナルにも手伝つてもらえると、速いかもしないわね」

小ネズミはポケットから抜け出すと、ナハの肩に座り、イリスに答えるように短く鳴いた。ナハもにこやかに頷いた。

「エアルース。君は、私を乗せてくれるかい？ あと、このカナルもね」

首を優しく撫でながらナハが問うと、エアルースは額をナハの頬に擦り付けた。

「いい子だね。同じ主人に寄り添う仲間でも、ガーランとは大違
いだ」

イリスは一瞬俯き、深く息を吐くと、顔を挙げ、毅然とした表情でナハを見つめた。

「地の長・ナハ＝ラスクス。子供達にカラに、そしてアルフィナに、御助力を願います。少し痛い目に遭つた方が、あの子達には経験となりますが、彼奴等の手にだけは落ちぬよう、お力添えを」

「『期待に副えるよう、最善を尽くしますよ。あ、そうだ。』よければ、帰つてきたら湯を使わせて下さい。半月以上野宿したものですから、『臭う』と、カナルに言われてしまつたもので」

照れくさそうに頭を搔き笑うナハの肩で、白ネズミのカナルが、チイツ、チイツと、不満を訴えるように数回鳴いた。

イリスは微笑みながら、ナハの手を取り、両の手で包んだ。

「あなたの好きな鳥を煮込んだシチューと、甘パンにワインも、用意しておきますよ。カナルの大好きな白チーズのムースも、ね」

満面の笑みを浮べると、ナハはエアルースに鞍を置き、手綱を取ると厩の外へ向かつた。

陽は、天頂から西に傾いていた。

ナハは、見た目からは想像できない軽い身のこなしで黒馬に跨ると、馬首を廻らせ、ゆつたりと中庭を抜け門へと向かわせた。高い壁に囲まれた中庭には、陽の射す場所は僅かにしか残つていなかつたが、表の通りには、陽がまだたつぱりと射している。イリスは、光の中に消えていくナハと黒馬の影を見送つた。黒馬は通りへ出ると徐々に速度を上げ、駆け出したようだつた。

「さてと。では、わたくしも支度をしておきましょうか」

額にかかつた銀の髪を耳に掛けやりながら、イリスはゆつたりと

した足取りで母屋に向かつた。

「 あつた。 きつとこれだわ」

カラとアルは狭く長い階段を下り、地下の空間に立つていた。先程までの階上の空気も冷えていたが、階下の空気は更に冷たく、服に覆われていらない指先などには、軽い痛みを感じるほどだつた。

「この鉄の扉。 この扉の先は、ガーランが閉じ込められているかもしれない部屋に、つながつてゐるはずなの。だからこれを、静かに、開けて欲しいの」

アルの表情はそれまで以上に硬く、強張つてゐるよう見えた。何かに緊張してゐる、そう、カラには感じられた。
目の前にある黒い扉はさして大きくはなかつたが、重厚で、威圧的な厳しい印象を、その前に立つ者に与えた。

本来は黒の無地だつた扉の表面には、後から彫られたものである、文字のような文様がハつ、刻み付けるように彫られてゐる。傷のような彫り跡に、カンテラの小さな灯りが当たつて影を生み、その文様をよりはつきりと目立たせていた。

アルは「ちよつと待つて」とカラを留めると、雑囊から硬く練られた墨棒を取り出し、ハつの文様にそれぞれ一本の線を描き足し、更に一つの文様を、それらの文様の上部に描いた。

「 さ、いいわ。 やつて 」

アルの大きな黒の瞳が、カラを真つ直ぐに見つめた。

9・闇中を行く（後書き）

次回、最終話 10・遭遇 に続きます。

10・遭遇

室内は、モノと異臭に溢れていた。

モノがなければ決して狭くはない部屋の四方には、幾つもの棚が並び置かれ、棚の上には、古びた大量の書籍の他、硝子瓶や湿気を寄せ付けない金物の缶箱が、並べられるだけ並べ置かれ、入りきれない物は棚から溢れ、床の上にも重ね置かれていた。

瓶は液体で満たされ、その中に浸けられた様々な器官が、沈むことも出来ず、瓶の中頃に、頬りなげに浮いている。

多くは、眼球であつたり耳であつたり、臓物の一部であつたりしたが、中には、生まれることのなかつた胎児のようなものもあった。

薄暗い続き部屋には、多種多様な鳥や獸が、床を埋め尽くすように置かれている。

どれも舌をだらりと口から出し、動く気配は全くなかつた。異臭は、明らかにこの部屋から生じていた。

横たわる獸に囲まれるように、一人の瘦せぎすの男が、部屋の中央に座り込んでいる。

男は口の中で、呪文のような言葉を唱えながら、指先に赤いドロリとした液体をつけ、新しく仕入れたモノに、印を描いていた。

唱える呪文は歌のようで、男はとても幸福そうに、うつとりとした顔をしている。

「 おや。客が、お越しのようだな

男は、呪文を唱えるのを一旦止めると、嬉しそうに笑い、印付けの作業の手を早めた。

「では、まず、お招きの準備をしなくては、だな。ふふ。樂しみだね。客人が来るなど、ないと思っていたからね。どう？君達も、一緒にお出迎えに行くかい？」

男の問いかけに応えるように、幾対もの赤い光が、薄暗い室内のあちらこちらで、鈍い輝きを放ち始めた。

＊＊＊

開けると言われた鉄の扉は、外で開けた最初のものに比べると、厚みは大差なさそうだがサイズは小さく、今の自分ならば、片手でも開けられそうだと思つた。

「なんだ、こんなの 」

カラは気軽に請け負い、じつに金輪の引き手に手をかけ、引いた。予想通り、鉄の扉は簡単に開いた。

ただし、想像だにしない、凄まじい音を伴つてだった。グウォン、と重く鈍い音が岩壁の内に幾重にも響き、本来の音の何倍にも大きく、長く響いた。

「な、何やつてんのよつ。 言つたでしょ、”静かに開けて”つてつ。あんた、本当に人の言つこと聞いてんのつ？」

岩壁に反響する音に負けぬ大声で、アルは耳を塞ぎながらカラを罵つた。そのどちらの音にも負けぬ声で、カラも反論を試みた。

「こんな音がするなんて、アル注意しなかつたじゃないかつ。 だいたい、誰もいないんだろ、こゝ。 それなら別にそんなに気にすること」

「黙つてつ！」

突然、アルはカラの言葉を遮り、その口を押さえた。 カンテラの火を吹き消し、カラを自分の背後に回すと、アルは構えるように、わっと周囲に視線を廻らせた。

ひゅつと、風を切る鋭い音を耳にした途端、硬い金属を擊つ音が闇中に上がつた。

アルが短い叫びを上げると同時に、アルの手のカンテラが弾け飛び、落ち、ガラスが割れる音がした。

「あんまり大声で喚かれたらあ、煩いんだよねえ。 こゝ、響くだろお？ おまけに、お前達ガキの声は、耳障りなんだなあ。 僕の耳に、キンキン響いてよお！」

耳障りな声が、闇のどこからともなく、滲み出すように聞こえてきた。 男の声とも、年老いた低い女の声とも聞こえる、気味の悪い、ねつとりとした喋り方だった。

「だ、誰つ！」

アルは声を張り上げながら、カラの腕をよりきつく握つた。 暗闇で利かぬ目を眇め、カラを護るように気丈に立つてゐるが、カラを掴む手からは、小さな震えが伝わってきた。

胃がぎゅつと縮むような痛みを、カラは感じた。 アルは、ここ

は無人だといつていいたのに、この声の主はいる。最初からここにいたのか、カラ達の後をつけて来たのか分からなかつた。声が複雑に反響し、どこに声の主が居るのか分かり難くしている。それでもカラは、金の瞳をしっかりと開き、見渡せる限り、具に、目に映るものを見た。

「いたつ。あれだ」

カラは、天井に蜥蜴のようにへばりつき、自分達を見下ろしてい人の姿を見つけた。

その顔は、人間の形をしているのに、中身は本当に蜥蜴か蛇のようだつた。

顔の左右に離れた、針金のよつた瞳孔の赤い眼、縦に穴が開いただけの鼻、耳まで裂けた口からは、時々赤い二股の舌が飛び出る。

薄い、髪の毛らしきものが申し訳程度、岩に生える苔のように頭の上にある。岩壁にへばりつく手足は、鋭く長い鉤爪が生えているらしく、その指先から肘にかけては、硬そうな鎧色の鱗がびっしりと覆つっていた。

人間の言葉を話してはいても、その身体の造りが、人間とは違つ、別の存在であることを如実に物語つていて。

まるで、物語に出てくる化物の下つ端みたいだと思つた。

空想の中で、自分が戦う悪の親玉の足下を、ちよろちよろとしていそうな弱い奴が、こんな姿をしている、とカラは思い描いていた。

しかしあくまで、その存在は物語（空想）の中のもので、自分が実際に、このよつた形で遭遇するなど、考へてもいなかつた。

一度目にしたら、そう簡単には忘れられない奇妙な蛇顔の男。間違ひなく、初めて目にする異形の存在。

けれど、どこかで、この奇妙な姿を見たことがある、とカラは思つた。

どこで？つい最近だ。どこで？光の中に出られないで、じっと獲物を見ていた。

この感じ、確かに。

「あ、思い出したつ。こいつアルをつけてた奴だ。この前、君が朝早く旅籠前の道を走つてた時に、その後をつけてた奴だ！」

四日前の早朝、アルの後をつけていた男。

陽の射す通りに出られないかのように、狭い路地の影にへばりつき、獲物を狙う蛇のように、アルを見ていたあの男だ。

アルは、大きな目を見開いて、カラを振り返った。手の震えが増したことを、カラははつきりと感じた。

「あたしの後を、つけていた？」

「そうだよ。ほら、あそこ、あの男。知ってる奴？まるで蛇みたいな顔した」

カラは天井を指差し、アルに小声で教えた。アルもカラの言葉に従い上を見たが、黒く、どこまでも深い闇しかそこにはなかつた。

「見えない。あんたの瞳が光つてるの以外、あたしには、こんな真つ暗じや、何も、見えない」

カラは今更に、他人は暗闇では物が見えないのだということを知つた。そして、見えないことが、より大きな恐怖を与えることも、アルの表情や声から感じられた。

蛇顔の男は細長い舌を数回、裂けた口から出し入れすると、にた

りと赤い口を開け、嫌な粘り声を上げて笑った。

「へえ、おまえ。いい田持つてんなあ？ それ、俺達と同じか？ 閣の中でも物が見えるのか？ へええ。人間にもまだそんな田、持つてるのがいんのなあ。 けどよう、その色は気に入らねえなあ。嫌あな、色だあ。 おまけによう、何？ おまえ、人間じやあないのか？ その身体、透けてんじやないかあ？ 人間の臭いふんふんのくせによお、闇に半分、溶け込みかけてるぜえ？ ひひい。おまえ、闇好きか？ へへえ、面白れえなあ」

カラに向けていた田を二田円のように細め、蛇顔はヒィヒィと奇妙な笑い声を上げると、田の玉をグルリと回転させ、今度はアルの顔を、舐めるように見た。

「ああ、しかしさあ、お姫さんから来てくれるとはあ、ありがてえことだあよ。 そろそろお招きに上がれって、言われてたんだよおなあ。 ああ、どうせならこいつちじやなくて、あっちの方に出向いてくれたらあそ、もつとありがてかつたのになあ。 そしたらあよ、運ぶ手間、省けたんだけどおなあ」

「ひ、姫つて、誰のことよ。 あたしの後つけてたって、いつたい、何のためよつ」

「”姫”つていいやあ、女だろ？ ここには女はあんたしかいないよな。 そうだよ、何度もつけた。 あんた、ほとんどは反対の町側の入り口からだつたけどよ、よく来たらう？ こっち側の外の大扉の前にも、よく立つてたらう？ 行きも帰りもあんた、注意を払つてたからあ、こっちがもつと注意を払つてやつてさあ、つけてたんだよう。 あんたさあ、あいつに、なんにもお、聞いてないんだあ？」

蛇顔男はまた奇妙な笑い声を上げた。

笑いながら、じりじりと場所を移動し、カラ達に近付いている。

カラはどうしたらよいのか分からなかつた。

危険。確実に危険が迫つていると感じているが、それがどういった危険で、どうやつて逃れればよいのか、分からなかつた。

首筋にぞわりと、冷たくざらついた感触が走る。胃がぎゅっと縮まり、身体が小刻みに震えている。口が、喉が、干乾びていく。無意識に、服の下に隠すように帯びていた短剣に手を伸ばしていた。常に身につけているようにと、ラスターから渡された護りの短剣。

短剣の柄を、助けでも求めるようにカラは握つた。

蛇顔は赤い舌を数回出すと、皿をさらりと細め、ぴたりと動きを止めた。

誰も、何の音もたてない沈黙が闇を覆つた。

しかし、それも束の間、シユツと矢の放たれるような音を聞いた直後、蛇顔はカラ達の前に、ゆらりゆらりと揺れながら立つていた。カラとアルは小さな悲鳴を上げ、互いを抱えあうように数歩後ろにさがつた。

「突然襲いかかるなんて、そんな非礼なことは、しないさあ。これでも、紳士なんだ。お姫さんのことは、ずっと見てるだけで、手を出さなかつたろお。いくらでも手を出して、喰える機会はあつたのにさあ……。へへえ。遠くで見ても思つたけどさあ、姫さん、やっぱり綺麗な顔してんなあ。ほんと、上の階あたりにある彫刻と同じ顔してるやねえ。ああ、あんたにはこの闇じやあ俺の顔、見えてねえのかあ？ 残念だなあ。俺も、結構いい顔してるんだあぜえ」

田の前に下りてきたことで、アルにも蛇顔の様子が、ぼんやりだが分かつた。自分達より弱冠高い位置に、赤い光が一つある。

「まあそんなんで、俺は紳士だから、ちゃんと言つてから襲う」というよ。あんた達を、俺、襲うよう。安心しな。姫さんは、出来るだけ無傷で連れてこいつて言われてるから喰わないよう。けど

蛇顔男はカラの顔を見て、舌を幾度も出し入れした。ぬらりとした、薄い鱗に覆われた顔には、薄笑いが常に浮かんでいる。

「黄色の田のガキは、なんも言われてないからなあ。喰つて、やるよお」

にたりと笑う裂けた口に、カラはぞつとした。細かな鱗のような歯が、前後二列にびっしりと生えているのが見えた。ぬらぬらと不気味な赤い舌が、口の中で別の生き物のように蠢いている。こんな口になんか喰われたくない。そう、本気で思つた。

アルは蛇顔の動きが見えず、カラは足が竦んで動けずについた。緊張に身体が強張り、息をすることにも、重い苦しさを感じる。その苦しさに抗うように、カラは頭を振つた。そのほんの僅かの間、蛇顔の姿が視界から消えた。

そして、カラが再び同じ場に視線を戻した時、蛇顔の姿はそこになかつた。

見間違つたかと思つた。

目を瞬き、今一度確認しようとした瞬間、カラは左頬に熱く鋭い痛みを感じ、続いて左肩にも、同じ痛みが走つた。

カラは短い叫びを上げ、掴んでいたアルの腕を離すと、大きく身をよじつた。

「な、なにっ、どうしたの、ねえっ！ ねえってばっ！ どうしたのよっ」

アルは硬い上ずつた声で、急かすようにカラに問い合わせ、答えを求めていた。

頬に手を当てるとい、生温かい、ぬるりとした液体が、カラの頬を伝い流れていた。左肩にも、じわりと生温いものが広がっていく。頬のぬめりを拭つて見ると、それは赤い、血だつた。

蛇顔はいつの間にか、もといた場所に立ち、爪に付いたカラの血を、長い二股の舌で嘗め取つて味わつていた。

「ガキはさあ、嫌いなんだけどよう、血は、美味いやねえ。甘いつていうか、濃いつていうか。おまえ、喰いではなさそうだけどよお、血の味はなかなか、いいじゃあないかあ」

蛇顔は裂けた赤い口から舌を出しながら、赤く光る目でカラを舐めるように見えた。

「あんたっ、怪我したのねっ？ こいつに、怪我をさせられたのね。どこの？ どこのをやられたの？」

アルは確かめるように、カラの腕を幾度も上下にさすつた。傷には触れなかつたが、肩の痛みにカラが小さく呻くと、アルはみると蒼ざめ、泣きそうな顔になつた。

「ど、どのくらいの傷なの？ 血が、たくさん出てるんでしょ？ ああ、見えないから、止血も出来ないじゃない？」

「だ、大丈夫、大丈夫だよ。頬つぺたと肩がちょっと切れただけだから。でも、あいつ、動きがすごく、速いよ」

カラの膝も身体も震えている。震えは、手を介してアルにも伝わっているに違いない。

情けない奴、と思われているだらうと思つた。けれど、そう思つたところで、震えは止められなかつた。

怖い。助けて。そんな言葉が、今にも口から漏れ出してしまいそうだつた。

だが、そんな言葉を口にするより先に、カラの身体に新たな緊張が走つた。

爪の血を舐め尽くした蛇顔が、じりと、わずかに姿勢を低くしたこと、カラの瞳は見逃さなかつた。

次の攻撃が来る。すぐに、来る。

「アルフ」

カラは思わずアルを突き飛ばすと、自分も後ろへ飛び退つた。足場が悪く尻餅をついてしまつたが、顔を下に向けることは、決してしなかつた。

寸前まで一人が立つていた闇間を、蛇顔は矢のように飛び抜けると、カラの開けた鉄扉の上壁部に、頭を下に向けてへばりついた。舌をちらちらと出しながら、腰を抜かし、バラバラに座り込んだ二人の子供を、細めた赤い目で見下ろしている。

「へえ？ よく、俺の動きが見えたなあ。まあ、折角の獲物。焦らせて愉しませてくれるつてのも、またいいものなのかもなあ。喰う愉しみの前に、弄ぶ愉しみ、を与えてくれてるつてえわけだ

あ」

残酷な光が、蛇顔の目の底で、熾火のよつにちらちらと踊り揺らめいている。

カラは、こんな赤い目に、かつて遭ったことを思い起した。
同じように、不気味で、残忍で、感情のない赤い目。 だがあの目は、この目以上に強い光を放ち、怖ろしかった。

背筋が寒くなつた。

赤い目に見下ろされていることが、カラは耐え難く不安で、不快で、吐き気を感じた。

岩に着いた手から、じわじわと体温を奪われていく気がした。
頭の芯に、じんとした痺れを感じる。

まるで、闇森で『影』を奪われた時のように。 心臓が、あの氷のような、ガサガサの枯れ枝の手で掴まれ、締め上げられるかのように、冷たく、痛く、苦しい。

あの目を見てはいけない、逸らすんだ、と、頭の奥でガンガンと鐘が鳴り続けている。

それなのに、カラの目は吸い寄せられるように、蛇顔の赤い目を見続けた。

緊張が視界を白く霞ませ、眩暈が襲つた。

もう、もう、だめだ……。

すうつと、意識が遠のきかけたその時、ふつと、暖かなものがカラの手に触れた。

はつと、閉じかけた目を見開き横を向くと、アルの両手が、カラの左手を包み込むように握つていた。

「あなたの金の瞳。 やっぱりいいわよ。 この暗闇であなたがどこにいるのか、あたしにもすぐに探し出せたわ。 その瞳の光が、導いてくれたお陰でね」

アルは、カラの瞳の光を頼りに、這つてここまで来たようだつた。カラの手をしっかりと握ると、アルはカラの瞳を見つめた。

「あんた、すつじく緊張してるでしょ？ 手、氷より冷たくなつてるわよ？」

アルの顔を見ると、いつも以上に白く蒼ざめ、表情は硬かつたが、それでも励ますように笑顔を作り、カラを見つめていた。

その懸命な笑顔が、カラの痺れた頭を覚ませた。自分がたくさんの中を流していたことに、カラはその時初めて気が付いた。右の手で、胸元のペンダントを握り緊めると、カラは側面の文字を指先でなぞり、ほう、とひとつ息を吐いた。

「あんた、じゃないよ。オレの名前は、カラ、だよ」

アルは黒の瞳を瞬かせると、先程までよりも自然な笑いを、顔一面に浮かべた。

「あら、失礼。で、カラ。まさか、腰を抜かして動けない、なんてこと、言わないわよね？」

「も、もちろんだよ」

温かなアルの手の感触と笑顔と言葉が、カラの硬くなっていた身体を柔らかくした。

カラはアルの手を握り返すと、小さな声でアルに質問を出した。

「アル、ここに来たこと、あるの？」

アルは小さく頭を振った。

「入ったことがあるのは、こことは反対側の地下なの。ここは今

日が初めて。でも、文献を読んで、およよその構造は、頭に入れてきたわ」

「じゃあ、その扉の先がどうなってるか、知ってる？　逃げ込んだら、追い詰められるだけに、ならない？」

「ここの先を行つたら、私が何度か出入りした反対側の出入り口に繋がつていて　その途中のどこかに、聖獣が閉じ込められているはずなの」

アルはカラの手を更に強く握り、力強い目で見つめた。　アルの震えも、まだ完全に止まつてはいなかつたが、声にはいつも調子と落ち着きが戻つてきていた。

「アル。　オレの左腕に、しつかり掴まつて、オレが合図したら、腕が押す方向に真つ直ぐ走つて。　あいつがいる壁の下。　そこにさつきの扉が、開いてるから」

「あたしだけ逃げろつて言つの？　そんな」

アルは蒼ざめた顔で、怒つた様に反論しかけたが、カラはアルの口を押さえ、言葉を遮つた。

「だつて、この闇の中じや、アルは何も見えないだう？　でも、オレは何もかも、見える。　あいつを倒せなくとも、撒くことくらいいは、出来るかもしねり。　だから」

アルは俯き、少しの間、眉間を曇らせ考え込んだが、顔を上げ、カラの瞳を真つ直ぐに見つめると、こくりと頷いた。

「 わかつたわ。 でも…… 無茶はしないで。 絶対よ」

アルの真剣な眼差しに、カラはぎこちなく笑つて見せた。

カラは小声で、行く先にぎのよつた石や窪みなどの障害があるかを伝えると、アルの腕を支えながら立ち上がつた。 そして、深く息を吸い込むと腹に力をいれ、拳をきつく握り、蛇顔の顔を睨みつけた。

いつまでも黙りこんで、自分が相手に怯えきつているなんて、思わせたくなかつた。

「 な、な、なんでオレが、お、お前なんかに喰われなきゃいけないんだよつ」

頑張つて張り上げたものの、自分でも可笑しいくらいにひっくり返つた声だつた。 それでも、沈黙しているよりはましだと思つた。

「 間の抜けたこと聞くガキだあなあ。 何でつてそりやあ、俺の目の前にいるから、だろう？」

蛇顔が壁に這わせた身体の向きを変え、目を細めた。 じりりと、蛇顔の周囲の空気が動くのが、カラの緊張した肌に伝わつた。

「 今だつ、走つてつ」

カラの押し示す方向へ、アルは素晴らしい跳躍をし、巧みに足下の障害を避け、飛び込むように扉の先へ駆け入つた。

アルを押すと同時に、カラは腰の短剣を素早く抜き、前に払つた。 とりあえず、相手の最初の一撃をかわすことだけに、全神経を集中させた。

真つ直ぐカラに襲い掛かつてきた蛇顔は、カラの振つた短剣の刃

をするりとかわすと、後方にくるりと円を描き、着地した。

カラは自分も、いつでも逃げ込めるよう扉を背にして立つた。

転ばないよう足下を注意しつつ、しかし、相手の動きも見逃さないよう、視線を蛇顔から決して逸らさず、短剣を前に突き出すように構えた。

期待はしていなかつたが、やはり傷を負わせることは出来なかつた。

いつか見た、ラスターの流れるような動きほどではないが、蛇顔の動きはやはり速い。

かすり傷の一つ負つていなことは、分かりきつていた。
ドクンドクンドクンと、耳の直ぐ後ろに心臓があるように、激しい鼓動が聞こえる。神経がきりきりと張り詰め、こめかみを痛ませた。蛇顔は左右に裂けた口の隙間から、割れた舌をしきりに出し入れし、愉しそうにカラの様子を見ていた。そのいやらしい笑い顔から、カラは決して目を逸らさなかつた。

「なんかよう、動いたらさあ、腹がもつとれあ、空いちまつたよ。お前の後にさあ、あの姫さんの血も、少しさあ、頂いちまおうかなあ。きっと、お前よりよう、美味しいだろうなあ」

言葉の後に、ひいひいと、粘る笑いを蛇顔は付け加え、弓形に細めた赤い眼で、カラの反応を愉しむように見ていく。

「そんなこと 絶対させるもんかっ」

カラの腹に怒りが生まれた。腹を焦がすような熱い怒りは、大きく膨らみ、腹から胸、そして頭へと駆け上がりつた。

田の前でにやついている蛇顔に、なんとしても一太刀、斬り付けてやりたいと思つた。

蛇顔の動きは早いが、爪でカラを引き裂こうとするため、攻撃の

際、脇から下に隙が生まれている。その隙を突いて、すり抜けざまに蛇顔の脇腹を切ることができれば。

姿勢を低くすると、カラは短剣を逆手に持ち直し、腹の横に付いた。呼吸を整え、飛び出すタイミングを、計った。

「ひつ、いいひいいひいい

突然、奇妙な叫びが蛇顔の口から漏れた。

蛇顔は顔を引きつらせ、恐怖の叫びをなおも上げながら、縮こまるように、不恰好にその場に座り込んだ。

「ひいいい。そ、その光。そいつ、そいつ　ひいいひいい
いつ」

蛇顔は、震える鉤爪でカラの短剣を指差し、じりじりと後方へ退いていく。

蛇顔の指し示すままに視線を短剣に移すと、柄の先端にあるオスタイルが、普段よりも数倍強い、黄金色の光を放っていた。

「オスタイルが、光つてる」

思わず、カラもその光に目を奪われた。

普段から、常に淡い光を湛える神秘的な石であったが、今は常に上にはつきりと、闇夜を照らす用のよう、煌煌とした光を放つている。

威圧的でなく、しかし、気高さを感じさせる黄金の光。

「どうしたの。大丈夫なの？」

扉の奥から、アルの切迫した声が飛んできて、カラははたと我に

返った。

慌てて視線を前に戻すと、座り込んでいたはずの蛇顔は、いつの間にか姿を消していた。

「あ、あれ。 いない。 いない、や……」

カラの膝は小刻みに震えていた。 短剣を持つ手も細かく上下している。

しかし、とりあえず、目の前の危険はなくなっている。 少なくとも、カラの目に見えないとここまで、退いてしまったようだつた。ほつと大きく息を吐き出すと、カラはいま一度、何者もいないことを確かめ、再び、光りを放つ貴石に目を移した。

「カラ。 本当に大丈夫なの？ サっき何か光ったみたいだつたけど」

アルは、扉の陰から顔を僅かに覗かせていた。 こちらの様子が気がかりで、じつと待つてなどいられない、といった様子だった。

「大丈夫。 今、そっちに行くから」

オステイルの光は、幾分小さくなつていたが、今だ闇を明るく、柔らかく照らしている。

カラは光を放つ短剣を手に、アルの待つ扉の先へと走つた。

お疲れ様でした。

最後まで読んで頂き、本当に有難うございました。
話は第三章『白日の円』へと続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9935g/>

新レーゲスタ創世譚 第二章 『聖獣狩り』

2011年9月11日20時43分発行